

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県鳥取市

宮谷26号墳

2012

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県鳥取市

宮谷26号墳

2012

鳥取県教育委員会



1 調査地および宮谷・本高古墳群：調査後の遠景（西から）



2 調査区：調査後の全景（上空から）



1 埋葬施設：掘方検出状況（北東から）



2 墓壙1・2：検出状況（南東から）



1 墓壙2：B-B'断面（南西から）



2 墓壙2：A-A'断面（東から）

巻頭図版 4



1 墓壙 2：土器出土状況（東から）



2 墓壙 2：土器出土状況（南西から）



3 墓壙 2：土器出土状況（南東から）



1 墓壙 2 : 完掘状況 (南東から)



2 墓壙 2 : 完掘状況、墓壙 1 : 検出状況 (南西から)



1 墓壙1：A-A'断面（北西から）



2 墓壙1：土器出土状況およびB-B'・C-C'断面（南西から）



1 墓壙 1 : 土器出土状況 (南東から)



2 墓壙 1 : 完掘状況 (北東から)



1 墳丘盛土：A-A' 断面、M2-7 層を中心に（南西から）



2 墳丘盛土：B-B' 断面、墳丘北東側（北から）

序

国土交通省によって整備が進められている山陰自動車道は、鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする延長約 380km の高速道路です。現在、鳥取県東部では、その一環として、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3km の区間で一般国道 9 号（鳥取西道路）改築工事が行われています。

この工事に伴い、鳥取県教育委員会では平成 20 年度から工事計画地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。平成 21 年度からは財団法人鳥取県教育文化財団に現地での発掘作業や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

平成 22 年度に発掘調査を実施した宮谷 26 号墳では、古墳時代後期に築造された墳丘や埋葬施設が良好な状態で検出され、副葬された土器や鉄製品などの遺物が出土しました。本書はその調査の記録と成果をまとめたものです。ここに記録された調査成果が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

また、発掘調査および本書の作成に当たり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々から一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

鳥取県教育委員会

教育長 横 濱 純 一

例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成22（2010）年度に実施した宮谷^{みやだに}26号墳の発掘調査報告書である。
- 2 宮谷26号墳は鳥取市嶋字下モ川向に所在する。調査面積は700㎡である。
発掘調査は、平成22年7月20日に着手し、10月5日に終了した。遺物整理と報告書の編集は、発掘調査終了後、引き続き平成24（2012）年3月末日まで行った。
- 3 本調査の略号は「宮谷26号墳09」である。
- 4 発掘調査は財団法人鳥取県教育文化財団調査室美和調査事務所調査第1担当の濱田竜彦（主査）と下江健太（副査）が担当し、株式会社玉川文化財研究所の支援を受けた。株式会社玉川文化財研究所の現場代理人は富士原博之、支援調査員は香川達郎、調査補助員は北平朗久である。
- 5 遺跡での図面作成等は財団法人鳥取県教育文化財団の指示のもと、株式会社玉川文化財研究所が行った。
- 6 遺跡での写真撮影は株式会社玉川文化財研究所と財団法人鳥取県教育文化財団が行った。
- 7 遺跡で作成した図面の再編集、遺物実測及び浄書等は、財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事と整理作業員が行った。
- 8 遺物の写真撮影は財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事が行った。
- 9 本書は、濱田と財団法人鳥取県教育文化財団調査室美和調査事務所調査第1担当の山梨千晶が執筆し、濱田が編集を行った。
- 10 本調査に係る図面、写真や出土した遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 11 調査地の地質について、赤木三郎氏（鳥取大学名誉教授）に御指導を頂いた。
- 12 出土した須恵器の胎土については白石純氏（岡山理科大学准教授）に分析と報告をお願いした。
- 13 火山灰の分析は株式会社古環境研究所に依頼した。
- 14 鉄製品のX線写真の撮影時に、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
- 15 発掘調査及び報告書の作成に当たり、下記の方々、機関から御指導、御助言、御支援いただいた。記して感謝申し上げます。

赤木三郎（鳥取大学名誉教授）、飯田英樹（国際文化財株式会社）、高田健一（鳥取大学）、鳥取市教育委員会、財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター

凡 例

- 1 本遺跡では国土座標第V系に基づき地区割りを設定した。
平面図の方位は座標北を示し、図中にX・Y座標軸をm単位で表記した。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）、鳥取市作成の都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆して使用したものである。
- 4 古墳番号は鳥取市の遺跡台帳を踏襲し、埋葬施設の番号は掘削の前後関係や位置を勘案して付した。
- 5 本遺跡の調査及び本書の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2007年版に基づき、土の色相、明度、彩度を観察し、命名したものである。地層観察用畦の観察面は定期的に散水を行い、極力、湿った状態を保つように留意しながら、色相、明度、彩度を判断するようにした。また、堆積中に混入物が含まれる場合、粒径が2mm以上を礫、それよりも小さなものを地山粒と記し、礫の大きさについては、地層観察用畦の観察面に視認できる最大の礫の径を記した。
- 6 遺構平面図の縮尺は統一していない。
- 7 遺物は出土地点、遺構毎に通し番号を付した。挿図と図版の番号は全て共通している。
縮尺は土器及び石製品を1/4、鉄製品を1/2で示した。
土器の断面は土師器を白塗り、須恵器を黒塗りとした。
- 8 本書における遺構及び遺物の時期決定には以下の文献を参考とした。
田辺昭三編 1981年『須恵器大成』角川書店
中村浩 1981年『和泉陶邑の研究』柏書房
宮崎泰史・藤永正明編 2006年『年代のものさし—陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館

目次

序・例言・凡例・目次・挿図一覧・挿表一覧・巻頭図版一覧・図版一覧

第I章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯…………… (濱田) 1
- 第2節 調査の経過…………… (濱田) 2
- 第3節 調査体制…………… (濱田) 5

第II章 宮谷 26 号墳の位置と環境

- 第1節 宮谷 26 号墳の位置と地理的環境…………… (濱田) 6
- 第2節 野坂川流域の遺跡と歴史的環境…………… (濱田) 7
- 第3節 古海古墳群、本高古墳群、宮谷古墳群の再検討…………… (濱田) 12

第III章 発掘調査と遺物整理の方法

- 第1節 調査地の地区割りとグリッド名…………… (濱田) 14
- 第2節 発掘調査と記録の対象…………… (濱田) 15
- 第3節 発掘調査と記録作成の方法…………… (濱田) 17
- 第4節 出土遺物の整理作業…………… (濱田) 20

第IV章 調査の成果

- 第1節 調査前の墳丘…………… (濱田) 21
- 第2節 調査地内の基本層序…………… (濱田) 22
- 第3節 墳丘と出土遺物…………… (濱田) 27
 - 第1項 墳丘の形状と規模…………… 27
 - 第2項 旧地形…………… 28
 - 第3項 墳丘の構築と盛土の特徴…………… 33
 - 第4項 墓壙上盛土と出土遺物…………… 38
- 第4節 埋葬施設と出土遺物…………… (濱田・山梨) 40
 - 第1項 埋葬施設の検出…………… 40
 - 第2項 墓壙 1 と出土遺物…………… 45
 - 第3項 墓壙 2 と出土遺物…………… 51

第V章 自然科学分析

- 第1節 宮谷 26 号墳出土須恵器の胎土分析…………… (白石 純) 54
- 第2節 宮谷 26 号墳におけるテフラ (火山灰) 分析…………… (株式会社古環境研究所) 57

第VI章 総括…………… (濱田) 61

挿図一覧

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|-------------------------------|
| 第 1 図 | 鳥取西道路の路線図と調査地の関係 | 第 21 図 | 墓壙上盛土 (M1 層) 出土遺物 |
| 第 2 図 | 調査地の位置 | 第 22 図 | 埋葬施設 (墓壙 1・2) 平面図 |
| 第 3 図 | 調査の経過 | 第 23 図 | 埋葬施設 (墓壙 1・2) 断面図 |
| 第 4 図 | 鳥取西道路の遺跡を掘る! (第 18 号) | 第 24 図 | 埋葬施設 (墓壙 1・2) 復元平面図 |
| 第 5 図 | 鳥取県と遺跡の所在地 | 第 25 図 | 墓壙 1 平・断面図 |
| 第 6 図 | 宮谷 26 号墳周辺の遺跡 | 第 26 図 | 墓壙 1 遺物出土状況 1 |
| 第 7 図 | 宮谷 26 号墳周辺の古墳 | 第 27 図 | 墓壙 1 遺物出土状況 2 |
| 第 8 図 | 地区割り模式図 | 第 28 図 | 墓壙 1 出土遺物 |
| 第 9 図 | 調査地の地区割りと土層観察用畦の
設定位置 | 第 29 図 | 墓壙 2 平・断面図 |
| 第 10 図 | 古墳の立地 (調査前の断面図、第
11 図 A-A') | 第 30 図 | 墓壙 2 遺物出土状況 1 |
| 第 11 図 | 調査前の地形と墳丘 | 第 31 図 | 墓壙 2 遺物出土状況 2 |
| 第 12 図 | 調査地内の地層 | 第 32 図 | 墓壙 2 出土遺物 |
| 第 13 図 | 墳丘の形状と周辺の地形 | 第 33 図 | 宮谷 26 号墳出土須恵器の比較 1 |
| 第 14 図 | 墳丘平面図 | 第 34 図 | 宮谷 26 号墳出土須恵器の比較 2 |
| 第 15 図 | 墳丘断面図 | 第 35 図 | 宮谷 26 号墳と高住平田遺跡出土須恵
器の比較 1 |
| 第 16 図 | 旧地形の復元 | 第 36 図 | 宮谷 26 号墳と高住平田遺跡出土須恵
器の比較 2 |
| 第 17 図 | 墳丘盛土 M2-7 層詳細図 | 第 37 図 | 宮谷 26 号墳出土須恵器の産地同定 1 |
| 第 18 図 | 墳丘構築過程模式図 1 | 第 38 図 | 宮谷 26 号墳出土須恵器の産地同定 2 |
| 第 19 図 | 墳丘構築過程模式図 2 | 第 39 図 | 宮谷 26 号墳 4b-2 層の岩石学的諸特
性 |
| 第 20 図 | 墓壙上盛土 (M1 層) 遺物出土状況
および土坑平・断面図 | 第 40 図 | テフラの顕微鏡写真 |

挿表一覧

- | | | | |
|-------|-------|-------|------------------------|
| 第 1 表 | 土器観察表 | 第 3 表 | 宮谷 26 号墳出土須恵器の胎土分析一覧 |
| 第 2 表 | 鉄器観察表 | 第 4 表 | 宮谷 26 号墳 4b-2 層の鉍物分析結果 |

巻頭図版一覧

巻頭図版 1

- 1 調査地および宮谷・本高古墳群：調査後の遠景（西から）
- 2 調査区：調査後の全景（上空から）

巻頭図版 2

- 1 埋葬施設：掘方検出状況（北東から）
- 2 墓壙 1・2：検出状況（南東から）

巻頭図版 3

- 1 墓壙 2：B-B' 断面（南西から）
- 2 墓壙 2：A-A' 断面（東から）

巻頭図版 4

- 1 墓壙 2：土器出土状況（東から）
- 2 墓壙 2：土器出土状況（南西から）
- 3 墓壙 2：土器出土状況（南東から）

巻頭図版 5

- 1 墓壙 2：完掘状況（南東から）
- 2 墓壙 2：完掘状況、墓壙 1：検出状況（南西から）

巻頭図版 6

- 1 墓壙 1：A-A' 断面（北西から）
- 2 墓壙 1：土器出土状況および B-B'・C-C' 断面（南西から）

巻頭図版 7

- 1 墓壙 1：土器出土状況（南東から）
- 2 墓壙 1：完掘状況（北東から）

巻頭図版 8

- 1 墳丘盛土：A-A' 断面、M2-7 層を中心に（南西から）
- 2 墳丘盛土：B-B' 断面、墳丘北東側（北から）

図版一覧

図版 1

- 1 調査地および宮谷古墳群：野坂川の上流側からの遠景（南西から）
- 2 調査地および古海・宮谷・本高古墳群：調査前の遠景（西から）

図版 2

- 1 調査地および古海古墳群：調査後の遠景（南西から）
- 2 調査地および宮谷古墳群：調査前の遠景（北西から）

図版 3

- 1 調査地：野坂川西岸からみた調査前の遠景（北西から）
- 2 調査地：野坂川西岸からみた調査後の遠景（北西から）

図版 4

- 1 墳丘：宮谷 27 号墳からみた調査前の墳丘側面（南西から）

- 2 墳丘：宮谷 27 号墳からみた調査後の墳丘側面（南西から）

図版 5

- 1 墳丘：測量中の墳丘側面（北東から）
- 2 墳丘：調査後の墳丘側面（北東から）

図版 6

- 1 墳丘：調査後の墳丘（北西から）
- 2 墳丘からの眺望：嶋集落および野坂川の上流部を望む

図版 7

- 1 試掘トレンチ：埋土除去状況（南東から）
- 2 試掘トレンチ：埋葬施設に設定されたサブトレンチ（南東から）

図版 8

- 1 試掘トレンチ：原位置に保存されていた土器片の再検出状況（南西から）
- 2 墓壙上盛土：土器出土状況（南東から）

図版 9

- 1 墓壙上盛土：土器出土状況（南西から）
- 2 墓壙上盛土：土坑上面における土器（第 21 図 1 等）出土状況（南東から）

図版 10

- 1 墓壙上盛土：土器（第 21 図 3）出土状況（南西から）
- 2 墓壙上盛土：土坑検出状況および土層断面（北西から）

図版 11

- 1 墓壙 2：第 30 図 A-A' 断面および土器出土状況（南から）
- 2 墓壙 1・2：第 23 図 A-A' 断面、墓壙 2 を中心に（北西から）

図版 12

- 1 墓壙 2：第 30 図 A-A' 断面、土器出土部分を中心に（南東から）
- 2 墓壙 2：土器出土状況全景（南東から）

図版 13

- 1 墓壙 2：土器出土状況（南西から）
- 2 墓壙 2：第 26 図 A-A' 断面、土器出土部分を中心に（北西から）

図版 14

- 1 墓壙 1：土器出土状況（北西から）
- 2 墓壙 1：土器出土状況（南西から）
- 3 墓壙 1：土器出土状況（南東から）

図版 15

- 1 墓壙 1：土器出土状況（南西から）
- 2 墓壙 2：鉄器（第 28 図 12）出土状況（北西から）

図版 16

- 1 墓壙 1：完掘状況（南東から）
- 2 墓壙 1 完掘時の墳丘頂部平坦面（南東から）

図版 17

- 1 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面（南西から）
- 2 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面（南東から）

図版 18

- 1 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面、M2-4・6・7

層を中心に（南西から）

- 2 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面、墳丘裾部、M2-5・6 層を中心に（西から）

図版 19

- 1 墳丘盛土および埋葬施設 1・2：第 15 図 B-B' 断面、墓壙 2 を中心に（北西から）
- 2 墳丘盛土：第 15 図 B-B' 断面、墳丘北東側（西から）

図版 20

- 1 墳丘盛土：第 15 図 B-B' 断面、墳丘南西側（西から）
- 2 墳丘盛土：第 15 図 C-C' 断面（北東から）

図版 21

墓壙 2 出土土器

図版 22

- 1 墓壙 1 出土土器
- 2 墓壙上盛土出土土器

図版 23

墓壙上盛土、墓壙 1 出土土器

図版 24

墓壙 1 出土土器

図版 25

墓壙 2 出土土器 1

図版 26

墓壙 2 出土土器 2

図版 27

墓壙 1・2 出土鉄器

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯

宮谷 26 号墳は千代川の支流、野坂川の東岸に連なる丘陵の斜面に所在する（第 1・2 図）。一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築に伴って、平成 22（2010）年度に発掘調査を実施した。

現在、鳥取県内では、中国横断自動車道路姫路鳥取線や山陰自動車道等の幹線道路整備が推進されている。宮谷 26 号墳の発掘調査契機となった鳥取西道路（鳥取市本高一鳥取市青谷町青谷、全長 19.3km）の建設は山陰自動車道の一部となる事業である（第 1 図）。

ところで、鳥取西道路の計画地内には数多くの遺跡が周知されている。その取扱について国土交通省、鳥取県、鳥取市が協議を行い、計画地内に所在する遺跡の状況を把握するために、平成 17 年度から鳥取県教育委員会と鳥取市教育委員会による計画地内の踏査と、鳥取市教育委員会による試掘調査が実施されることになった。

今回、発掘調査を実施した宮谷 26 号墳は、平成 20(2008) 年 9 月 24 日から 10 月 1 日に行われた試掘調査で新たに存在が確認されたもので、もともと周知の古墳ではなかった。トンネルの建設地点に所在するため、工法を変更しても保存が困難なことから、国土交通省、鳥取県、鳥取市による協議と文化財保護法第 94 条による手続きを経て、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から発掘調査を委託された鳥取県教育委員会が平成 22(2010) 年度に発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査、出土遺物の整理、報告書の作成は、鳥取県教育委員会から発掘調査を再委託された財団法人鳥取県教育文化財団が行い、発掘調査について株式会社玉川文化財研究所の支援を受けた。



第 1 図 鳥取西道路の路線図と調査地の関係



第2図 調査地の位置

第2節 調査の経過

調査着手 財団法人鳥取県教育文化財団と株式会社玉川文化財研究所の間で発掘調査の支援業務に係る委託契約を締結した後、平成22(2010)年7月20日から現地調査に着手した。

調査前の空撮及び地形測量とグリッド杭の打設 調査地内の下草等を刈り、墳形及び墳丘裾部を確認した。その後、調査前の地形等を記録するため、7月21日にラジコンヘリコプターによる空中撮影、7月22日から基準点及び水準点の移動、グリッド杭の打設、地形測量等を実施した。

表土掘削 7月28日から人力による表土掘削に着手した。まず、調査地内に地層観察用畔を設定し、表土掘削を開始した。さらに、鳥取市教育委員会が平成20(2008)年度に行った試掘調査時に設けたトレンチを再発掘し、埋葬施設の掘方と、その上面から出土していた須恵器片の保存状態を確認した。

墳丘の断ち割りと埋葬施設の検出 8月3日から、表土剥ぎを開始した。さらに、等高線に直交する方向に地層観察用畔 A-A' ラインを設定し、サブトレンチを掘削(第3図左上)、墳丘下部の基盤層を確認した。猛暑が続き、熱中症対策講習会等を開催しながら作業を継続、18日から埋葬施設上の盛土(墓壇上盛土)を掘り下げ、試掘調査時に出土していた須恵器片の出土状況を記録し、取り上げを行った。その後、埋葬施設の検出を試みたが、埋葬施設内の埋土と墳丘盛土の違いが分かりにくく、検出に時間を要した。埋葬施設の位置と形状が概ね把握できたのは26日のことである。



8月5日 表土剥ぎ



9月10日 墓壙2内の土器検出作業



9月15日 墓壙1内の埋土掘削作業



9月29日 現地調査終了

第3図 調査の経過

埋葬施設の調査 検出後、埋葬施設の調査を進めることにした。埋葬施設の南西側は、基盤の角礫凝灰岩層を掘り込んでおり、掘方を容易に検出できた。ところが、墳丘盛土を掘り込む北東側の掘方は不明瞭で、平面的に全体を掘り下げていくことは難しいと判断した。そこで、埋葬施設にサブトレンチを設けて、土層断面で埋土の違いを確認しながら埋葬施設の掘り下げを行ったところ、埋葬施設には、主軸を同じくする大小2基の墓壙が重複していることが判明した。9月1日のことである。これ以降、最初に設けられた埋葬施設を「墓壙1」、その上に設けられた埋葬施設を「墓壙2」と名付け、墓壙2から墓壙1の順に調査を進めることにした。

墓壙2の調査 9月6日から埋土の掘り下げを開始、複数の須恵器が早々に出土した。小さな墓壙であるが多量に須恵器を伴っていることが明らかになり、慎重に掘り下げを行うが、軟質で劣化の著しい須恵器が多く、その検出は困難を極めた（第3図右上）。7日に土層断面の記録、途中、台風の影響による調査中断を経て、10日に須恵器の出土状況を写真撮影、13日に墓壙2の掘方および須恵器の出土状況を実測し、須恵器を取り上げ、14日に完掘写真を撮影した。

墓壙1の調査 9月15日から埋土の掘り下げを開始した。長軸に沿ってサブトレンチを掘り下げた際に埋葬施設の南西端に須恵器が存在することを確認していたので、他の遺物の有無に注意しながら慎重に埋土を掘り下げていった（第3図左下）。16・17日に土層断面の記録、18日に須恵器等の出土状況を写真撮影、21日に須恵器等を実測、取り上げを行い、24日に完掘写真を撮影した。

調査後の空撮 9月18日、墓壇1の埋土を完掘した段階で、ラジコンヘリコプターによる空撮を実施、調査後の古墳の全景を写真に記録した。

墳丘盛土の除去と撤収 9月25日から墳丘盛土の掘り下げを開始した。28日以降、土層観察用畦の断面を分層し、写真撮影、実測を行い、主な発掘作業を終了した(第3図右下)。その後、10月1日に墳丘下部で検出した火山灰の堆積を採集、4日に現地に設置していた機材を片付け、5日に撤収作業を完了した。

情報発信 調査期間中に、随時、財団法人鳥取県教育文化財団調査室のホームページ(註1)や同美和調査事務所の広報誌(第4図、註2)を通じて調査成果の発表を行った。なお、調査地が急峻な斜面にあり、見学者の安全が十分に確保できないことから、現地説明会の開催は断念した。

整理作業 出土遺物を財団法人鳥取県教育文化財団調査室美和調査事務所に持ち帰り、水洗、注記、接合、復元、実測図の作成を行った。鉄製品についてはX線撮影を行い、細部の観察をした。また、現地で作成した図面や写真をもとに遺構の再検討や、出土遺物の検討を行い、平成24年3月末に遺物、記録資料等の収納を終えた。

註1 財団法人鳥取県教育文化財団調査室ホームページ

<http://business4.plala.or.jp/kyo-bun/chosasitsu%20new.htm>

註2 財団法人鳥取県教育文化財団調査室美和調査事務所編 2010年『鳥取西道路の遺跡を掘る!』

第16～18号



第4図 鳥取西道路の遺跡を掘る! (第18号)

第3節 調査体制

鳥取県教育委員会

教育長 横濱純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課

課長 植田司郎（平成22年度）、上山憲二（平成23年度）

歴史遺産室長 中原 斉

課長補佐兼主幹 田貝 隆

副主幹 福市 信

文化財係長 北浦弘人

文化財主事 高尾浩司（平成22年度）、大野哲二（平成23年度）

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局長 漆原貞夫

事務職員 岡田美津子

調査室

室長 松井 潔（美和調査事務所長兼務） 鳥取県教育委員会から派遣

次長 石本富正

事務職員 福田早由里

美和調査事務所 調査第1担当

副主幹 濱田竜彦（主任発掘調査監理者） 鳥取県教育委員会から派遣

文化財主事 中尾智行 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣

文化財主事 下江健太（発掘調査監理者） 鳥取県教育委員会から派遣

文化財主事 山梨千晶 鳥取県教育委員会から派遣

事務職員 植木智子

発掘調査支援業者

株式会社玉川文化財研究所

現場代理人 富士原博之 支援調査員 香川達郎 調査補助員 北平朗久

調査協力

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所

鳥取市教育委員会、財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター

第Ⅱ章 宮谷 26 号墳の位置と環境

第 1 節 宮谷 26 号墳の位置と地理的環境

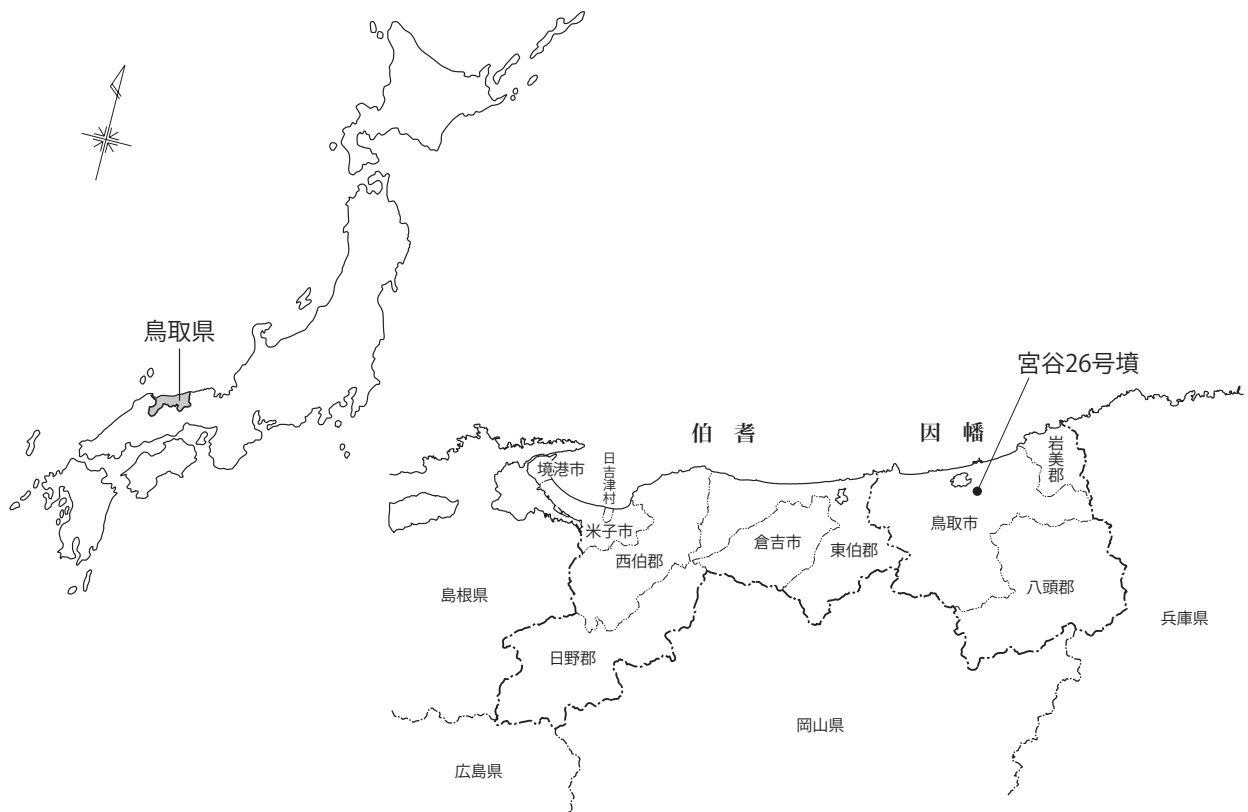
1. 宮谷 26 号墳の位置 (第 5～7 図)

所在地 鳥取県鳥取市嶋、宮谷に広がる宮谷古墳群の中にあり、鳥取市嶋字下モ川向に所在する。鳥取市遺跡分布地図に登録されている遺跡番号は 1-0459 である。

鳥取県 (第 5 図) 鳥取県は日本海側に面した中国地方の北東部に位置している。現在、4 市 14 町 1 村の自治体があり、人口は約 59 万人、県庁の所在地は鳥取市である。県域は東西約 120km、南北約 20～50km、面積 3,507km²、東西に細長い形状をしている。近世までは、県東部が因幡国、中・西部が伯耆国と呼ばれていた。

鳥取市 (第 5 図) 平成 16 (2004) 年 11 月に鳥取市と岩美郡国府町、福部村、八頭郡河原町、用瀬町、佐治村、及び気高郡気高町、鹿野町、青谷町が合併して、新たな鳥取市となり、平成 17 (2005) 年に特別市に移行した。人口は約 20 万人、市域は 765.66km²、南側は岡山県と兵庫県の県境に接している。古代には国府町に因幡国庁が置かれ、近世には因伯二国を統治した鳥取池田家の藩政の中心地であった。

嶋 (第 6 図) 宮谷 26 号墳が所在する嶋は、千代川の支流、野坂川中流域にある。島とも書く。野坂川西岸の自然堤防上に集落が形成されており、周囲には水田が広がっている。古くは因幡国高草



第 5 図 鳥取県と遺跡の所在地

郡野坂郷に含まれていた。永正 10（1513）年 6 月 10 日の日付がみえる山名豊頼宛行状には「野坂嶋村」の村名が記されており、集落の成立が中世以前にさかのぼることがわかる。

宮谷古墳群と宮谷 26 号墳（第 6・7 図） 千代川支流の野坂川と有富川の間にあり、北東方向に延びる細長い丘陵に分布する古墳のうち、主に嶋地内に所在する古墳に「宮谷」の名が冠せられており、宮谷古墳群として周知されている（第 6 図）。鳥取市遺跡分布地図では丘陵の稜線を境に、野坂川に面した宮谷と嶋地内に分布する古墳に「宮谷」、有富川に面した本高地内に分布する古墳に「本高」、丘陵北東部の古海地内に分布する古墳に「古海」の名が与えられている。しかし、丘陵上には嶋、本高、古海、徳尾の字界が交差しており、必ずしも古墳に付された名称と地名が対応関係にはない（第 7 図）。なお、周知の宮谷古墳群には古海古墳群に近接する一群と本高古墳群との境界に点在する一群がある。前者は嶋地内、後者は宮谷地内に所在するもので、宮谷 26 号墳は前者に属す円墳である。

2. 宮谷 26 号墳周辺の地理的環境（第 6 図、図版 6-2）

千代川と鳥取平野（第 6 図） 鳥取県は中国地方の脊梁山地から日本海にいたる北側斜面にあり、県東部には開析の進んだ海拔 1,200 m 以下の山地が発達している。千代川は八頭郡智頭町に所在する沖ノ山（1,319.0 m）に源を発する一級河川で、袋川や野坂川等の支流と合流しながら日本海に注ぐ。下流域には第四紀沖積世に浸食谷が埋め立てられて鳥取平野が形成されている。

千代川の東岸には急峻な山並みが連なり、扇ノ山から国府町の山地を経て久松山、摩尼山等の低い山並みが海岸付近にまで続く。一方、西岸には、野坂川や有富川の流域に、標高 400 m 付近を境に緩やかな傾斜を描く準平原状の山地が広がり、両河川の浸食により、谷底平野と同一方向に延びる細長い丘陵が交互に連続している。また、千代川の河口周辺には鳥取砂丘が発達しており、西岸に形成された砂丘の後背部には湖山池と呼ばれる潟湖が生じている。

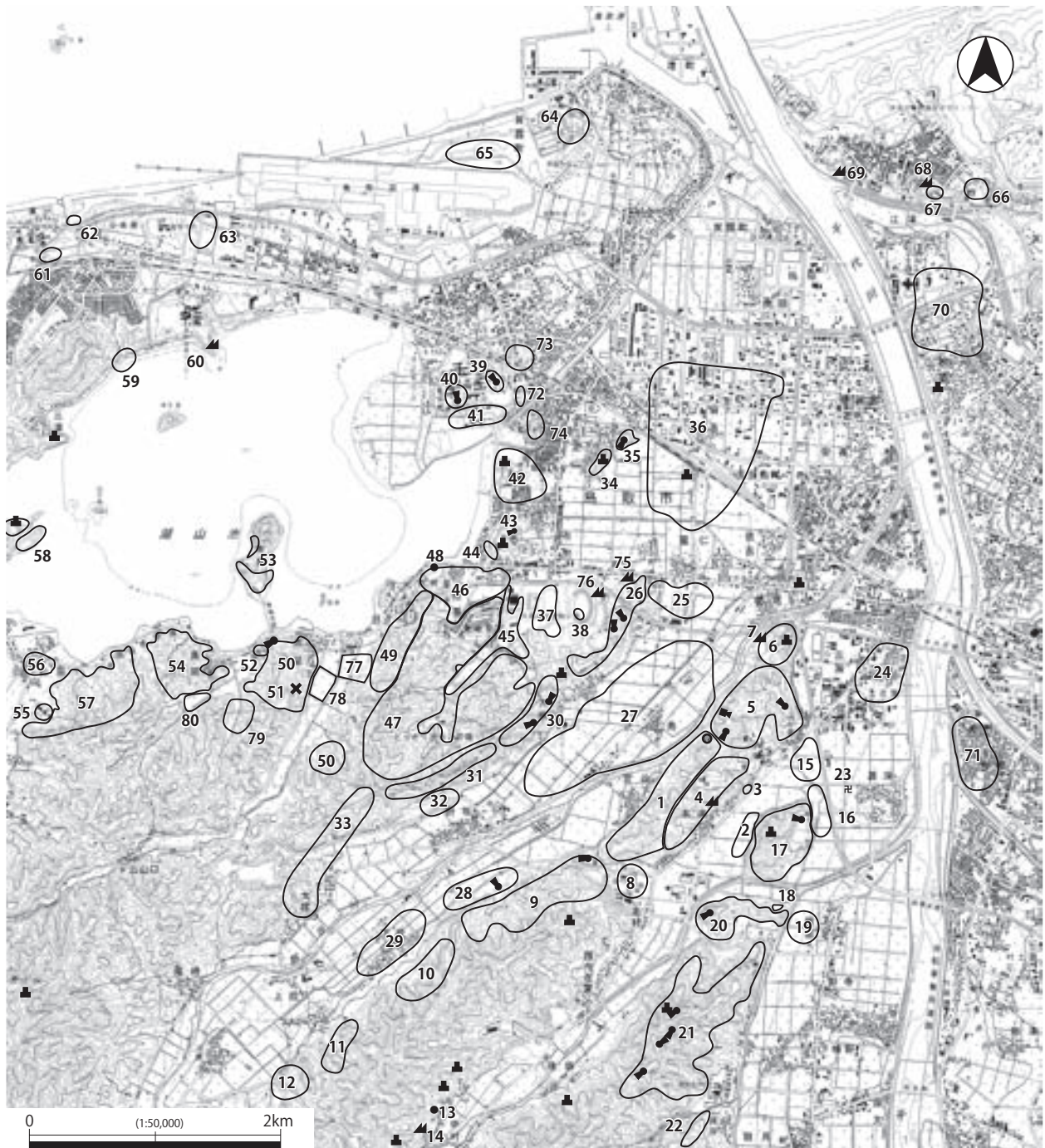
野坂川（第 6 図） 鷲峰山と高山の谷間を源流とする河川で、鳥取市安蔵から北東に流下し、上原、上段、下段、野坂、宮谷、嶋、徳尾を経て安長で千代川に合流する。流路延長は約 22.1km、表流水は不安定で渇水期には伏流水となる。嶋付近では宮谷古墳群が所在する東岸の丘陵沿いを流れる。また、上流部の松上付近には一部に峡谷が認められ、中流部の上段や下段には河岸段丘が発達している。

宮谷古墳群の地質 『鳥取県地質図説明書』によると、野坂川東岸の宮谷、嶋地内の丘陵は後期中生代の第三紀侵入岩類（鳥取花崗岩）の分布域に含まれている（鳥取県企画室 1966）。調査地直下の工事法面を観察したところ、風化の進んだ凝灰角礫岩や花崗岩の角礫や円礫を多量に含む地層が確認できた。最大直径 2 m ほどの花崗岩も含まれている。この地層は花崗岩等を取り込んだ凝灰角礫岩が堆積したもので、中新世に形成された鳥取層群下位の河原火砕岩層が第三紀侵入岩類（鳥取花崗岩）を覆っていると考えられる。また、工事法面には吉岡断層の延長と推測される断層が認められた。

宮谷 26 号墳及び宮谷古墳群からの眺望（図版 6-2） 宮谷 26 号墳は野坂川に面した緩斜面に築造された古墳で、北西から南西側に眺望が開けている。北西側には野坂川の北岸に広がる大桝遺跡、さらに、その北側の丘陵に展開する大桝古墳群や里仁古墳群を見渡せる。

第 2 節 野坂川流域の遺跡と歴史的環境

野坂川の流域にはたくさんの遺跡が分布している（第 6 図）。以下、宮谷 26 号墳を築造した集団



- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 宮谷古墳群 | 16 菖蒲遺跡 | 31 野坂古墳群 | 43 布勢1号墳 | 58 岩本第1遺跡 | 71 古市遺跡 |
| 2 本高弓ノ木遺跡 | 17 釣山古墳群 | 32 野坂遺跡 | 44 帆城遺跡 | 59 中ノ茶屋古墳群 | 72 湖山第1遺跡 |
| 3 本高下ノ谷遺跡 | 18 本高円ノ前遺跡 | 33 大塚古墳群 | 45 東桂見遺跡 | 中ノ茶屋遺跡 | 73 湖山第3遺跡 |
| 4 本高古墳群 | 19 服部遺跡 | 34 足山古墳群 | 46 桂見遺跡 | 60 三津所在横穴 | 74 湖山古墳群 |
| 5 古海古墳群 | 20 服部古墳群 | 35 石場山古墳群 | 47 桂見古墳群 | 61 末恒遺跡 | 75 里二第1横穴 |
| 6 徳尾古墳群 | 21 下味野古墳群 | 36 岩吉遺跡 | 48 西桂見墳丘墓 | 62 溝川遺跡 | 76 里二第2横穴 |
| 7 松ヶ谷横穴群 | 22 篠田古墳群 | 37 布勢第1遺跡 | 49 倉見古墳群 | 63 長者石遺跡 | 77 高住井手添遺跡 |
| 8 北村恵儀谷遺跡 | 23 菖蒲廢寺 | 38 布勢第2遺跡 | 50 高住古墳群 | 64 賀露第1遺跡 | 78 高住平田遺跡 |
| 9 小森山古墳群 | 24 古海遺跡 | 39 大熊段古墳群 | 51 高住銅鐸出土地 | 65 賀露第2遺跡 | 79 良田平田遺跡 |
| 10 下段古墳群 | 25 里仁遺跡 | 大熊段遺跡 | 52 塞ノ谷遺跡 | 66 浜坂遺跡 | 80 良田中道遺跡 |
| 11 上段古墳群 | 26 里仁古墳群 | 40 三浦古墳群 | 53 青島遺跡 | 浜坂1号墳 | |
| 12 上原古墳群 | 27 大桝遺跡 | 三浦遺跡 | 54 良田古墳群 | 67 栃木山遺跡 | |
| 13 中村須恵器窯跡群 | 28 小森山遺跡 | 41 湖山第2遺跡 | 55 松原谷田遺跡 | 68 浜坂横穴群 | ● 宮谷26号墳 |
| 14 中村横穴群 | 29 下段遺跡 | 42 天神山遺跡 | 56 松原所在遺跡 | 69 荒神山横穴群 | |
| 15 山ヶ鼻遺跡 | 30 梅間古墳群 | 天神山城 | 57 松原古墳群 | 70 秋里遺跡 | |

第6図 宮谷26号墳周辺の遺跡

の生活や生産の拠点であったと考えられる野坂川流域の遺跡を取り上げ、歴史的環境を概観する。

1. 旧石器・縄文時代（第6図）

千代川の西岸では、縄文時代早期以前の遺跡はまだ確認されていないが、縄文時代前期以降の遺跡には、桂見遺跡（46）や布勢第1・2遺跡（37・38）といった山陰地方を代表する低湿地遺跡が周知されている。縄文海進時、内湾を形成していた湖山池の湖畔にあり、縄文時代晩期末にいたるまで断続的な営みが確認されている。土器だけでなく多種多様な石器や木器が出土しており、湖山池沿岸の低湿地が縄文人の活動拠点であったことがうかがわれる。一方、野坂川流域における縄文時代の様相は判然としませんが、大桝遺跡（27）で縄文時代後期のものとみられる土器片が採集されており、流域の平野に縄文時代の遺跡が埋没していることが予想される。

2. 弥生時代（第6図）

野坂川の北西側に所在する大桝遺跡では、縄文時代晩期末の土器とともに弥生時代前期前葉の土器が出土したり（鳥取市 2011）、弥生時代後期～終末期の竪穴住居跡や土坑等が検出されている（鳥取市 1978）。大桝遺跡出土の弥生時代前期前葉の土器は、現在、鳥取平野で最も古い特徴をもつものである。弥生時代中期の様相には不明な点が多いが、弥生時代を通じて、集落が営まれていた可能性がある。また、野坂川東岸の丘陵北端に所在する徳尾墳墓群（6）には、野坂川を見下ろし、千代川下流域を一望する尾根の先端に1辺10～12mをはかる方形の墳丘墓が弥生時代後期に築かれている（財鳥取市 2009）。野坂川流域を拠点とする集団に関する墓域とみられる。

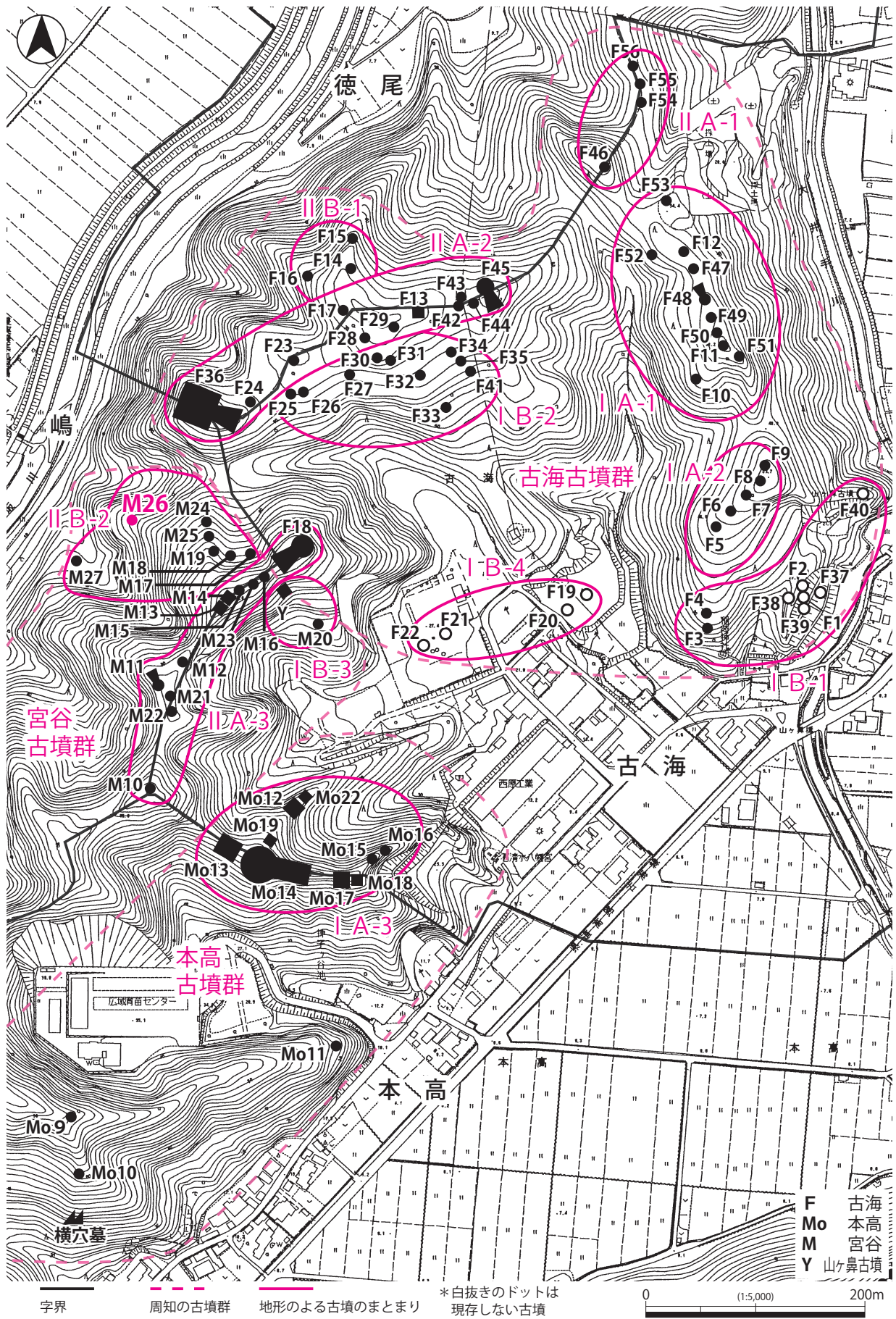
3. 古墳時代（第6・7図）

大桝遺跡には古墳時代前期前半にも集落が存続している。大桝遺跡の北側にある里仁遺跡（25）でも土師器が採集されており、古墳時代の集落が存在しているようである。こうした遺跡を拠点に生活を営んだ集団が、野坂川の両岸の丘陵に展開する古墳群の築造主体であったと予想される。また、野坂川中流域に所在する下段遺跡（29）にも古墳時代の土器の散布が確認されており、野坂川の流域に大小の集落が点在していた可能性もある。

野坂川西岸の古墳群（第6図）

里仁、桝間、野坂、大塚の地名を冠した古墳群が周知されている（26・30・31・33）。いずれも野坂川流域の平野に眺望が開けた古墳群である。大まかな傾向として、下流部には大型の古墳が点在しており、上流部には横穴式石室を伴う古墳が分布している。

里仁古墳群（26） 野坂川流域の沖積地を介して、宮谷古墳群に対峙する位置にある。古墳時代中期の築造と推測される全長81mの前方後円墳、里仁29号墳の他48基の古墳と3基の横穴墓が確認されている。詳細の明らかな古墳は少ないが、これまでに里仁1号墳（円墳）、32～35号墳（方墳）で発掘調査が行われている。このうち、里仁1号墳は丘陵の緩斜面に築かれた古墳で、15×20mほどの楕円形を呈す小規模な墳丘に須恵器の副葬された墓壙が検出されている。一方、里仁32～35号墳は痩せた尾根に築かれた一辺11～18mの方墳である。埋葬施設には箱式木棺、箱式石棺、埴輪棺などがあり、32・33号墳からは円筒埴輪、鱗付円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形円筒埴輪、家形埴輪が出土している。古墳時代の大規模首長墳とは系譜を異にし、弥生時代墳丘墓の系譜下にあ



第7図 宮谷 26号墳周辺の古墳

る古墳と理解されている（財鳥取県 1985）。

桧間古墳群（30） 里仁古墳群の南西側に展開する古墳群で、桧間 1 号墳他 6 基の古墳が周知されている。桧間 1 号墳は 2 段に墳丘が造成された前方後円墳で葺石と埴輪を伴っている。全長は 90m、中期の築造と推測される因幡地域最大規模の前方後円墳である。里仁古墳群の南方 300 m にあり、里仁 29 号墳とともに盟主墳という評価を得ている。

野坂古墳群（31） 桧間古墳群の南西側に展開する古墳群である。円墳とみられる 10 基の古墳が周知されている。最大規模の古墳は直径 20 m 級の野坂 6 号墳で、その他は直径 15 m 未満の小規模古墳である。野坂 5 号墳には横穴式石室が採用されている。

大塚古墳群（33） 野坂古墳群の南西側に展開する古墳群で、これより野坂川上流部には、現在、古墳の分布は知られていない。円墳とみられる 23 基の古墳が周知されている。最大規模の古墳は大塚 18 号墳で、直径は 38 m をはかる大型の円墳である。段築された墳丘に埴輪が伴う。その他の古墳はいずれも直径 15 m 未満の小規模古墳である。なお、大塚 14・15・22 号墳は横穴式石室を伴うようだ。野坂古墳群とともに後期に造られた古墳群とみられる。

野坂川東岸の古墳群（第 6 図）

徳尾、古海、本高、宮谷、小森山、下段、上段、上原の地名を冠した古墳群が周知されている（1・4～6・9～12）。概ね野坂川流域の平野を眺望する立地にあるが、徳尾、古海、本高には千代川や有富川流域を視野にいたした古墳がある。下流部側に展開する古海や本高に大型の前方後円墳や前方後方墳が点在している。

徳尾古墳群（6） 弥生時代後期に墳墓が所在した丘陵に築かれた古墳群である。野坂川と千代川の流域に面しており、現在、9 基の古墳が周知されている。このうち徳尾 3 号墳は発掘調査によって、18×10 m の方墳であったことが判明、埋葬施設からは枕に使用された小型の器台が出土している（鳥取県 1985）。また、徳尾古墳群の東側斜面には松ヶ谷横穴群（7）がある。工事中に 2 基の横穴墓が発見され、須恵器とともに人骨や金環が出土している。

古海古墳群（5） 徳尾古墳群の南西側に周知されている古墳群である。野坂川方面だけでなく、千代川、有富川方面を眺望する古墳も一括されており、現在、計 56 基の古墳に古海の名が付されている。直径 10～20 m 程度の小形の円墳が多いが、全長 67 m をはかる因幡最大規模の前方後方墳、古海 36 号墳が含まれている。詳細の分かる古墳は少ないが、以前に古海 1・2・37～40 号墳で発掘調査が行われている（財鳥取市 1993・1996）。このうち、古海 1・2 号墳は長方形や方形を呈す前期後半の古墳、37～39 号墳は円形ないし楕円形を呈す後期後半の古墳である。また、終末期には横口式石槨を持つ山ヶ鼻古墳（県史跡）がある。

本高古墳群（4） 古海古墳群の南西側に展開する古墳群で、有富川流域を眺望する立地にある。現在、22 基の古墳に本高の名が付されている。主体を占めるのは直径ないし一辺が 10～20 m 程度の円墳や方墳で、3 つの支群が抽出できる。鳥取西道路建設に伴い平成 21 年度に本高 12～14・17～19・22 号墳の発掘調査が行われた。最も北側に分布する一群で、前期中葉から中期前葉にかけて造営された古墳によって構成されることが確認され、当初は円墳と認識されていた本高 14 号墳が全長 63 m をはかる前方後円墳であり、その築造時期が前期中葉にさかのぼることが明らかになった。現状では、山陰地方で最も早くに築造された前方後円墳である（鳥取県 2010）。調査後、工法変更により保存がはかられた。

宮谷古墳群（1） 古海古墳群の南西側、本高古墳群の西側に展開する古墳群である。有富川流域を眺望する古墳も含むが、多くは野坂川流域に面した場所に築造されている。現在、直径 10～20 m程度の円墳を主体とする 27 基の古墳が周知されている。嶋地内の丘陵に分布する一群と、宮谷地内の丘陵に分布する一群があり、宮谷 26 号墳は前者に含まれる。

小森山古墳群（9） 宮谷古墳群の南西側に展開する古墳群である。野坂川流域を眺望する立地に 3つの小群があり、直径 10～20 m程度の円墳を主体とする 14 基の古墳が周知されている。なお、全長 40 mの前方後円墳と考えられる小森山 1 号墳や、直径 34 mの円墳とみられる小森山 2 号墳といった大型の古墳は丘陵の裾部に築造されており、丘陵の尾根部に築造された小規模な古墳とは立地が大きく異なっている。

下段古墳群（10） 小森山古墳群の南西側に展開する古墳群である。下流側に位置する一群と上流側に位置する一群があり、10～20 m程度の小規模な円墳が 6 基周知されている。いずれも野坂川流域を眺望している。

上段古墳群（11） 下段古墳群の南西側にある古墳群である。野坂川流域に面した場所に、10～20 m程度の小規模な円墳とみられる 5 基の古墳が周知されている。

上原古墳群（12） 上段古墳群の南西側にある古墳群である。野坂川流域に面した場所に、6 基の古墳が周知されている。10～20 m程度の小規模な円墳とみられる。これより上流部には、現在、古墳の分布は確認されていない。

第 3 節 古海古墳群、本高古墳群、宮谷古墳群の再検討

古墳に付された名称をもとに古墳群をくくると、徳尾古墳群の南側に分布する古墳が古海古墳群、その南西側にあり野坂川流域に面した側に分布する古墳が宮谷古墳群、有富川流域に面した側に分布する古墳が本高古墳群となる（第 7 図）。古墳の名称は概ね古墳が所在する字名と一致するが、徳尾地内にありながら古海と名付けられていたり、嶋地内にありながら宮谷と名付けられている等、名称と字名が整合しないものがある。しかも、名称をもとにくくられた古墳群は、古墳が分布する地形や、眺望範囲が考慮されたまとまりではなく、考古学的に有意な認識とはなっていない。

築造時期の不明な古墳が多く、各古墳の築造順序、古墳群の形成過程を踏まえたグルーピングは難しいが、将来、こうした古墳群を、鳥取地域の歴史に位置づけるための評価を行うためには、少なくとも、古墳の分布と地形的なまとまりを軽視できない。この丘陵上に分布する古墳の群構成は、宮谷 26 号墳の評価にもかかわるので、古海、本高、宮谷の名が付された古墳について、谷や鞍部で区画される地形毎のまとまりを検討する。

古墳群の再検討 古墳からの眺望と地形的なまとまりを考慮して、次のようなグルーピング案を示しておきたい（第 7 図）。ここでは、主に千代川や有富川方面を眺望する立地にあるものをⅠ群、野坂川流域を眺望する立地にあるものをⅡ群とし、さらに丘陵頂部の尾根に古墳が展開する一群に A、丘陵斜面に古墳が展開する一群に B を付す。

Ⅰ A 群 主に千代川や有富川の流域を眺望する丘陵頂部の尾根に築かれた古墳群。3つの小群に分かれる。

Ⅰ A -1 群 古海 10・11・12・47・48・49・50・51・52・53 号墳

I A -2 群 古海 5・6・7・8・9 号墳

I A -3 群 本高 12・13・14・15・16・17・18・19・22 号墳

I B 群 主に千代川や有富川の流域を眺望する丘陵斜面ないし裾部に築かれた古墳群。4つの小群に分かれる。

I B -1 群 古海 1・2・3・4・37・38・39・40 号墳

I B -2 群 古海 25・26・27・30・31・32・33・34・35・41 号墳

I B -3 群 宮谷 20 号墳、山ヶ鼻古墳

I B -4 群 古海 19・20・21・22 号墳

II A 群 千代川や有富川の流域と野坂川流域を眺望する丘陵頂部の尾根に築かれた古墳群。3つの小群に分かれる。

II A -1 群 古海 46・54・55・56 号墳

II A -2 群 古海 13・17・23・24・28・29・36・42・43・44・45 号墳

II A -3 群 古海 18 号墳、宮谷 10・11・12・13・14・15・16・21・22・23 号墳

II B 群 野坂川流域を眺望する丘陵斜面に築かれた古墳群。2つの小群に分かれる。

II B -1 群 古海 14・15・16 号墳

II B -2 群 宮谷 17・18・19・24・25・26・27 号墳

このうち、丘陵頂部に立地する I A 群、II A 群には、前方後円墳や前方後方墳等、比較的大型の古墳が点在している。一方、丘陵斜面に立地する I B 群、II B 群には小規模な円墳が分布する。つまり、再考した古墳群は、単に地形的に区分されるまとまりではなく、群を構成する古墳の内容の違いも反映している。なお、宮谷 26 号墳が属す II B -2 群は、小規模な円墳を主体とする一群であり、野坂川流域を眺望する丘陵斜面に築かれた小規模な古墳のまとまりである。

主要参考文献

財団法人鳥取県教育文化財団（中原斉）編 1985 年『里仁古墳群〈32・33・34・35 号墳の調査〉』

財団法人鳥取市教育福祉振興会（西浦日出夫、小谷修一）編 1993 年『古海古墳群 菖蒲遺跡』

財団法人鳥取市教育福祉振興会（谷口恭子、藤本隆之、神谷伊鈴）編 1996 年『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』

財団法人鳥取市文化財団（藤本隆之）編 2006 年『野坂遺跡』

財団法人鳥取市文化財団（谷口恭子）編 2009 年『徳尾墳墓群』

鳥取県企画室 1966 年『鳥取県地質図説明書』

鳥取県教育委員会（亀井熙人、田中弘道、久保穰二郎）編 1985 年『徳尾遺跡群発掘調査報告書』

鳥取県教育委員会（大川泰広、岡戸哲紀、田中正利）編 2010 年『本高古墳群』

鳥取県埋蔵文化財センター編 1986 年『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財シリーズ 1

鳥取市教育委員会（杉谷愛象）編 1978 年『大桝遺跡Ⅰ』

鳥取市教育委員会（加川崇 他）編 2011 年『平成 22（2010）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

野田久男・清水真一 1983 年『日本の古代遺跡 9 鳥取』、保育社

第Ⅲ章 発掘調査と遺物整理の方法

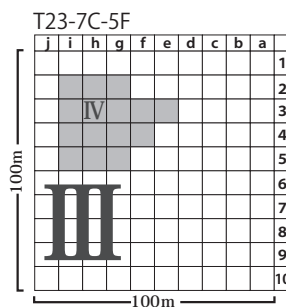
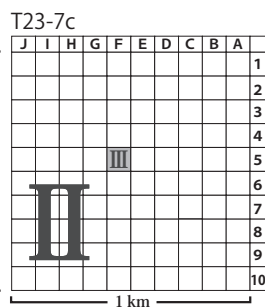
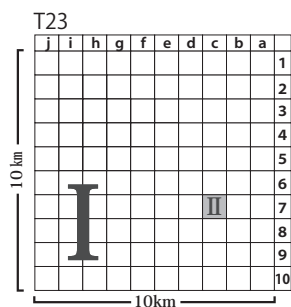
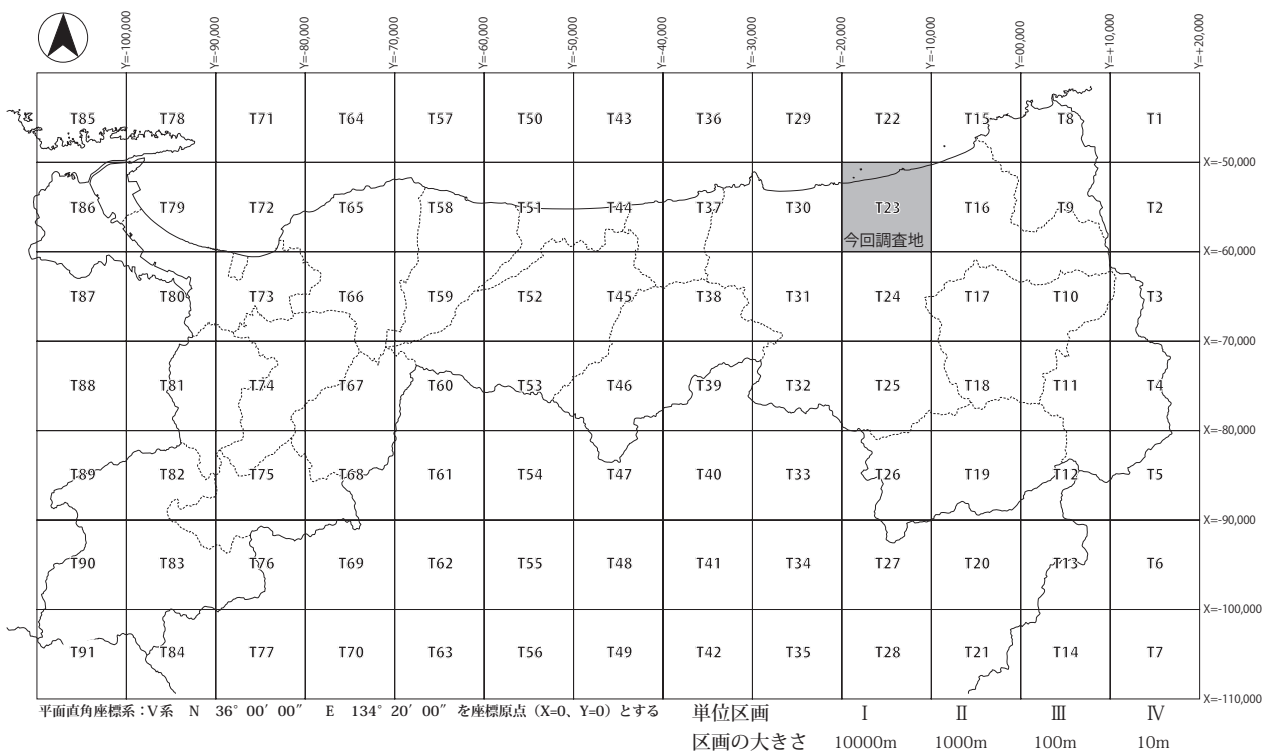
第1節 調査地の地区割りとグリッド名

1. 調査地の地区割り (第8図)

鳥取県教育委員会が財団法人鳥取県教育文化財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用するグリッドに、平面直角座標系の第V系（世界測地系）を使用している。さらに、県内の広域を対象とした発掘調査の地区割りを標準化する試みとして、以下の方法を用いて第Ⅰ～Ⅳ区画を設定し、調査地にグリッドを設けている。

第Ⅰ区画 鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m× 10,000 mで、1～91の区画を設け、北東隅から T1～T91の記号を付した。

第Ⅱ区画 91分割した第Ⅰ区画の1区画内を100等分した区画である。1,000 m× 1,000 mを第



宮谷 26 号墳 調査地
 T23-7c-5f-2f~i
 3e~i
 4f~i
 5g~i

第8図 地区割り模式図

Ⅱ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。

第Ⅲ区画 第Ⅱ区画を100等分した区画である。100m×100mを第Ⅲ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を1A～10Jと呼称した。

第Ⅳ区画 第Ⅲ区画を100等分した区画である。10m×10mを第Ⅳ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。この10m×10mの区画が遺構の位置表示や遺物取り上げ時に使用する基本グリッドとなる。

ところで、第Ⅴ系を用いた地区割りは多くの発掘調査で一般的に行われており、特別な方法ではない。しかし、調査年次、遺跡名称、調査組織、場合によっては担当者が異なると、1つの遺跡や、地形や内容が連続する遺跡であっても、調査の都度、グリッドの名称が任意に設定されていることがある。その場合、一連の遺跡の中でグリッド名が連続しなかったり、同一名称のグリッドが重複することがある。このようなグリッドの設定は、遺跡の記録を作成し、それを評価するうえで望ましいこととはいえない。

県内全域の発掘調査に共通使用できる地区割りの使用は、こうした問題を解消するための方法の1つである。全県域を対象にするため、グリッドの名称には複数の数字とアルファベットが組み合わせられることになる。煩雑に感じることもあろうが、共通の基準で設定されたグリッドは、複数の遺跡を包括した遺跡群の評価、さらには記録保存された埋蔵文化財情報の整理、活用にも有意である。

2. 宮谷26号墳の位置とグリッド名(第9図)

以上の方法によって調査地にグリッドを設定した。

宮谷26号墳を中心とする調査地は第Ⅰ区画「T23」、第Ⅱ区画「7c」、第Ⅲ区画「5F」、第Ⅳ区画「2i～g、3i～f、4i～f、5i～g」に位置する。

グリッド名は、第Ⅰ～Ⅳ区画に至る名称を「-」でつなぎ、「T23-7c-5F-第Ⅳ区画」と表現する。なお、当調査区は全て第Ⅲ区画5F内にある。そこで、以下、本文中では、第Ⅰ～Ⅲ区画を表す「T23-7c-5F-」を省略し、第Ⅳ区画のみを記す。

第2節 発掘調査と記録の対象

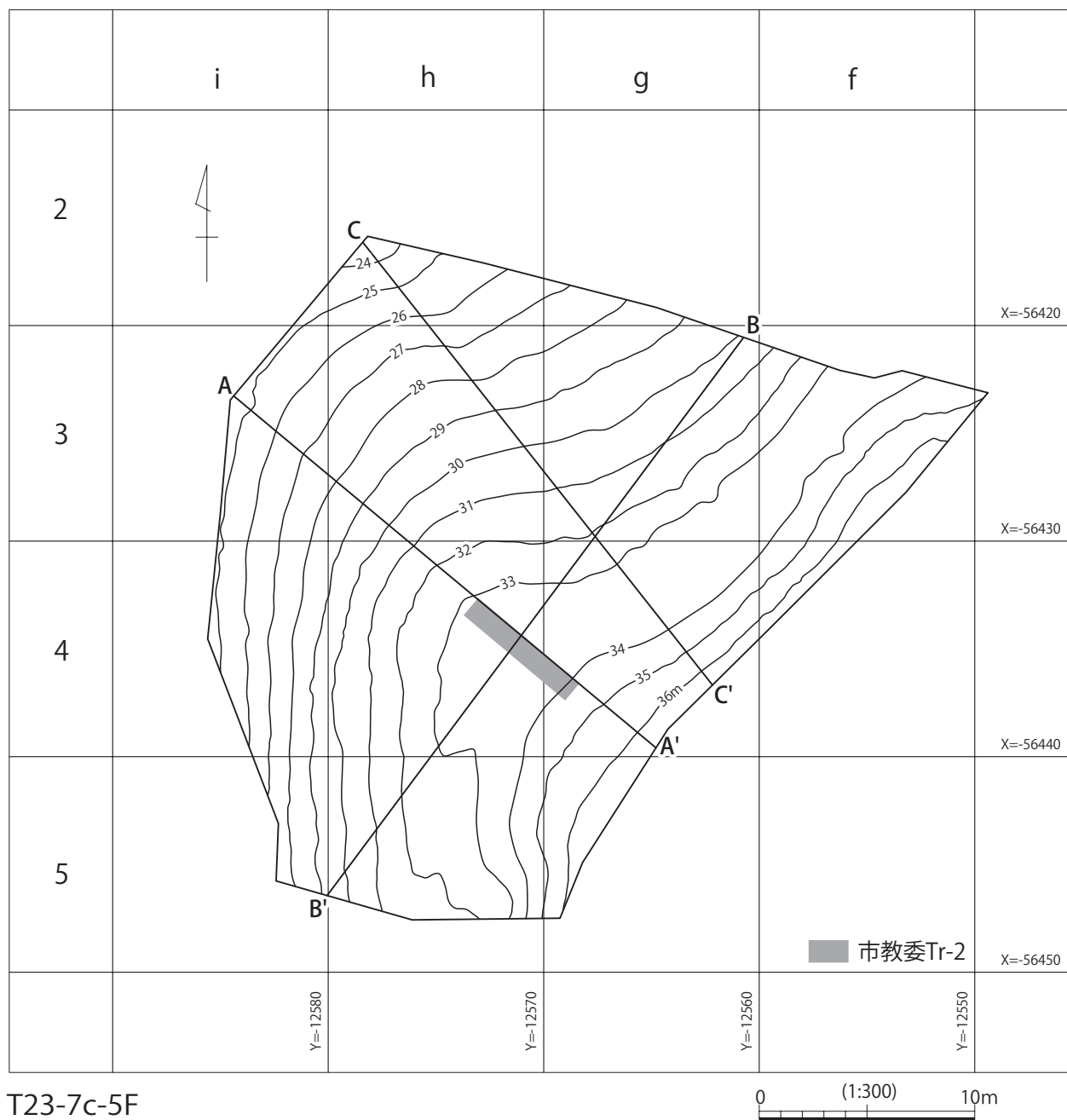
1. 発掘調査と記録の対象

調査の対象は、宮谷26号墳を中心とした700㎡の調査地である。主に、宮谷26号墳の構成要素と墳丘周辺の地形等を記録の対象とした。その際、特に留意したのは、古墳築造の基盤となる地層、古墳の築造時に造成、改変された地形、墳丘の盛土、埋葬施設及び副葬された遺物等である。

2. 遺構名と番号

墳丘頂部で検出した埋葬施設の平面形状および埋土の観察から、埋葬施設は木棺墓ないしは直葬の可能性がうかがわれたので、埋葬施設の名称を「墓壙」とした。

また、鳥取県教育委員会が財団法人鳥取県教育文化財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、検出順に遺構番号を付与することを基本方針としている。しかし、当古墳の調査では、同一地点に重



T23-7c-5F

第9図 調査地の地区割りと土層観察用畦の設定位置

複する墓壙を検出したので、切り合い関係の確認によって、先に構築された墓壙から順に番号を付し、最初に構築された埋葬施設を「墓壙1」、次に構築された埋葬施設を「墓壙2」とした。

3. 遺物の取り上げと遺物カードの記載

遺物の取り上げには、財団法人鳥取県教育文化財団調査室が作成した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、番号が重複しないように留意しながら、遺物カードに記載された項目に基づき、遺物取上台帳を作成し、遺物を管理した。遺物カードの記載項目と内容は以下のとおりである。

遺構名 「宮谷26号墳10」と記載。「10」は2010年度調査実施を示す。

地区名 遺物の取り上げは、10m×10mのグリッドを基本とし、第I～IV区画で構成され

るグリッド名を記載した。

層位名 遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。

遺構名 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。

取上番号 取り上げ順に通し番号を記載した。

出土年月日 検出日ではなく、取り上げ日を記載した。

図面 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。

備考 特記事項を記載した。

時代、時期 取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。

種別 土器や鉄器など素材によって大別される遺物の種別を記載した。

その他 上記の記載項目とは別に、取り上げ時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

第3節 発掘調査と記録作成の方法

1. 調査前の地形測量（第11図、図版5-1）

発掘調査の事前作業を平成22(2010)年7月20日に開始した。調査地内の立木は伐採済みであったが、伐採後、数ヶ月を経ており、草木が繁茂しはじめていた。そこで、調査前の地形測量に先立ち、調査地内の草刈りと倒木の片付けを行った。そして、21日に調査前測量の方法について打合せを行い、22日から基準点、水準点を移動、調査範囲として設計されていた700㎡の境界を確認した。さらに、23日に、主任発掘調査監理者と支援調査員が墳形を再確認し、調査地内に点在する攪乱坑等に白線を引き、24・25日に測量を行った（図版5-1）。測量にはトータルステーションを使用し、縮尺1/100、等高線の間隔0.2mの測量図を作成した。その後、27日に測量成果を現地で確認しながら、等高線や墳形等にかかわる細部の修正を行い、調査前の地形測量図（第11図）が完成した。

2. 試掘トレンチの再発掘（第9図、図版7・8-1）

表土剥ぎに先立ち、試掘時の記録を再確認するため、鳥取市教育委員会が設定した第2トレンチ（以下、市教委Tr-2）を再発掘した（図版7-1・2）。市教委Tr-2は墳丘後背部の斜面から墳丘の頂部にかけて設定されており（第9図）、墳丘後背部の傾斜変換地点に地山を浅く掘削した溝状の遺構、墳丘頂部に地山を掘削した墓壇があり、墓壇直上の堆積から須恵器片が出土したことが報告されていた（鳥取市2009）。トレンチ内の埋土を取り除くとすぐに須恵器片が現れた。報告書の図版に掲載されている写真と見比べ、全ての須恵器片が出土直後の位置を保ったまま埋め戻しされていることを確認し（図版8-1）、あらためて須恵器片の出土状況を撮影した。なお、この須恵器片は、後に墓壇上に施された盛土（墓壇上盛土と呼称）に伴うことが明らかになった。

3. 地層観察用畔の設定と記録（第9・12・13・15図）

調査地内の地形の観察と測量を行った後、表土剥ぎに伴い、調査地内の地層を確認、記録するための畦をA-A'、B-B'、C-C'ラインに設定した（第9図）。また、古墳の中心に設定したA-A'、B-B'ライ

ンの畔は調査終了直前まで取り壊さずに調査を進めることにした。

A-A' (a-a') 等高線に直行し、古墳の中心を通過するように設けた畔である(第9図)。市教委 Tr-2 が墳丘のほぼ中央に設定されていたので、トレンチとの連続性を配慮して畔の位置を決定し、畔の南西側の壁面を利用して地層の観察と記録を行った。

なお、調査の過程で A-A' ラインに、埋葬施設の埋土を良い条件で観察できない場所が生じたことから、埋葬施設にかかる部分で 0.5 m 南西側に畔をずらし、断面を観察することにした(第13図)。したがって、地層の観察ラインは直線ではなく、埋葬施設の付近で凸状に屈曲する。そのため、この部分については、南西側から正視した状態で作図を行った(第15図 A-A')。断面に高低差のない A' 側は堆積が薄く、折り返しの左右で地層に食い違いは生じなかったが、1 m ほどの高低差がある A 側では、見かけ上の食い違いが生じた。そこで、畔の折り返し部分(a-a')を分層、記録し、情報を補足した。

B-B' 墳丘頂部で A-A' ラインに直行するように設けた畔である。墳丘頂部で検出した埋葬施設の主軸線を通る。地層の観察、記録には北西側の壁面を利用した(第15図 B-B')。

C-C' 墳丘築造時における地形の改変を観察するため、墳丘の北東側に設けた畔である。畔の北東側にサブトレンチを掘削した。北東側の壁面を分層し、図面を作成したが、当報告書では、A-A' ラインの観察方向にあわせるため、第15図 C-C' には反転した図面を掲載している。

4. 表土の剥ぎ取りとサブトレンチの掘削(第3図左上)

調査地は丘陵斜面にあり、市教委 Tr-2 壁面の地層の観察からも、表土の堆積は薄いことが想定された。そこで、調査地内の表土の剥ぎ取りは全て人力で行うことにした。また、地形測量後に設定した地層観察用畔沿いにサブトレンチを掘り、表土の厚さを確認しながら作業を進めた。

5. 周溝の確認(図版7-1)

表土剥ぎ取り後、墳丘後背部における周溝の有無を確認した。試掘調査によると、墳丘南東側の傾斜変換点に「地山を溝状に削り出した地山加工面」があると報告されている(鳥取市2009)。ところが、当該地点には幅2mの林道が通過しており、林道の敷設に伴う削平の可能性があることも予想された。再発掘した市教委 Tr-2 の壁面で地層を観察し、表土剥ぎの後、墳丘頂部を精査したところ、試掘のさいに指摘されていた地山の加工は、林道の敷設および使用によって改変されたもので、墳丘の築造にかかわるものではないことを確認した。

6. 墳丘頂部の調査(第3図右上・左下、巻頭図版2)

埋葬施設を覆う墓壙上盛土を掘削し、墓壙上盛土内に包含されていた遺物を記録し、取り上げた後、埋葬施設の検出を行った。市教委 Tr-2 内で地山を掘り込む墓壙壁面の立ち上がりが見えていたので、平面形の検出も容易と考えていたのだが、墓壙の輪郭を把握するのに予想以上の時間を要した。埋葬施設の北西側では墳丘盛土を掘削して墓壙が設けられており、墓壙内の埋土と墳丘盛土の差異が不明瞭であったことに加え、夏季の調査で土が乾いて土質や土色の微妙な違いを認識しづらかったことによる。そのため、適宜、サブトレンチで断面の観察を行いながら、墓壙の輪郭を確定した(巻頭図版2-1)。また、平面的には確認することができなかったが、墓壙掘り下げ中に、2基の墓壙が重複し

ていることが明らかになった（巻頭図版2-2）

墓壙内の埋土は移植ゴテと竹ベラを使用して掘り下げを行った（第3図右上、左下）。墓壙内から出土した遺物は、出土状況を記録した後に取り上げを行った。また、墓壙埋土の掘削で生じた土を廃棄する前に全て篩にかけて鉄器の破片等、微細な遺物を収集した。

7. 図面による記録

素図と編集図 測量、作図の方法を問わず、発掘調査に伴い遺跡で作成した地層、遺構の平・断面、遺物出土状況にかかる図面を「素図」と呼ぶ。また、調査中には、同一の遺構に関連する平・断面図及び遺物の出土状況等の素図が個別に作成されることがある。そこで、関連する情報を有する素図の記録を整理、編集し、図化された記録を遺構毎に統合した図面を作成した。これを「編集図」と呼ぶ。

遺構・遺物に関する記録 主にトータルステーションを用いた電子測量によって、縮尺 1/10 または 1/20 の素図を作成した。また、墓壙上盛土から出土した土器は、取り上げ時に手測りによって出土位置を記録し、墓壙内から出土した土器等の出土位置と状況図は Kuraves を用いた写真測量により素図を作成した。そして、調査終了後に、それぞれ関連する素図の情報を整理、統合して、編集図を作成した。

地層に関する記録 地層観察用畔の観察面を分層後、適宜、素図を作成した。地層の記録には、水準器と標尺等を用いた手測りと、トータルステーションを用いた電子測量を併用して、縮尺 1/20 の素図を作成した。また、調査終了後、現地で手測りした素図をスキャナーで読み込み、デジタルトレースを行って、トータルステーションで作成した図面との統合をはかり、編集図を作成した。

8. 写真による記録

使用機材・媒体 写真の撮影は主に中型（6×7判）一眼レフカメラで行い、小型（35mm判）一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ APS-C 以上、有効画素数 1220 万画素以上）を併用した。中判、小型一眼レフカメラに使用したフィルムは 6×7 リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黑白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）、35mm リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黑白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）である。デジタル一眼レフカメラによる撮影は RAW・JPEG 形式で画像データを取得し、保存した。なお、記録対象の内容によっては、中型一眼レフカメラでの撮影を省略したことがある。

写真の管理 撮影した写真は、撮影日順に番号を付して、写真台帳に登録した。撮影した内容（タイトル）はデジタル一眼レフカメラに写し込み、中型、小型一眼レフカメラによって撮影したフィルムの検索性資料とした。写真台帳は、全ての写真を網羅するデジタル画像を基に作成し、中型、小型一眼レフカメラで撮影したフィルムを整理、管理した。

写真撮影 調査中、地層、遺構内の堆積、遺構の検出及び完掘状況、遺物の出土状況等を記録するために写真撮影を行った。写真撮影は、撮影対象、範囲、アングル及び使用機材等に関する発掘調査監理者との打合せをもとに支援調査員が行った。

また、古墳の立地や景観、墳丘の全景を写真に記録するため、調査開始時と終了時に、野坂川の左岸等から遠景撮影と、ラジコンヘリコプターによる空中からの俯瞰撮影を行った。

第4節 出土遺物の整理作業

土器 土器の洗浄は調査終了後に行った。その後、接合、復原、実測を行った。また、胎土の異なる土器が存在することから、胎土の分析を依頼した（第V章第1節）。

鉄製品 鉄製品はクリーニングを施し、表面に付着した土を取り除いた。その後、鳥取県埋蔵文化財センターの機材を借用し、X線撮影を行った。その後、写真を参考にしながら、細部を観察し、実測図を作成した。

写真撮影 4×5判のリバーサルと黒白、デジタルカメラにて調査担当者が撮影した。

保管 図面、写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行なった。

引用参考文献

鳥取市教育委員会（加川崇他）編 2009年『平成20（2008）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

第IV章 調査の成果

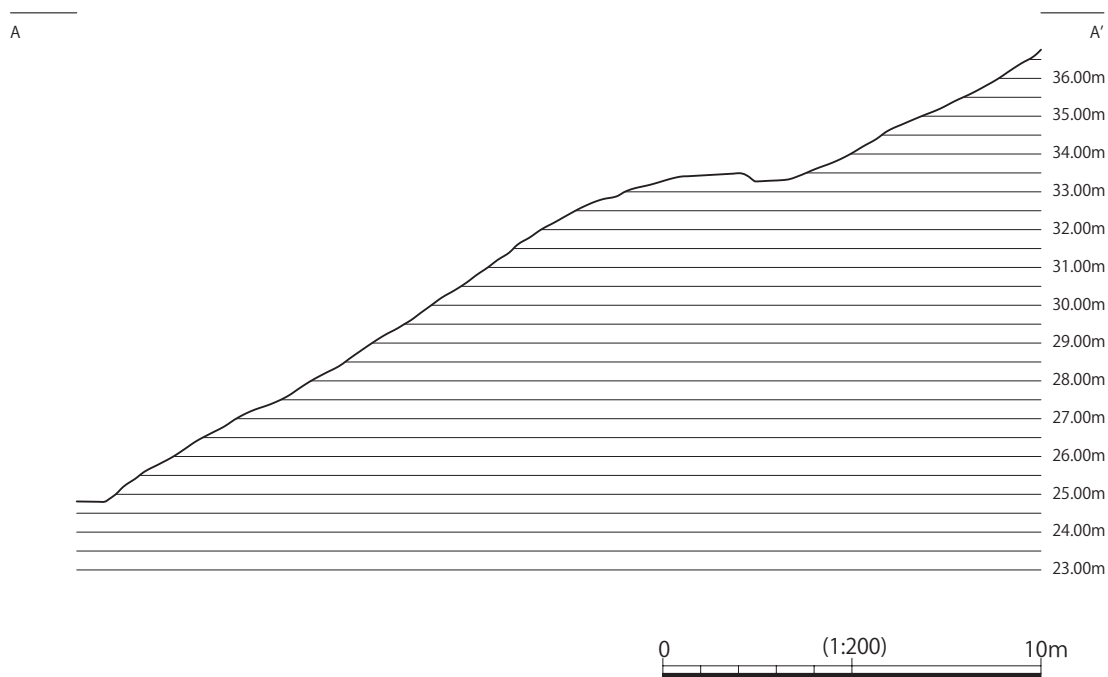
第1節 調査前の墳丘

宮谷 26 号墳は丘陵の斜面に築かれた古墳である（第 10 図、巻頭図版 1-1、図版 1-2・2・3-1・4-1・5-1）。墳丘最頂部の標高は 33.5 m、4h・4g 区にかけて半円形を呈す平坦な地形が認められた（第 11 図）。試掘調査時、ここに設けられたトレンチ（市教委 Tr-2）で埋葬施設とみられる遺構の掘方が確認されていた。

古墳の遠景（図版 3-1・4-2） 調査地を離れた地点から古墳の外観を観察した。観察地点は、調査地の西側に位置する野坂川の西岸と、南西側に位置する宮谷 27 号墳である。古墳の正面に対峙する野坂川の西岸からは、墳頂部の平坦面に表れた傾斜の変化と、墳丘のわずかな盛り上がり認められた（図版 3-1）。一方、古墳の側面に位置する南西側からは、斜面の傾斜に対して僅かに盛り上がる墳丘と、墳頂部の平坦面が明瞭に観察できた（図版 4-1）。

墳丘裾部と墳丘の範囲（第 11・13 図） 墳丘築造後の堆積により墳丘裾部は不明瞭になっており、墳丘の範囲は判然としない状態であった。そこで、調査地内の下草を刈り取った後、地表面に表れた僅かな傾斜の変化をたどり、墳丘裾部のラインを推測した（第 11 図）。ほぼ正円形に近い弧を描くと考えられたが、表土除去後に検出した墳丘裾部は推測よりも上方に位置していた（第 13 図）。

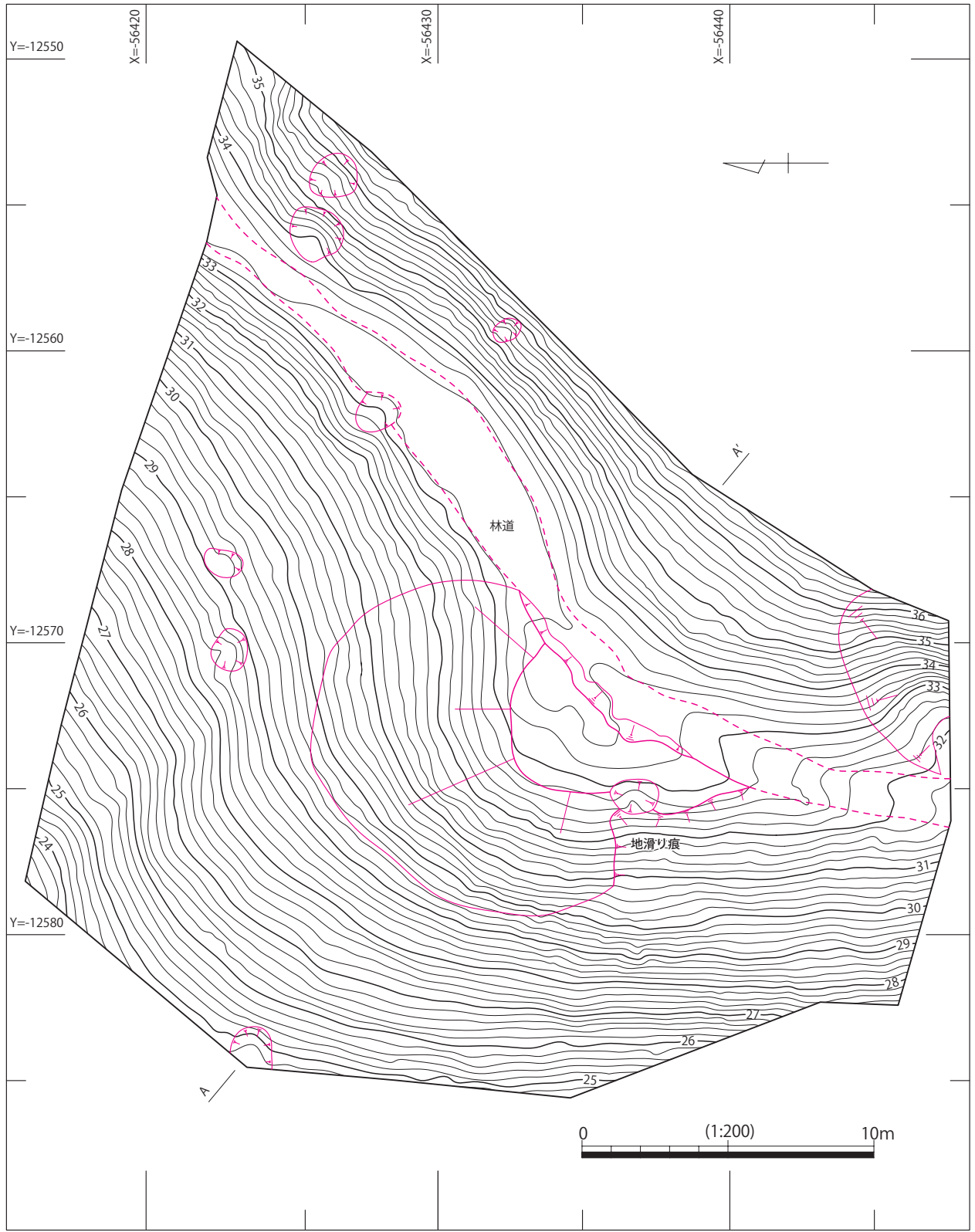
調査地内の攪乱等（第 11 図） 調査地の地目は山林で、表土下の墳丘は概ね良好な状態を保っていると予想されたが、標高 33 m の等高線に沿うように敷設された林道によって墳頂部の一部が削平を受けていた。また、墳丘の南西斜面に地滑りの痕と攪乱坑が認められた。しかし、いずれも墳丘の形状を大きく改変するものではなかった。



第 10 図 古墳の立地（調査前の断面図、第 11 図 A-A'）

第2節 調査地内の基本層序

調査地内の基本層序は、①古墳築造後の堆積と林道敷設に伴う造成土等、②墳丘の盛土および墓壇内埋土、③墳丘盛土直下の堆積、④丘陵の基盤および基盤層上の堆積からなる（第12図）。この調査では、林道に伴う造成土をa層、自然堆積層や基盤層をb層、さらに自然堆積層を母材として動



第11図 調査前の地形と墳丘

植物の働きによって生成された土壌を a' 層として分層を行い、層序をあらわす数字と組み合わせて表記を行った（例：1a 層、2b 層）。また、墳丘盛土に M、墓壙埋土に SX を付した。

1. 古墳築造後の堆積等（第 15 図）

1a' 層 調査地の表層には落葉や枯枝と、それらが腐蝕した薄い土壌の直下に認められた堆積である。明褐色を呈すシルトで、弱く土壌化している。調査地内の全域に認められた（第 15 図 A-A'、B-B'、C-C'）。2a 層上に堆積している場所があり（C-C'）、林道敷設後に形成された土壌層である。

2a 層 1a' 層と 3a'・3b 層の間にある。林道敷設に伴う造成土で、墳丘の北西側に施されていた（C-C'）。2a-1～2a-4 層に細分できる。いずれも硬くしまる。造成時期を示す遺物は出土していない。

3a' 層 3b 層を母材とする土壌層である。一部、墳丘の上面を覆っている。明褐色を呈すシルトで、5b 層を母材とする角礫凝灰岩の礫を少量含む。墳丘の北東と南西側、墳丘後背部の斜面に認められた（A-A'、B-B'、C-C'）。土のしまり具合や粘性の違いにより、3a'-1-1 層、3a'-1-2 層、3a'-2 層に細別した。人為による攪拌の痕跡等は認められない。

3b 層 古墳築造後の自然堆積層で、墳丘の北東と南西側に認められた（B-B'、C-C'）。黄褐色を呈すシルトに、5b 層に由来する角礫凝灰岩の礫を少量含む。淘汰は良いが、しまりの弱い堆積である。色調、粘性、含有物の違いにより、3b-1 層と 3b-2 層に細別した。

2. 墳丘の盛土および墓壙内埋土（第 15・20 図）

M1 層 墓壙上に施された盛土である（第 15 図 A-A'・B-B'、第 20 図 A-A'）。褐色を呈す粘土～シルト層で、墳丘頂部平坦面の南東側は林道の敷設によって削平されており、その北西側に 0.3 m 程度の厚みで残存していた。土質は似るが、色調、含有物の違いにより、M1-1～M1-3 層に細別できる。M1-2 は M1-3 を掘り込む浅い土坑の埋土である（第 20 図）。上面に須恵器片が散在していた。詳細は後述する。

SX1・2 層 M1 層下面で検出した墓壙の埋土である。SX1 が墓壙 1、SX2 が墓壙 2 を埋める土である（第 15 図 A-A'・B-B'）。詳細は後述する。

M2 層 斜面に土を寄せるように造成された墳丘の盛土である（第 15 図 A-A'、B-B'）。母材となる土の違いに起因する色調や土質の違いによって M2-1～M2-7 層に細別できる。詳細は後述する。

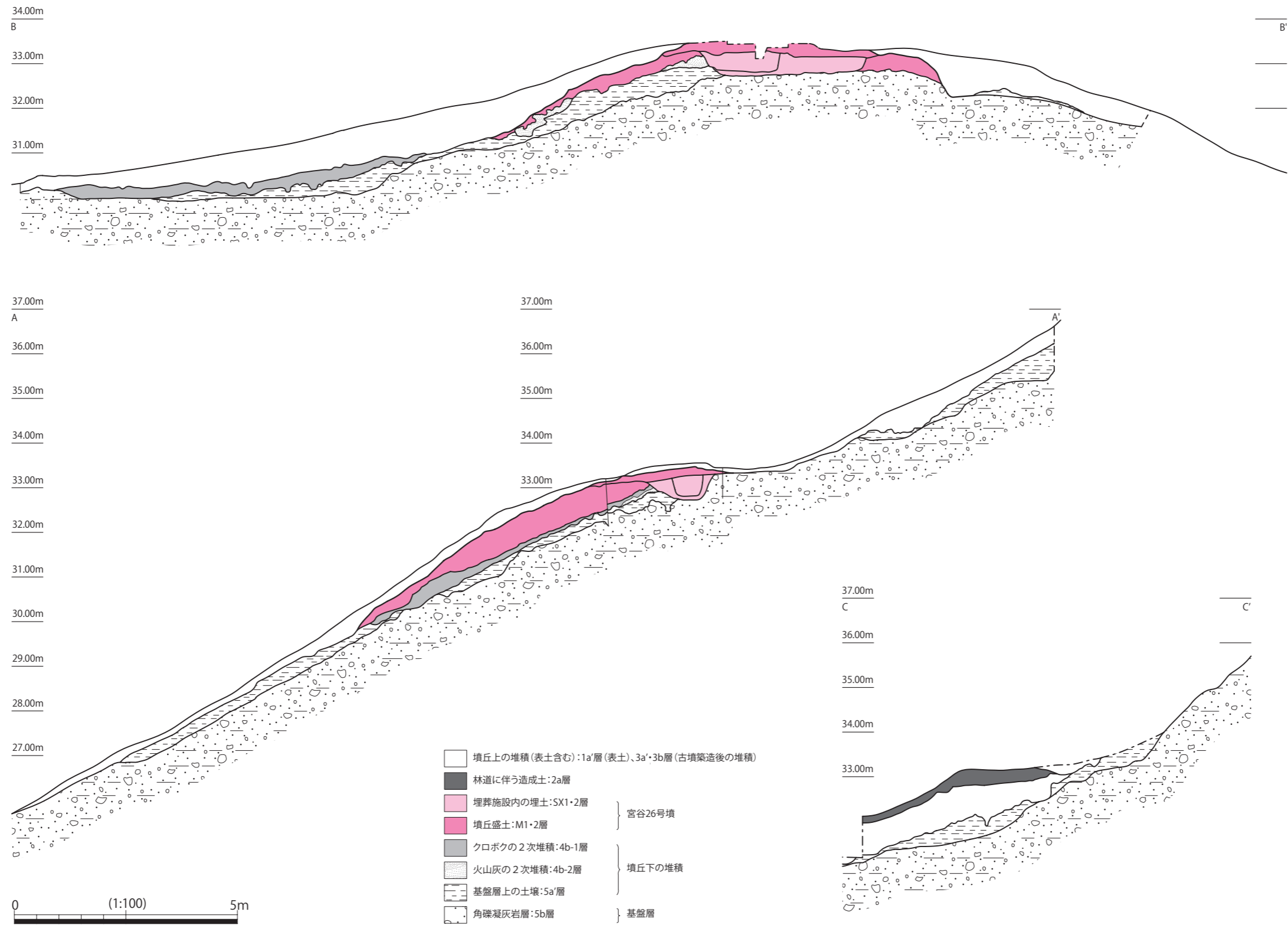
3. 墳丘盛土直下の堆積（第 15 図）

4b 層 墳丘盛土 M2 層の直下に残存していた堆積である。黒色のシルトが堆積した 4b-1 層、黄褐色粘土～シルトが堆積した 4b-2 層がある（A-A'・B-B'）。4b-2 層は火山灰、4b-1 層は火山灰が土壌化したクロボクである。いずれも 2 次的な堆積である。4b-2 層についてテフラ分析を実施したところ、三瓶浮布テフラ（約 2.0～2.1 万年前）の特性に類似した鉱物組成が確認された。鬼界アカホヤ火山灰（約 7,300 年前）に由来する可能性のあるテフラ粒子も検出されている（第 V 章第 2 節）。

4. 丘陵の基盤および基盤層上の堆積（第 15 図）

5a' 層 5b 層上に形成された土壌層である。ほぼ調査地全域に広がる（A-A'、B-B'、C-C'）。色調、粘性、含有物によって、5a'-1-1・5a'-1-2 層、5a'-2 層、5a'-3-1～5a'-3-3 層に細分できる。

5b 層 鉄分に富み、橙色を呈す角礫凝灰岩の堆積。丘陵の基盤層である。



第12図 調査地内の地層

第3節 墳丘と出土遺物

第1項 墳丘の形状と規模

墳丘の平面形（第13・14図、巻頭図版1-2、図版6-1）半円形で、墳丘の左右にくびれ部があり、舌状を呈している。鳥取市教育委員会の試掘調査では、墳丘の後背部に基盤層を掘り込む溝の存在が示唆されていたが（鳥取市2009）、試掘トレンチを再発掘して土層断面等を観察したところ、溝状の掘り込みと考えられていたのは林道に伴うものであった。したがって、墳丘と後背部の斜面を切り離し、区画する周溝は存在せず、標高33.4m付近に生じている墳丘頂部平坦面の傾斜変換が丘陵斜面と墳丘との境界となっている（第14図）。

括れ部（第14・15図、図版5-2・20）墳丘の基盤を整形するために、墳丘の北東側と南西側を掘削し、括れを造りだしていた（第14図）。北東側の括れは、標高31.8mから30.5mの範囲を掘削して、緩やかな弧を描く（図版5-2）。掘削は5a'層中に留まり、5b層には及んでいない（第15図B-B'・C-C'、図版20-2）。一方、南西側の括れは、標高33mから32mにかけて直線的に斜面が掘削されている。5b層まで掘削しており、断面はL字状を呈す（第14図B-B'、図版20-1）。

墳丘裾部（第14・15図）表土に覆われた状態の時には不明瞭であったが、1a'層と3a'層を除去すると、M2層の広がりに対応する傾斜の変換を確認することができた。A-A'ラインよりも北東側は傾斜の変換が明瞭で、墳丘裾部がきれいな円弧を保っていた。一方、くびれ部を除き、南西側は北東側に比べて傾斜の変化が不明瞭で、墳丘裾部もやや直線的であった。墳丘盛土の流出により、裾部の形状がいびつになっているのかもしれない。

墳丘の平面規模（第14・15図）等高線に直交するA-A'ラインにおける墳丘後背部の傾斜変換点と墳丘裾の傾斜変換点までの長さは概ね10mである。一方、A-A'ラインと交差するB-B'ラインにおける墳丘裾部の傾斜変換点間の長さは概ね13.5mである。

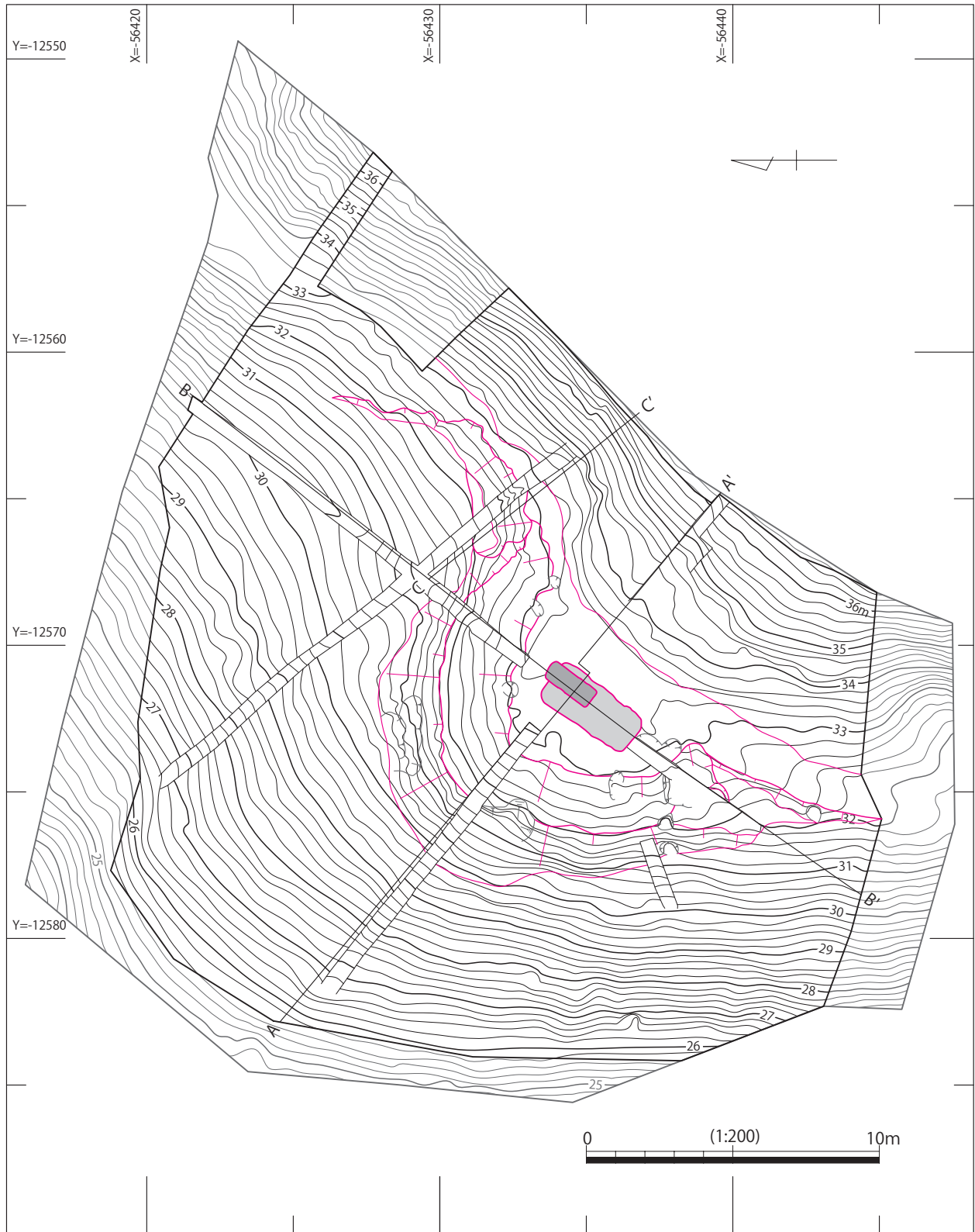
墳頂部（第14・15図、巻頭図版2-1、図版16-2）標高32.8m～33.4m付近に認められる傾斜の変換が墳頂部の範囲である。その範囲は半円形を呈しており、墳丘の形状と対応している（第14図）。5b層の掘削を伴う地盤の整形とM2層による墳丘の築造により、墳頂部に平坦な地形を整え、埋葬施設を設けた後に、M1層が盛られていた（第15図A-A'・B-B'）。M1層は最厚部で0.15m、後世に流出したり、削平されている可能性もあるので、本来はもっと厚みがあったのではないかと推測される。

墳丘の断面形状と高低差（第15図）斜面に土を寄せるように盛り上げ、墳丘を造成している。いわゆる「山寄せ」と表現される古墳の一例である。等高線に直交するA-A'ラインでは、29.8～33.2mの範囲に墳丘の盛土が施されていて、基盤層の勾配に対して墳丘部が緩やかに盛り上がる。盛土の厚さは最厚部で0.6m、墳丘裾部から墳頂部の高低差は3.7mである（第15図A-A'）。一方、B-B'ラインで断ち割った盛土の形状は土饅頭形をしている。盛土の厚さは最厚部で0.4mである（第15図B-B'）。ただし、墳丘の断面形状は左右対称ではない。A-A'ラインより北東側は基盤の傾斜に沿って盛土が自然な高まりを形成しており、盛土の端部が墳丘裾部となっている。ところが、A-A'ラインよりも南西側の盛土は整然とした形状をしている。A-A'ラインよりも南西側の地形は、もともと勾配が緩く、5b層を掘削して墳丘を構築するための地盤を整形した後に盛土が施されていると考えられる。なお、B-B'ラインにおける墳丘裾部と墳頂部の高低差は、A-A'ラインより北東側で2.2m、

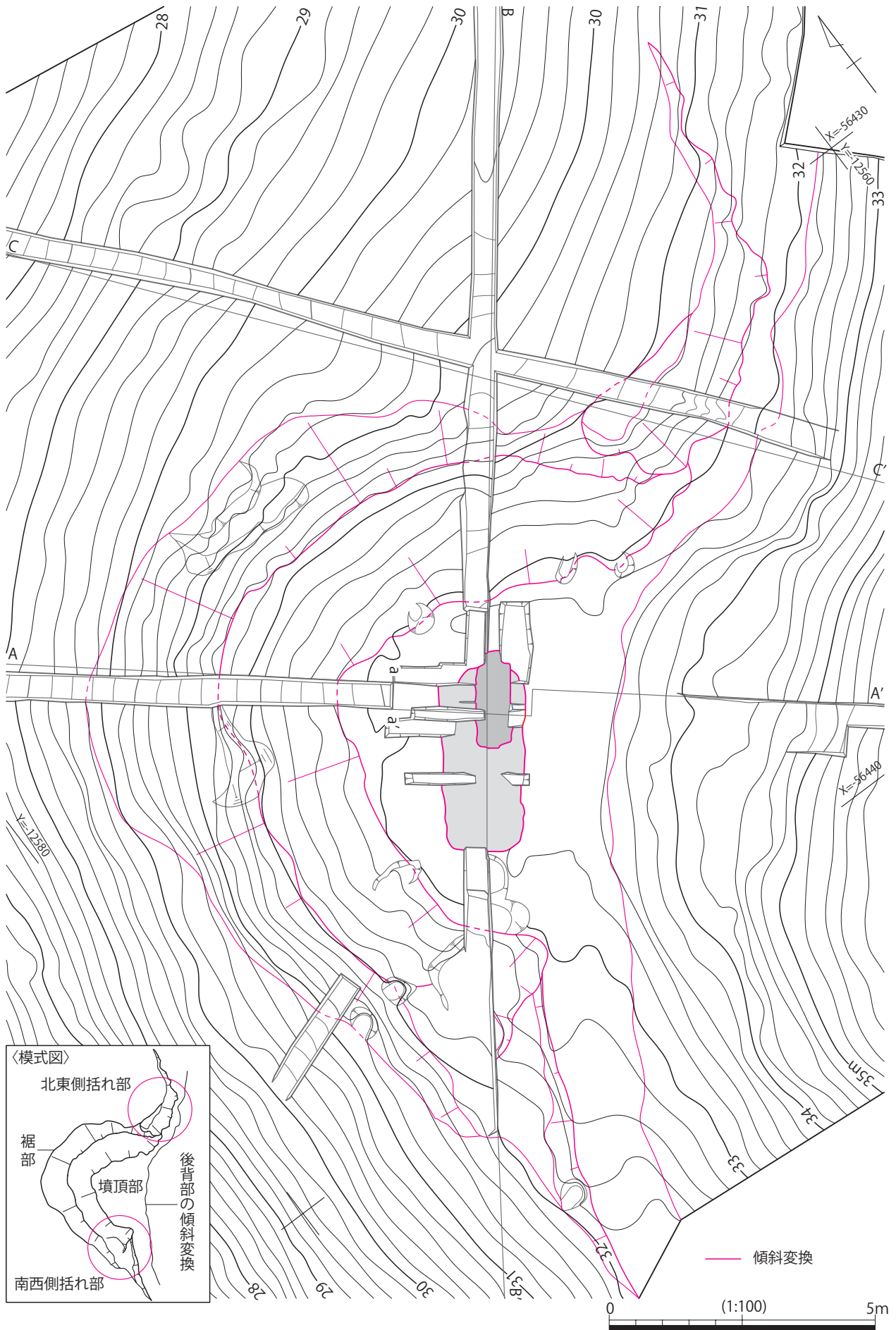
南西側で 1.25 m である。

第 2 項 旧地形

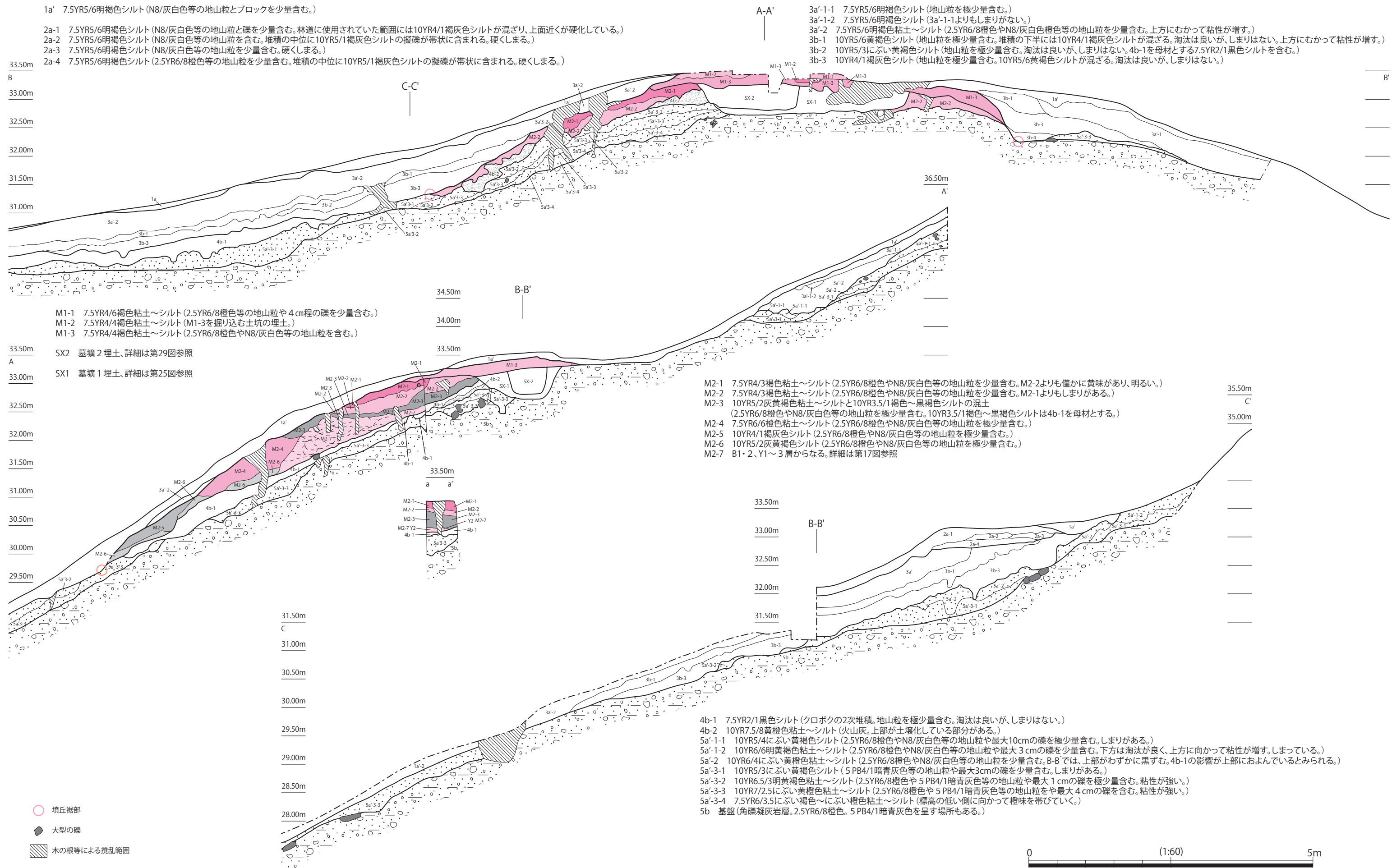
墳頂部に施された M1 層を除去すると、その下面の北東側半分に M2 層、南西側に 5b 層が現れる(第 15 図)。M1 層下面は斜面の勾配にそって傾斜するが、概ね平坦になっており、埋葬施設の構築面となっ



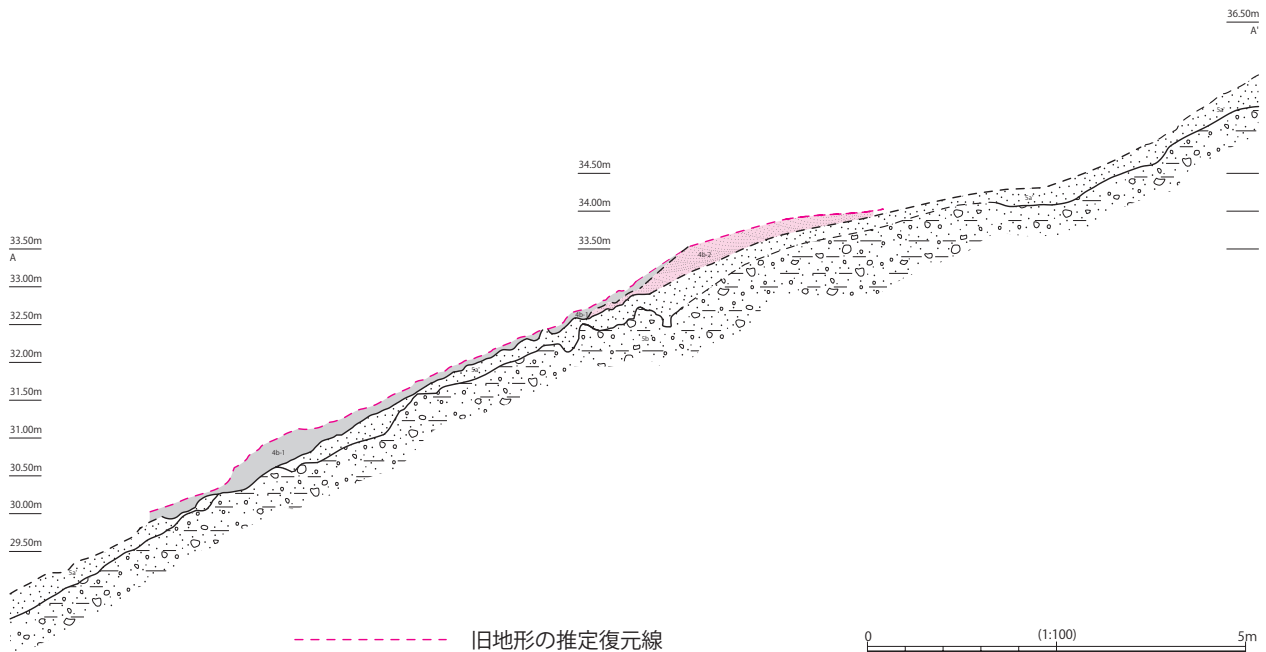
第 13 図 墳丘の形状と周辺の地形



第 14 図 墳丘平面図



第15図 墳丘断面図



第 16 図 旧地形の復元

ている。後述するように、M1 層下面にあらわれた 5b 層の上面は M2 層造成時に整地された地形である。ただし、この周辺に残存する 5a' 層、5b 層から旧地形を推測すると、墳丘築造以前も勾配の緩い地形だった可能性が高い（第 16 図）。

このことは、第 15 図の A-A' ラインの標高 34.1 m 付近に認められる 5b 層上面の平坦な地形にうかがわれる。その上部は 5b 層を母材とする 5a' 層に覆われているので、この平坦な地形は古墳築造時に整地の影響を受けておらず、旧地形が残存している。A-A' ラインでは、埋葬施設の下部、標高 32.7 ~ 32.8 m 付近にも b 層が確認できる。さらに、この付近には 5b 層の上面に 5a' 層や、古墳築造以前に堆積した 4b-1・4b-2 層がある。ここでも古墳築造以前の地形が保たれていると考えられよう。そして、標高 34.1 m 付近に残る平坦な地形と、埋葬施設の下部に残る傾斜をつないだ勾配よりも、墳丘築造時に整地されている墳頂部の 5b 層上面の方が高い位置となる。つまり、古墳が築造された場所の傾斜は一樣な勾配だったのではなく、墳頂部の付近が、もともと勾配の緩い、やや平坦な地形であったと推測できる（第 16 図）。

第 3 項 墳丘の構築と盛土の特徴

地盤の整備、墳丘盛土、墓壙上盛土に大別し、墳丘の構築と盛土の特徴を述べる。なお、ここでは、埋葬施設の構築基盤となる盛土を「墳丘盛土」、埋葬施設の上部を覆う盛土を「墓壙上盛土」とする。また、第 18・19 図に A-A' ラインの土層断面をもとに作成した構築過程の模式図を示した。

1. 地盤の整備（第 18 図 工程①）

前項で旧地形の復元を試みたが、墳丘の築造に際し、勾配の緩い場所を選択し、盛土に先立ち数ヶ所で地盤を掘削して、整地を行っている。M2 層下部に存在する 4b-1・4b-2 層や 5a' 層の有無から、主に墳丘頂部とその南西側で地盤の掘削が行われていると考えられる。

墳丘頂部 M1層下面は平坦に整形され、埋葬施設の構築面となっていた。埋葬施設よりも南東側には5b層が露出しており、5b層の上面からM2-1・M2-2層の上面が概ね平坦な地形を形成している(第15図A-A'、標高33.5m付近)。墓壙の掘削によって失われているが、本来は墓壙の部分に4a-1・4b-2層、5a'層が存在していたとみられる。なお、墳頂部を平坦に整える作業は、墳丘盛土を施した後、すなわち工程⑦の後にも実施が可能である。

墳丘南西側の括れ部 5b層を掘削して、墳丘構築面が整形されている(第15図B-B')。墳丘の築造に先行して、5b層の掘削を伴う整地が行われており、4b層や5a'層は失われている。一方、墳丘の北東側にはM2層下に4b-2層が残存しており(第15図B-B'、標高31.5～32.0m付近)、さらに、その北東には4b-1層が広範囲に堆積していた。したがって、墳丘の北東側では、旧地形を大きく改変するほどの整地は行われていないと考えられる。

2. 墳丘盛土(第17～19図工程②～⑩)

分層時に、母材に由来する色調や含有物の違いに着目し、M2層をM2-1～M2-7層に細別した。この細別層位からは墳丘盛土の構築過程が読み取れる。なお、特に断りが無い限り、以下の記述はA-A'ラインの観察に基づくものである。

M2-7層(第17図、第18図工程②) 4b-1層上に施された盛土である(第15図A-A')。B1・B2層、Y1～Y3層からなる。ここでは、4b-1層を主な母材とする黒色系の土に「B」、4b-2層を母材とする黄橙色系の土に「Y」を付し、M2-7層を細別した(第17図、巻頭図版8-1)。

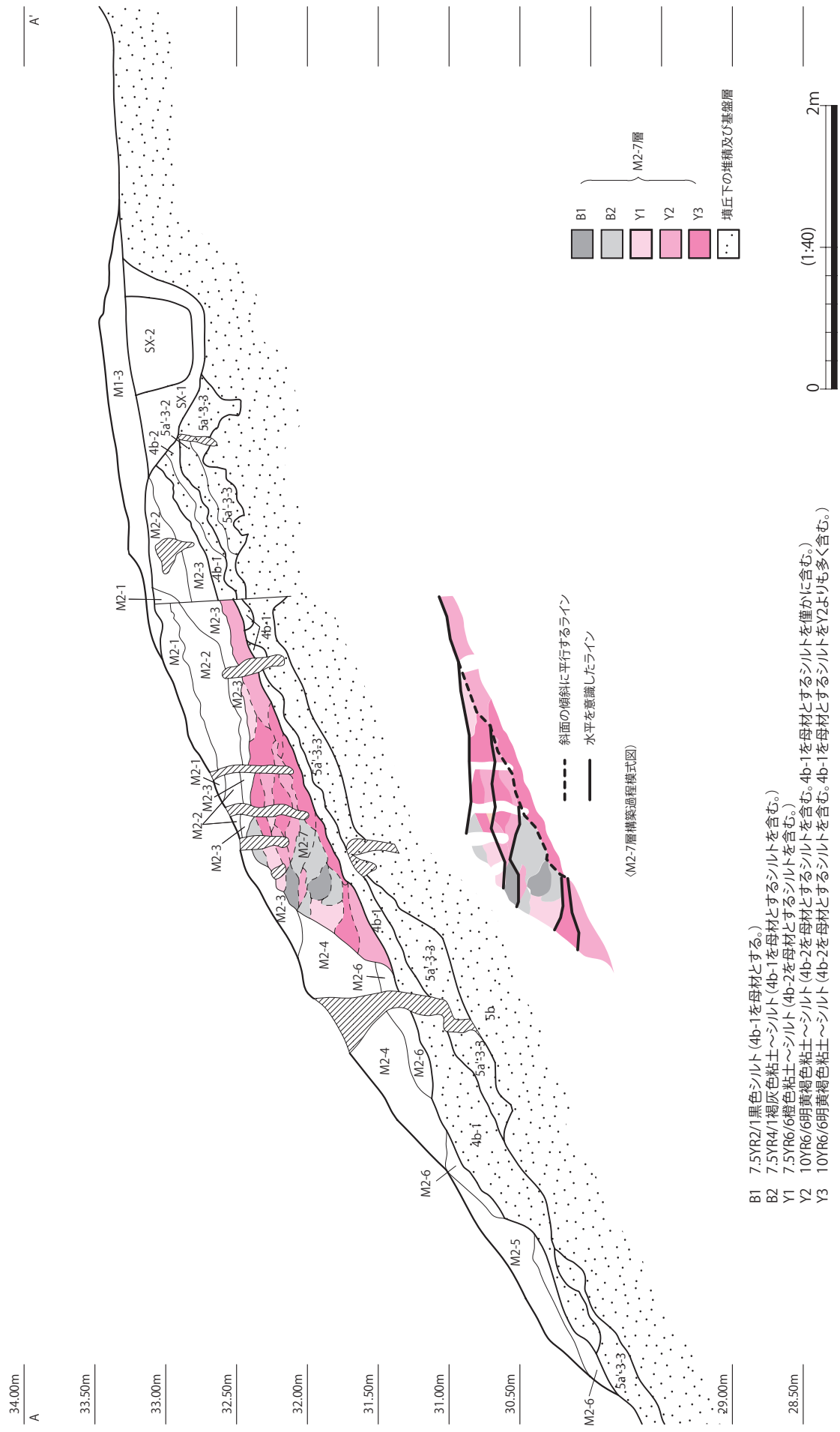
M2-7層は墳丘盛土のほぼ中央にあり、墳丘の芯となる盛土の一単位と考えられる。M2-7層を築くことにより、斜面に大きな段を造っている。盛土の上下両端部の高低差は1.25mである。墳丘北西側はきつい勾配の法面となるが、天端は僅かに傾斜する程度で、幅2m程度の平坦な地形にすることが意識されているようにみえる。その後、この上部にM2-1～M2-3層が盛られている。

一方、M2-7層を構成するB1・B2層、Y1～Y3層は、M2-7層を構成する盛土の最小単位である(第17図)。断面の形状は扁平で不整な楕円形をしているものが多い。幅0.2～0.6m、厚さ0.1～0.2mを測り、大きさにはバラつきがある。一見、無造作に積み重ねられているようにも見えるが、並びを観察すると、天端が斜面の傾斜に平行するものと、水平に近い状態に積まれたものがある(第17図)。前者は、4b-1層直上にあり、M2-7層の最下部に積まれたものである。M2-7層の基礎となるものと考えられよう。そして、後者は、その上部に積まれたものである。天端が水平となるよう、丘陵下方側から順次上方に積み上げられていると考えられる。小さな土塊が積み重なっていることから、「土嚢積み」に類する工法とみられるが、土を梱包する資材の痕跡は確認できなかった。

M2-6層(第18図工程③) M2-7層の下方に施された盛土である。4b-1層と5a'層を母材とする。4b-1層に由来するとみられる土を多く含み、色調は灰色がかかる。3段の低い階段を造るよう、4b-1層上面に薄く盛られている。M2-4・M2-5層を盛るための基礎と考えられる。

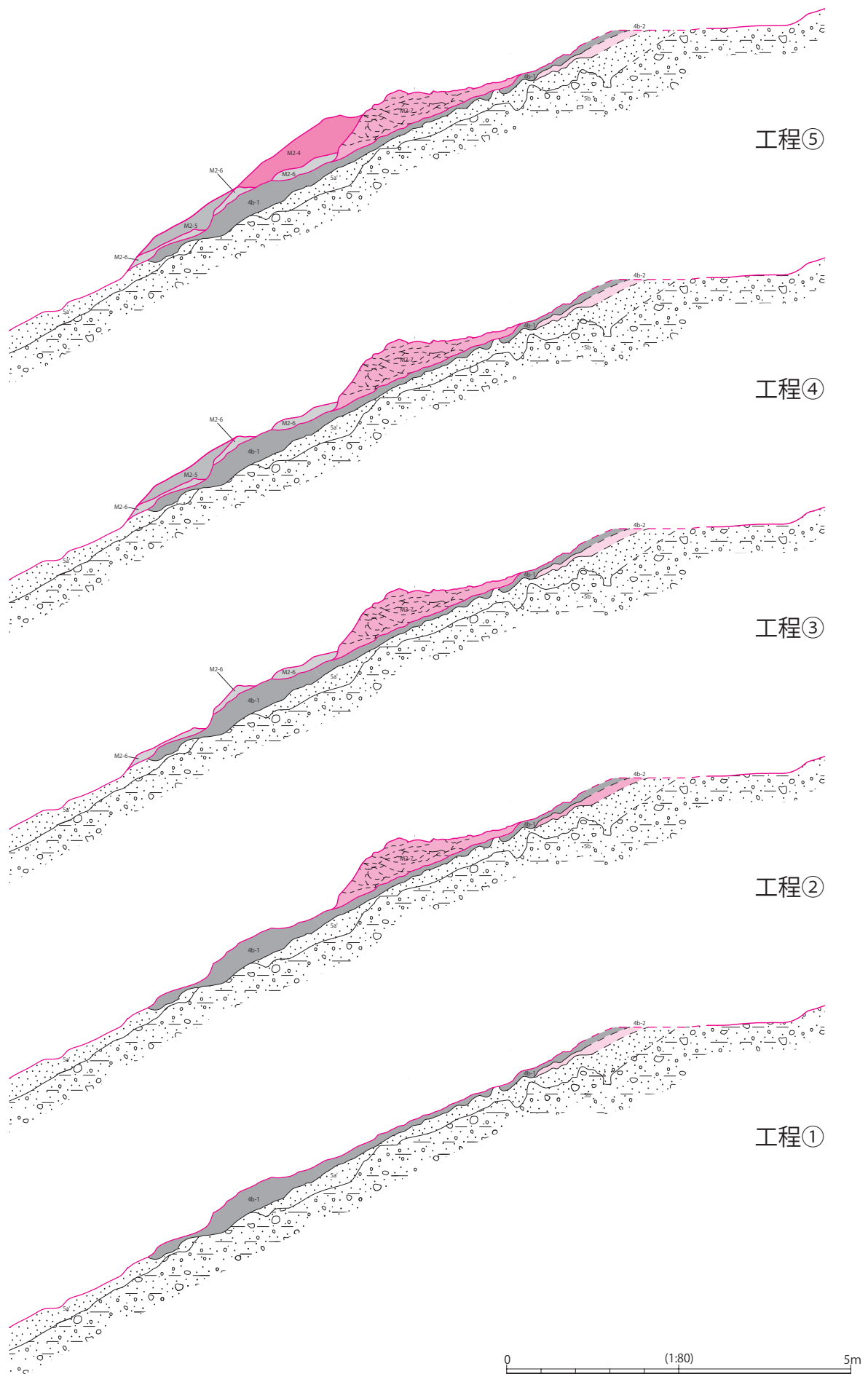
M2-5層(第18図工程④) 階段状に施されたM2-6層の下段部分に積まれた盛土である。M2-6層中段の上端にすりつくように施されている。4b-1層を母材とする土を多く含んでいた。

M2-4層(第18図工程⑤) M2-6層の中・上段に積まれた盛土である。M2-7層の法面を2/3程度覆う。5a'層を母材とする土を多く含んでいた。M2-5層の上面と同じ勾配で法面を造り、法面の上端からM2-7層にかけて幅0.6m程の平坦面を形成して、その上部にM2-3層の一部がのる。

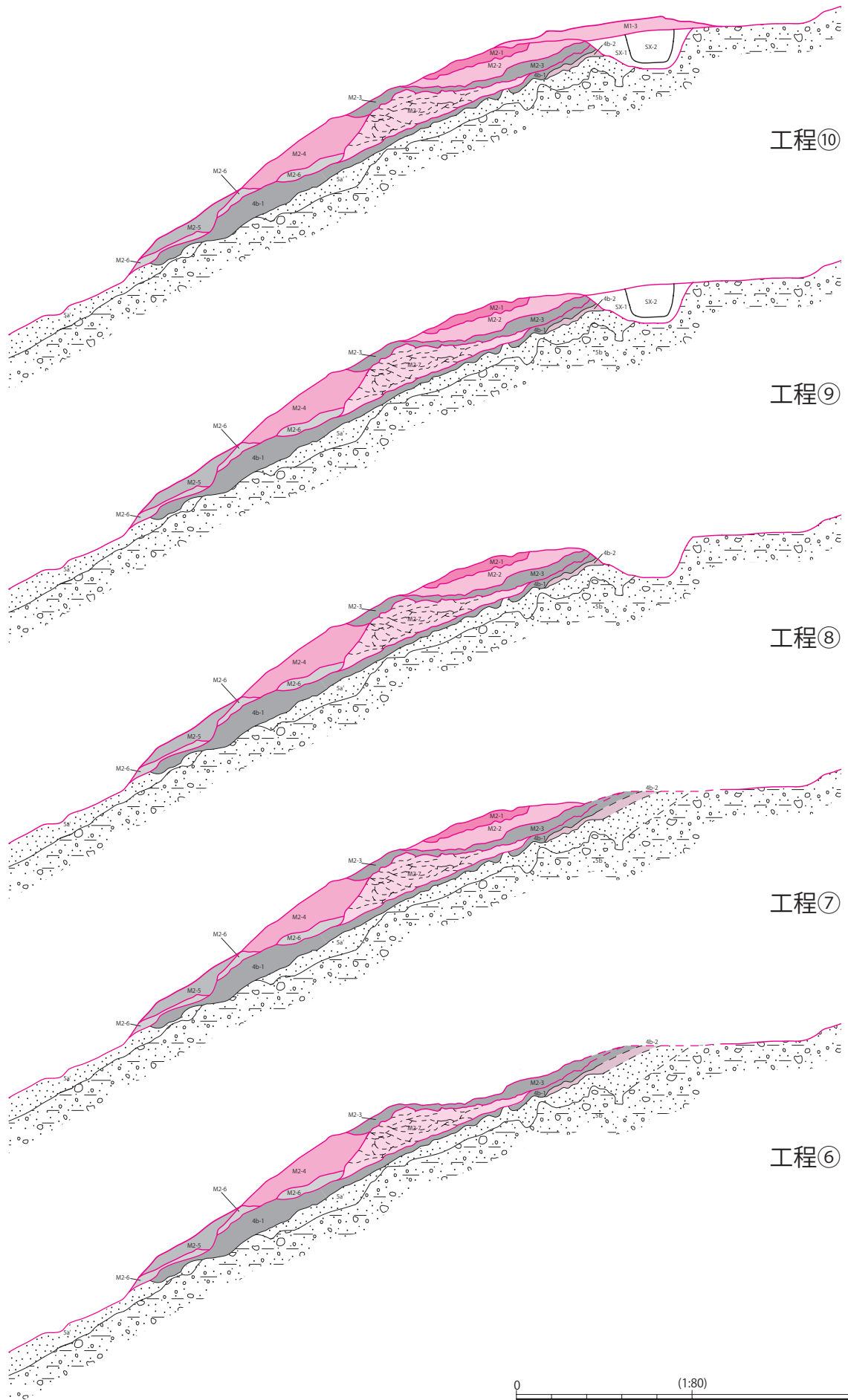


第 17 図 墳丘盛土 M2-7 層詳細図

- B1 7.5YR2/1 黒色シルト (4b-1 を母材とする。)
- B2 7.5YR4/1 褐色灰色粘土～シルト (4b-1 を母材とするシルトを含む。)
- Y1 7.5YR6/6 褐色粘土～シルト (4b-2 を母材とするシルトを含む。)
- Y2 10YR6/6 明黄褐色粘土～シルト (4b-2 を母材とするシルトを含む。4b-1 を母材とするシルトを僅かに含む。)
- Y3 10YR6/6 明黄褐色粘土～シルト (4b-2 を母材とするシルトを含む。4b-1 を母材とするシルトを Y2 よりも多く含む。)



第 18 図 填丘構築過程模式図 1



第 19 図 填丘構築過程模式図 2

M2-3層（第19図 工程⑥） M2-7層と4b-1層を覆う盛土で、4b-1層と5a'層を母材とする混土層である。下端部がM2-4層にのり、M2-7層上面から4b-1層上面の傾斜にそって施されており、上面は緩やかに傾斜して、全体が僅かにたわむ。

M2-1・M2-2層（第18図 工程⑦） M2-3層上に施された盛土である。どちらも主に5a'層を母材としており、土質はよく似ている。平坦に整地された5b層にすりつき、墳丘頂部および埋葬施設の構築面となる。

3. 埋葬施設（第19図 工程⑧⑨）

M2-1・M2-2層を盛って、墳丘の築造が終了した後に、埋葬施設が設けられている。墓壙1に埋葬を行った後、さらに墓壙2が掘削される。なお、地盤の整備のところにも記したように、墳丘頂部の整形は、この段階でも実施可能である。

4. 墓壙上盛土（第19図 工程⑩）

M1-1～M1-3層 墳丘盛土構築後、2度の埋葬が行われた後に、墳丘頂部に施された盛土である。墓壙1・2の上部に最厚部で0.2mの盛土が残存していたが、埋葬施設の南東側は林道の敷設により削平されていた。M1-3層で埋葬施設の上部を覆い、その上部にM1-1層が盛られる。なお、M1-3層上面には小規模な浅い土坑があった。土坑内に堆積していたのが、M1-2層である。その土坑の周辺には須恵器片が散在していた（第20図）。

第4項 墓壙上盛土と出土遺物

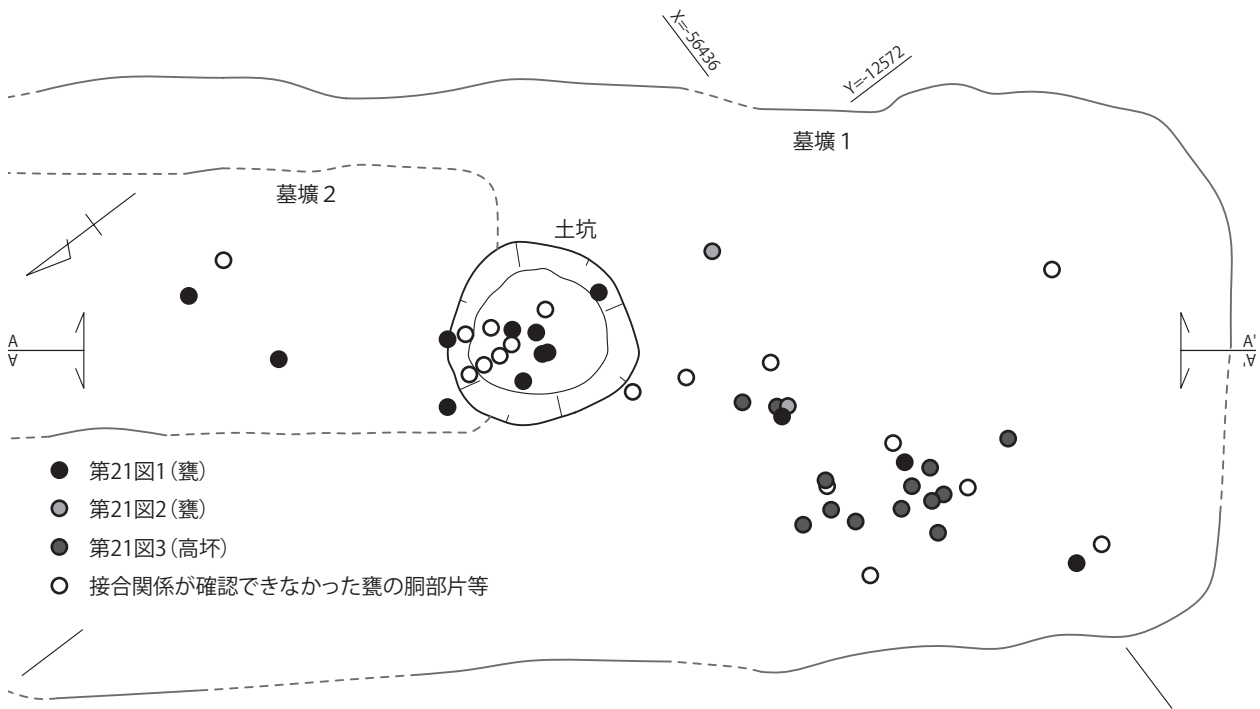
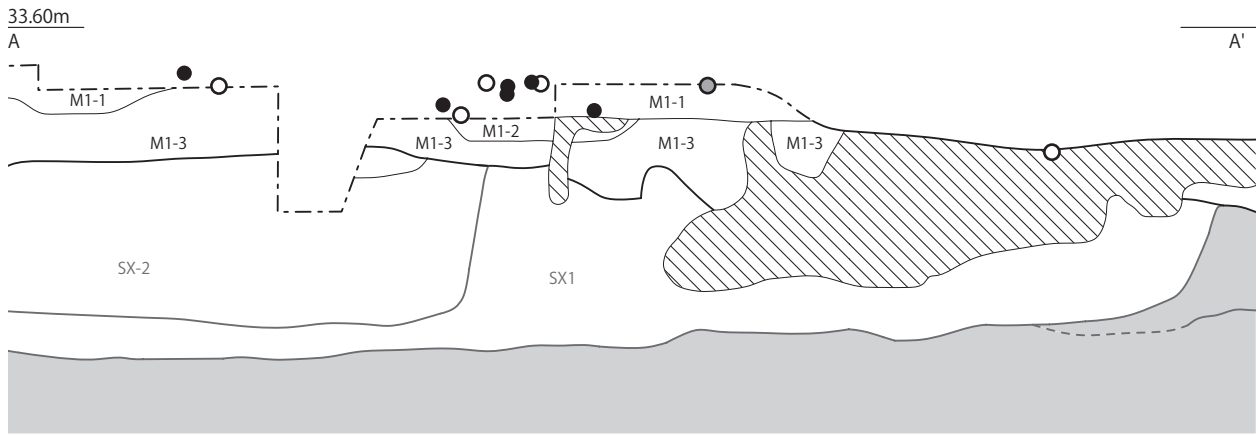
1. 墓壙上盛土の検出と掘削（第20図、図版8-1）

市教委Tr-2の再発掘時に、埋め戻されていた須恵器片を検出し、トレンチの壁面で土層断面の確認を行った結果、墓壙上に盛土が存在することが判明した（図版8-1）。その際、墓壙上盛土がM1-1層～M1-3層に細分できること（第20図）、須恵器片がM1-1層中に含まれていることを確認した。そこで、次に、須恵器片の分布範囲を明らかにするため、須恵器片の出土レベルに留意しながら、M1-1層を掘削することにした。

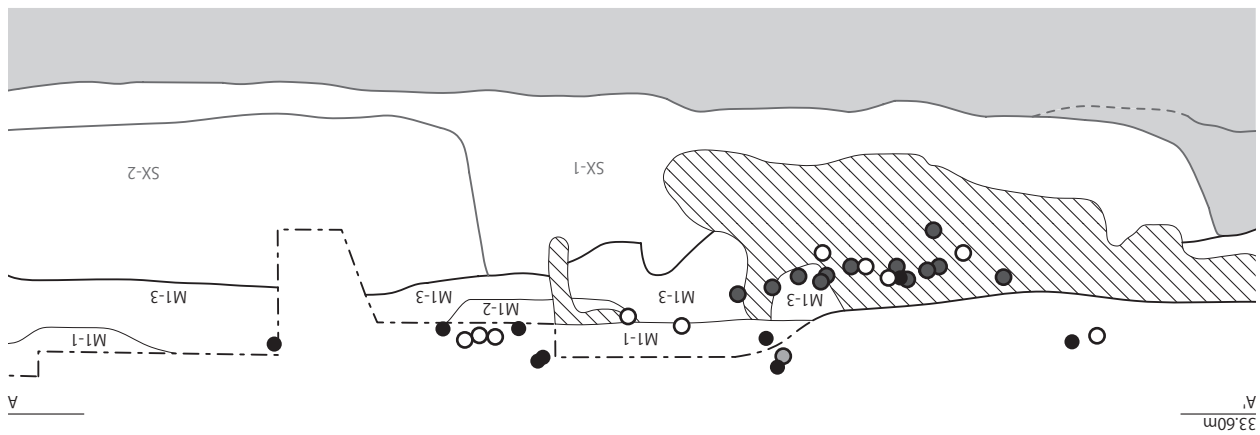
2. 遺物の出土状況（第20・21図、図版8-2・9・10-1）

M1-1層を掘削するとともに、木の根による攪乱部分も掘り下げ、須恵器片の分布範囲を確認した。須恵器片は墓壙上盛土下面で検出した埋葬施設に重なるように分布しており、2.6×0.8mの範囲に広がっていた（第20図）。また、墓壙2の南西端にあたる場所には、M1-3層を掘り込む円形の土坑があり、その上面に須恵器片が集中していた。土坑の南西側からも多くの須恵器片が出土しているが、これらは木の根による攪乱の中に含まれていたものである（第20図）。

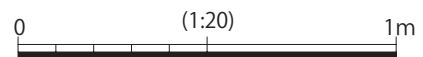
出土した須恵器片を持ち帰って、接合関係を確認したところ、3個体の須恵器が存在することがわかった。第21図1の甕の破片は、広範囲から出土しているが、分布の中心は土坑の周辺にある（図版8-2・図版9）。一方、同3の高杯の破片は南西側の攪乱部分に集中していた（図版10-1）。また、



- M1-1 7.5YR4/6褐色粘土～シルト(2.5YR6/8橙色等の地山粒や最大4cm程の礫を少量含む。)
- M1-2 7.5YR4/4褐色粘土～シルト(M1-2を掘り込む浅い土坑の埋土。)
- M1-3 7.5YR4/4褐色粘土～シルト(2.5YR6/8橙色やN8/灰白色等の地山粒を含む。)



木の根等による攪乱範囲

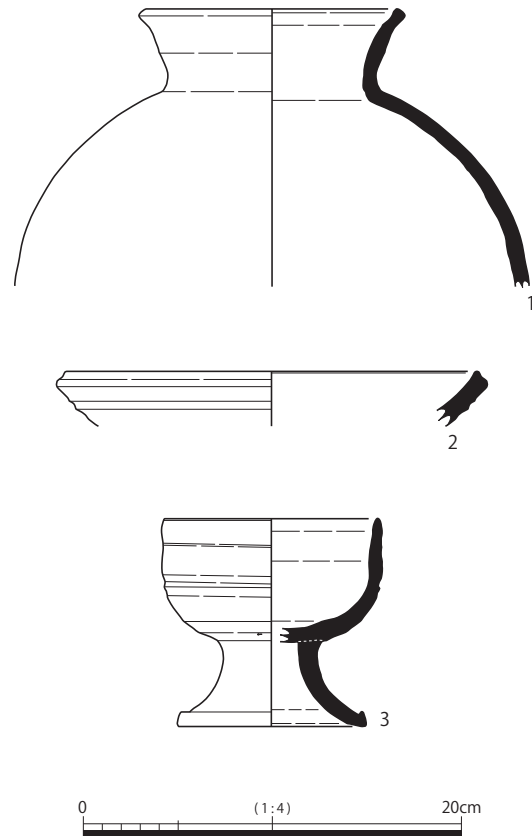


第20図 墓壙上盛土(M1層)遺物出土状況および土坑平・断面図

同2の甕とみられる口縁部片は攪乱の上部から浮いた状態で出土した。接合関係のない須恵器の胴部片には、同2と胎土・色調・焼成の似たものが多い。その分布は同1の甕と同様、土坑の周辺に集中していた。いずれも原位置を保つものではないが、土坑上部に甕が2個体、その南西側が高杯が置かれていた可能性が須恵器片の分布状況にうかがわれる（第20図）。

3. 土坑（第20図・図版10-2）

M1-1層下面で検出した。M1-3層を掘り込む。埋土はM1-2層である。墓壙上の盛土ではないが、M1-1層とM1-3層の間に介在するため、土層名についてはM1層の中で整理した。土坑の直径0.5m、深さ0.06mである。掘り込みはM1-3層中におさまり、埋葬施設にまではおよんでいない。また、上部には須恵器片が集中していたが、M1-2層中に須恵器片は含まれていなかった。



第21図 墓壙上盛土（M1層）出土遺物

4. 出土遺物（第21図、図版22-2・23）

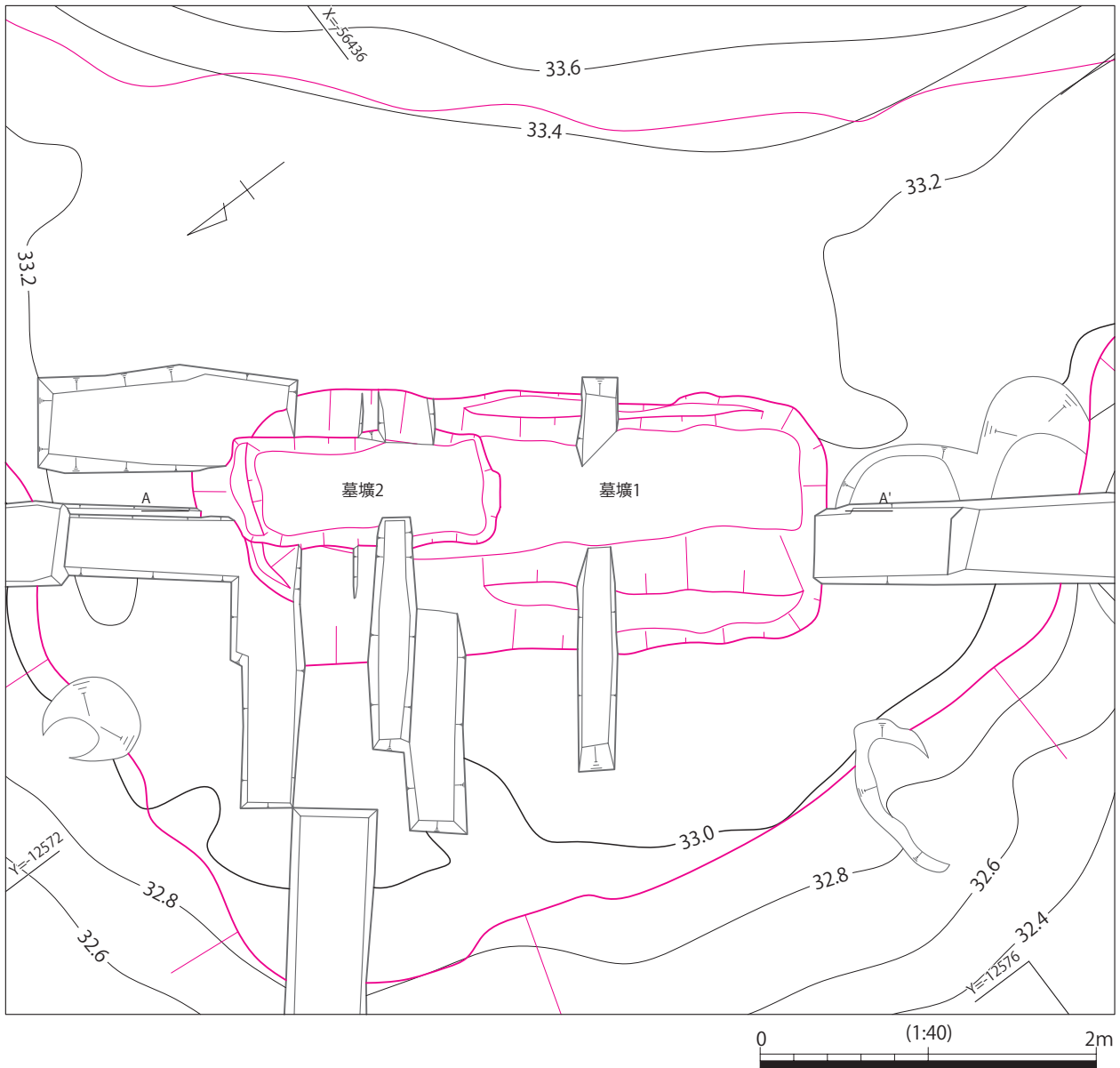
3個体に相当する須恵器が出土した（第21図）。1は甕で、球形を呈す胴部に外反する口縁部が付く。全体にナデ調整が施されている。図示できなかったが、胴部外面に叩板、内面に当具の痕跡が僅かに認められる。2は甕の口縁部片と考えられる。外面に1条の浅い沈線がめぐり、脚部の可能性もあるが、同一個体とみられる非接合資料がいずれも甕の胴部片であることや、脚部とした場合の傾きが不自然に感じられるので、口縁部として図上復元した。3は高杯である。坏部は椀形を呈す。口縁部外面に、ナデ調整による稜が生じている。また胴部に2条の沈線がめぐり、底部にはヘラケズリが施されている。焼成時に胎土の鉄分が還元されておらず、色調は赤味がかかる。

第4節 埋葬施設と出土遺物

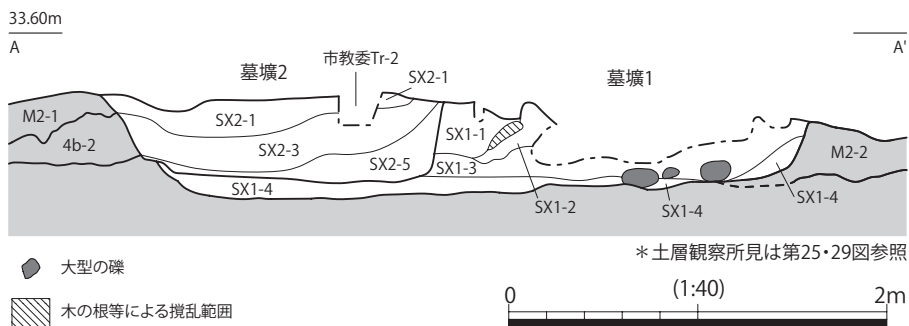
第1項 埋葬施設の検出

検出状況（第15・22～24図、巻頭図版2-1） 墓壙上盛土の下面で、埋葬施設の検出を試みた。まず、埋葬施設の掘り方を確認するために墓壙上盛土下面の精査を行った。基盤層である5b層を掘り込む南東側の掘り方の把握は容易で、概ね等高線に平行するように埋葬施設が設けられていることが確認できた。

ところが、墳丘盛土を掘り込む北西側の掘り方は、墓壙を埋める土と墳丘盛土との違いが分かりにくく、掘り方の把握が簡単ではなかった。そこで、埋葬施設の埋土を上面から薄くすきとりながら、埋葬施設の短軸方向に設定されていた市教委 Tr-2 の壁面を再精査しながら、平面と断面の観察を併用



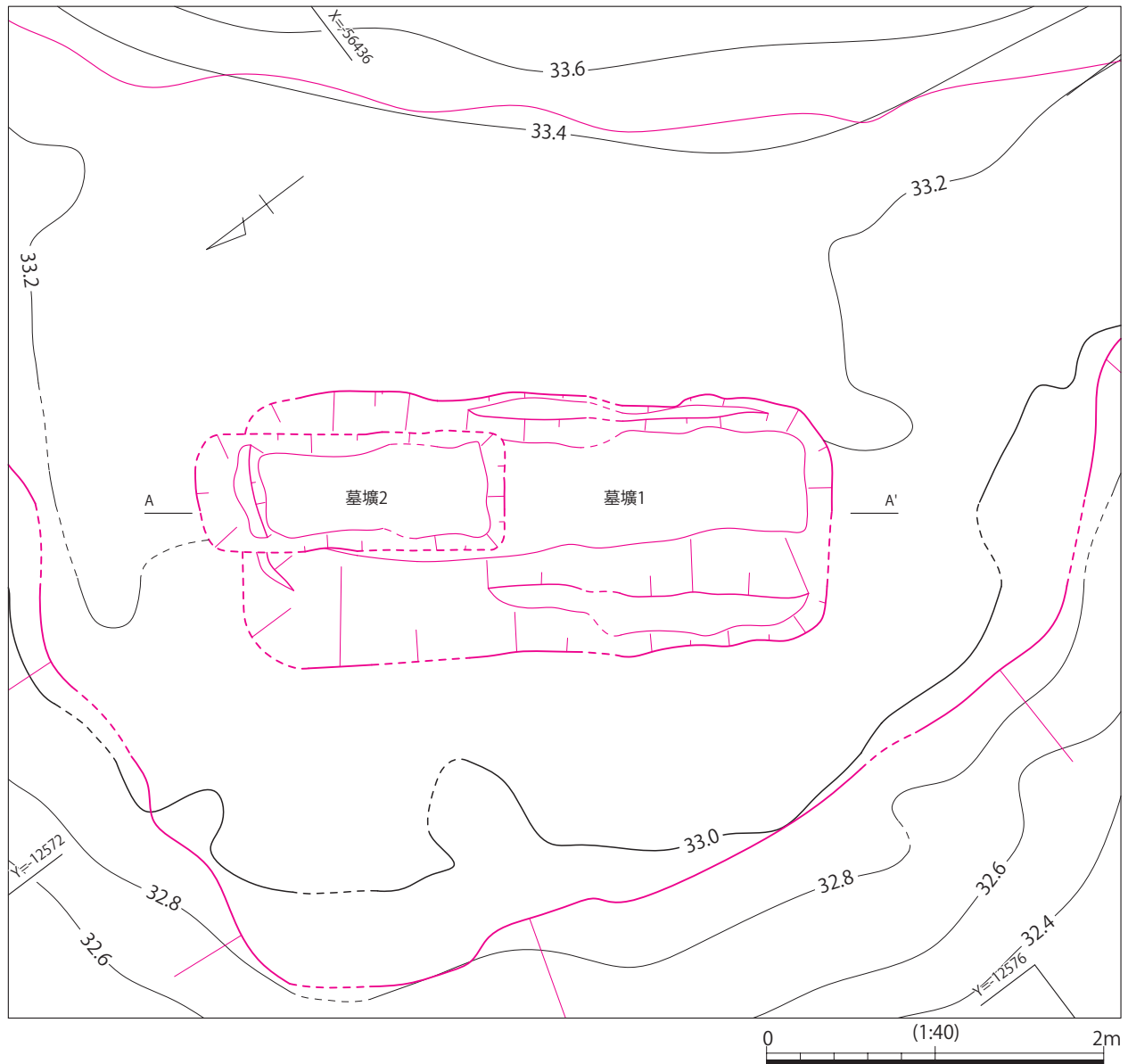
第22図 埋葬施設（墓墳1・2）平面図



第23図 埋葬施設（墓墳1・2）断面図

して埋葬施設の輪郭を把握することにした。その結果、墳丘頂部平坦面のほぼ中央に、隅丸長方形を呈する埋葬施設の掘り方を確認することができた。検出規模は長軸約 3.5 m、短軸約 1.5 m である。

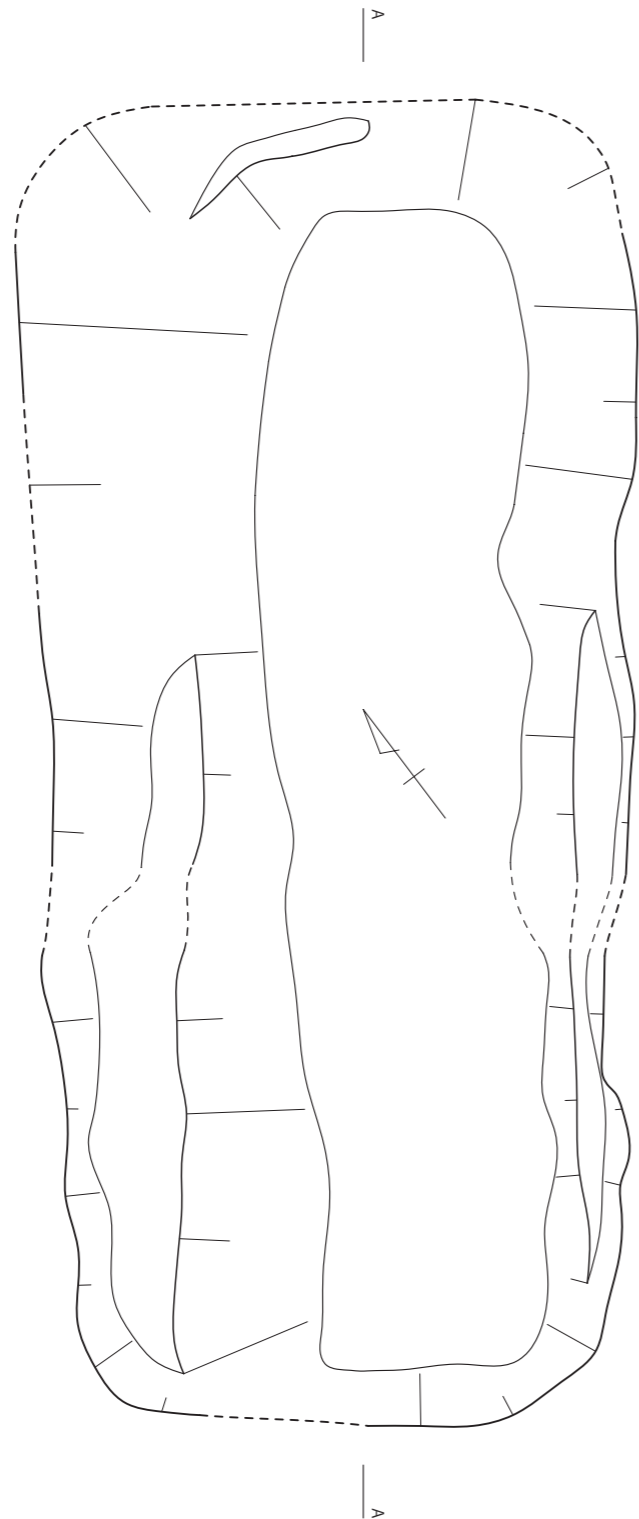
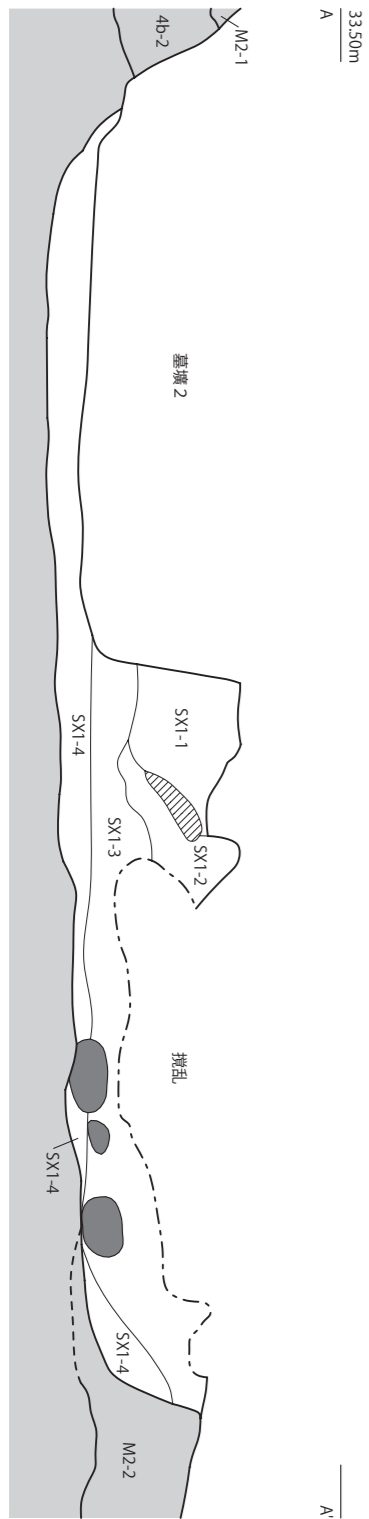
埋土の掘り下げ（巻頭図版 2-2、第 15・22～24 図） 次に埋葬施設内に堆積した土を掘り下げた。その際、埋葬施設の中心軸と概ね一致する場所を通過していた第 15 図 B-B' ラインを長軸方向の土層



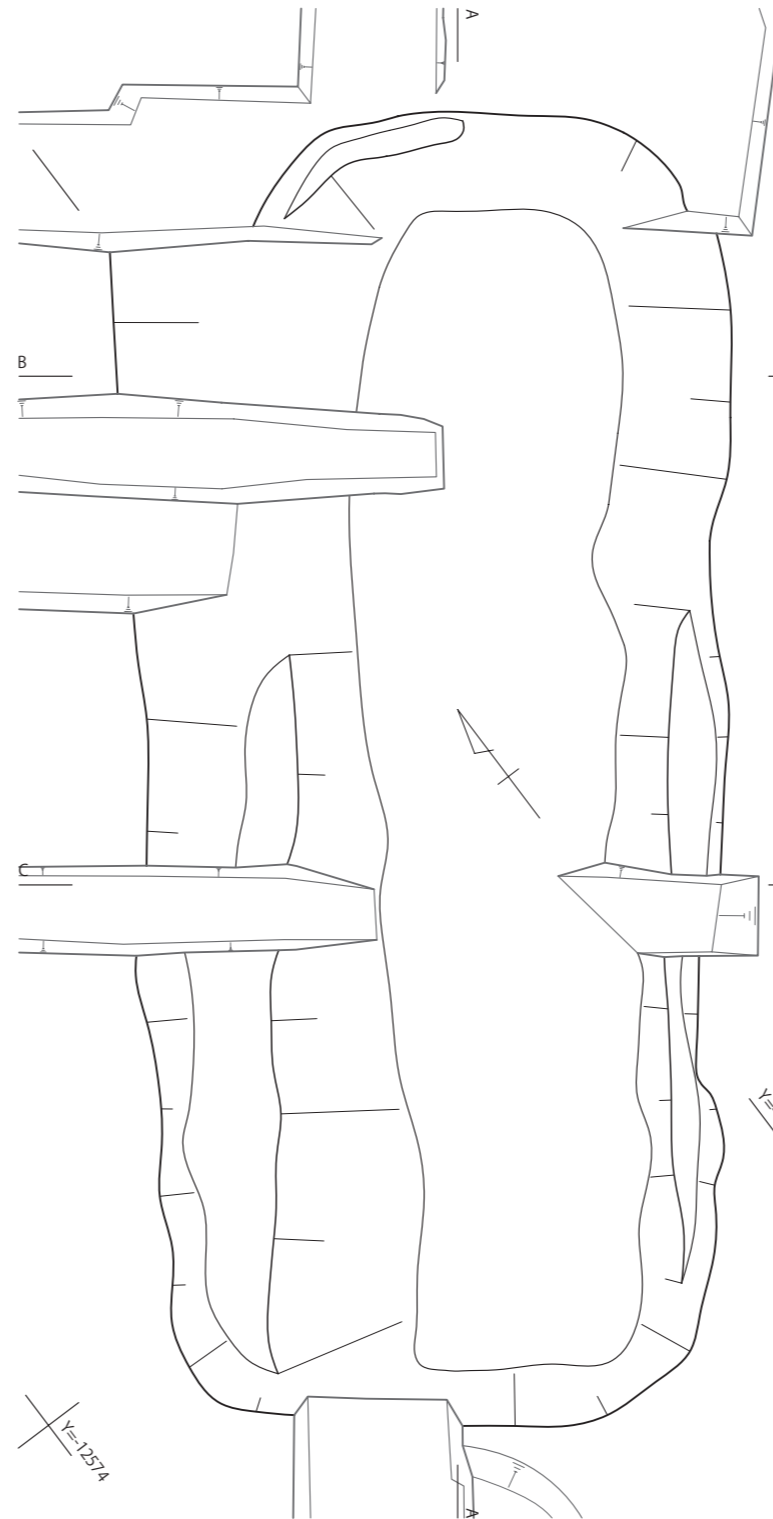
第 24 図 埋葬施設（墓壙 1・2）復元平面図

観察用畦とし（第 22 図 A-A'、第 23 図）、市教委 Tr-2 の壁面（第 15 図 A-A' ライン）と、埋葬施設の北西側の掘り方を確認するために設けたサブトレンチの壁面を短軸方向の土層観察用畦にして、埋土の掘削を進めた。すると、埋土を掘り下げ中に、埋葬施設の北東側から高杯や提瓶等の須恵器が出土した。須恵器の出土層位と高さを埋葬施設の底面まで届いているサブトレンチの断面と比較したところ、この須恵器は埋葬施設の底面から少し浮いた位置にあると思われたので、周囲の掘り下げを止めて、土層の再観察を行った。

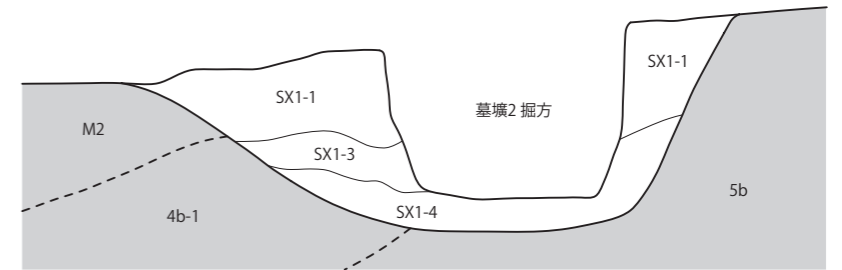
その結果、当初は 1 つの埋葬施設と考えていた掘りに新旧 2 つの墓壙が重複していること、埋土掘り下げ中に出土した須恵器が新しい段階の墓壙に伴うものであることが明らかとなり、古い段階の墓壙を「墓壙 1」、それを掘り込む新しい段階の墓壙を「墓壙 2」とした（第 22～24 図、巻頭図版 2-2）。



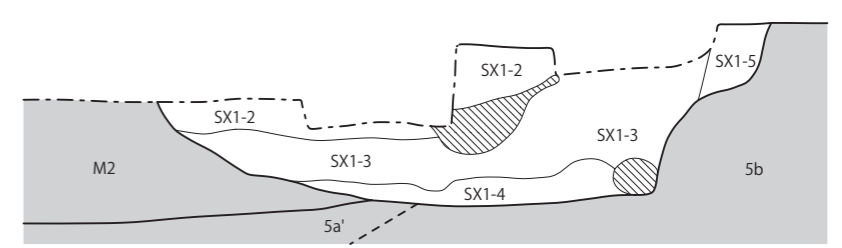
復元平面図



B' 33.50m
B



X=56436
C 33.50m
C

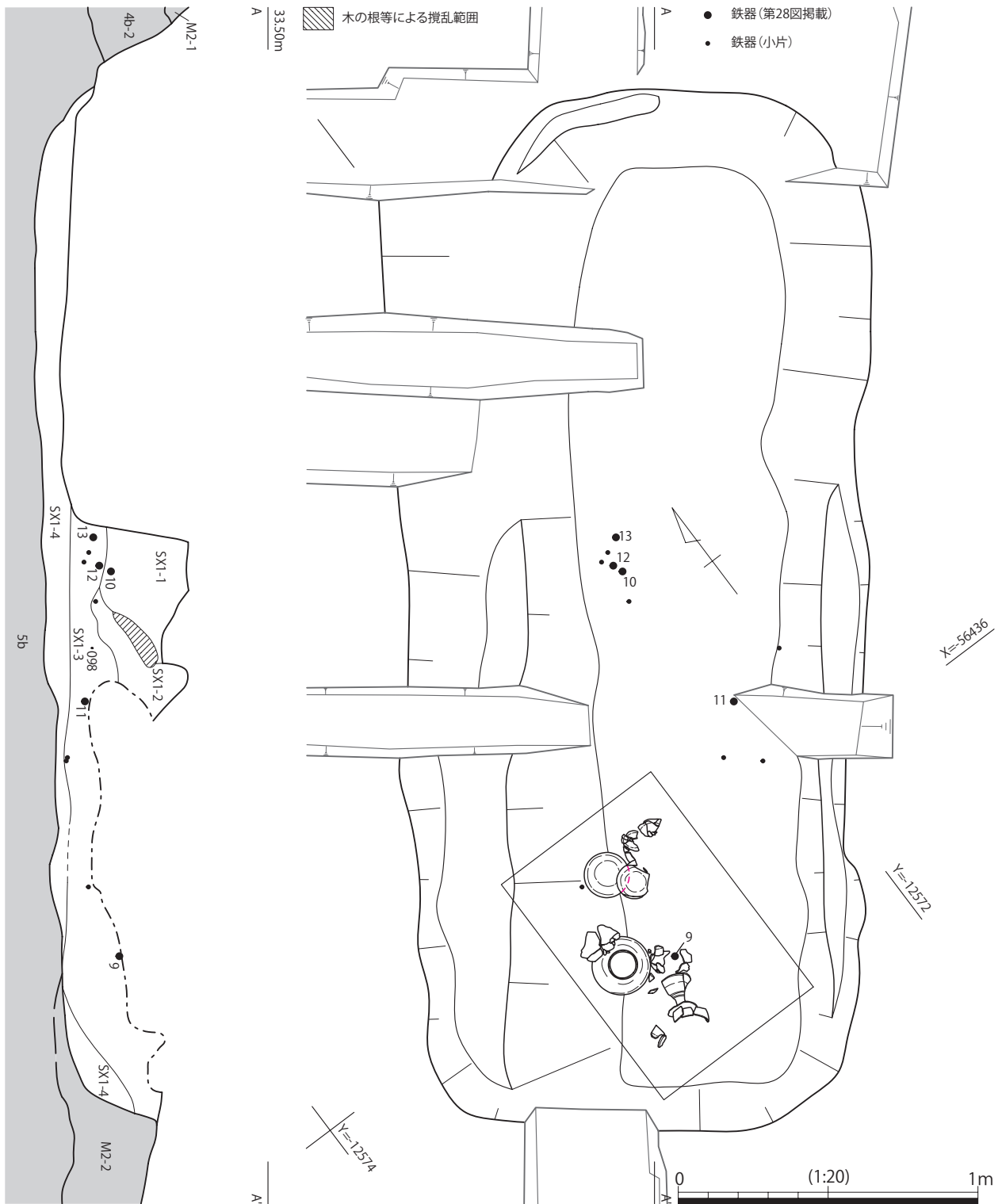


● 大型の礫
▨ 木の根等による攪乱範囲



- SX1-1 10YR6/6明黄褐色粘土～シルト(2.5YR6/8橙色や7.5R5/1赤灰色等の地山粒を少量含む。)
- SX1-2 10YR6/6明黄褐色粘土～シルト(SX1-1よりも僅かに明るい。2.5YR6/8橙色や7.5R5/1赤灰色等の地山粒を極少量含む。)
- SX1-3 10YR5/6黄褐色粘土～シルト(2.5YR6/8橙色や7.5R5/1赤灰色の地山粒や最大2cm程の礫を少量含む。)
- SX1-4 7.5YR5/6明褐色土粘土～シルト(7.5R5/1赤灰色等の最大3cmの礫を含む。SX1-1～3よりもしまっている。)
- SX1-5 10YR5/4にぶい黄褐色粘土～シルト(2.5YR6/8橙色等の地山粒や最大2cmの礫を含む。しまりが無い。)

第25図 墓塚1平・断面図

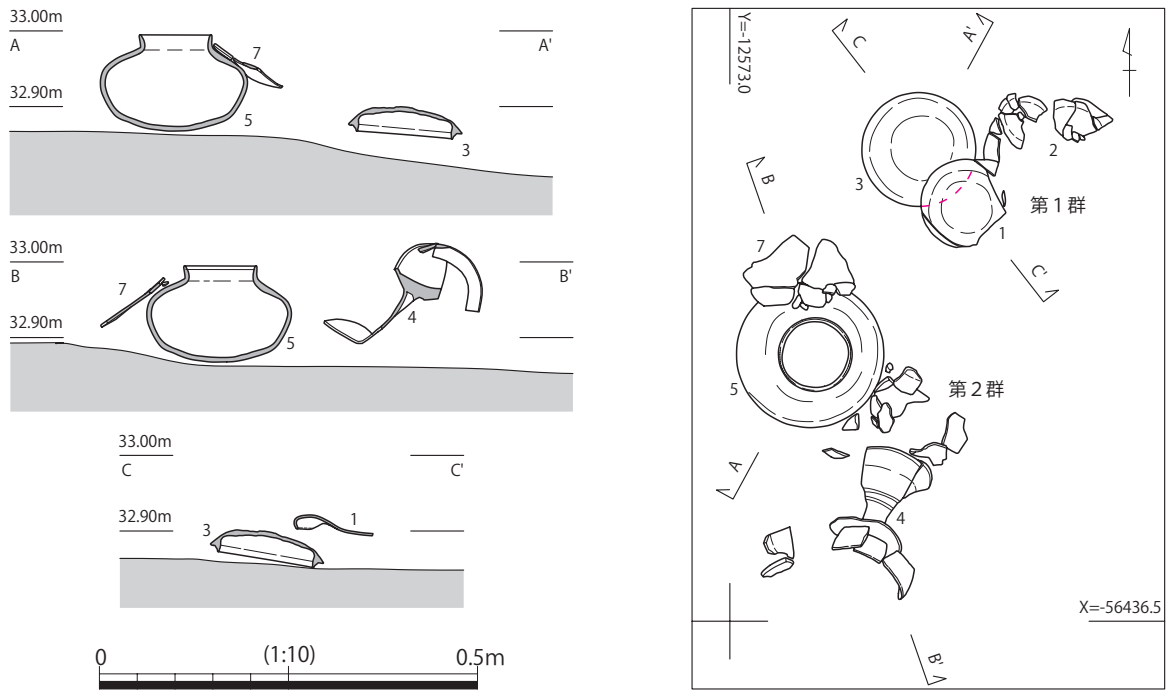


第26図 墓壙1遺物出土状況1

第2項 墓壙1と出土遺物

1. 墓壙1の形状と埋土（第22・23・25図、巻頭図版6・7-2）

形状 長軸方向は等高線に平行している（第22図）。墓壙の掘方は隅の丸い長方形を呈し、規模



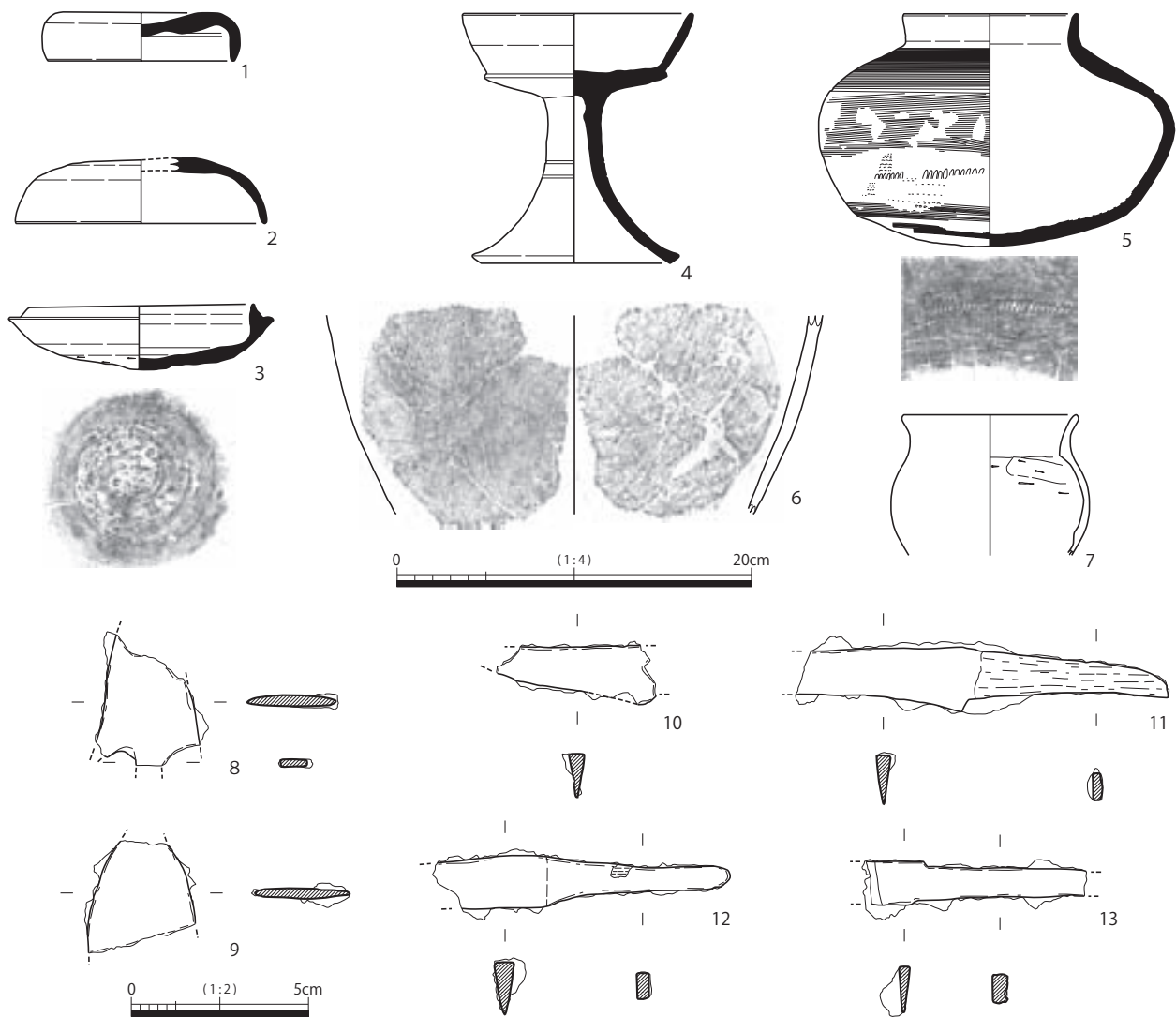
第27図 墓壙1遺物出土状況2

は長軸 3.47 m、短軸 1.4 ~ 1.62 m、深さ 0.5 ~ 0.55 m である。北東側壁面の一部と北西および南東側壁面の一部が段掘りとなっている（第 25 図）。また、墓壙の下端は明瞭な稜をなさず、底面は僅かに丸みを帯びており、短軸方向の断面形は浅い U 字形をしている（第 25 図 B-B'・C-C'）。側壁が外に開きながら立ち上がり、緩く弧を描くような掘方の断面形状から、長さ 3 m 以上、幅 1 m ほどの刳抜式木棺が埋設されていたことがうかがわれる（巻頭図版 6-2・7-2）。

埋土 第 25 図 A-A'・B-B'・C-C' 断面に観察できた埋土は SX1-1 ~ SX1-5 である（巻頭図版 6）。墓壙 2 の掘削によって、北東側は埋土が失われていた。また、南西側は樹木の根による攪乱で、土層が乱れていた（第 25 図 A-A'）。

SX1-1 ~ SX1-3 層は埋設した木棺が腐食した後に棺内に流入したと考えられる土である。墓壙上盛土の M1 層と土質は近似していた。しかし、SX1-1 ~ SX1-3 層の方が色調が明るく、含有される砂礫の在り方等に若干の違いが認められたので、M1 層と SX1-1 ~ SX1-3 層は同一の土ではないと判断した。墓壙 2 の掘削が SX1-1 ~ SX1-3 層を明確に掘り込んでいることから、SX1-1 ~ SX1-3 層は墓壙 2 を掘削する以前に墓壙 1 内に堆積した土である（第 23・25 図 A-A'・B-B'）。したがって、墓壙 2 の掘削以前に墓壙 1 の上部を覆っていた土が木棺の腐食、陥没に伴い墓壙 1 内に落ち込んだものと考えられよう。

一方、最下層にある SX1-4 層は墓壙の底面に敷かれた土とみられる。第 25 図 A-A' の観察では、基盤層（5b 層）の掘削により凹凸が生じた底面に SX1-4 層を敷いて、墓壙の底面を平坦に整えていることがわかる。短軸方向の第 25 図 B-B' 断面を観察すると、SX1-4 層上面が緩く弧状に窪んでいる。この上面に刳抜式木棺が設置されていたと推測される。また、A-A' 断面には SX1-4 層が南西側の壁面にすりあがっていく様子が観察できた（第 25 図 A-A'、巻頭図版 6-1）。北東側の端部は墓壙 2 に掘削されていて、詳細が分からないが、木棺の端部は垂直ではなく、斜め上方に立ち上り、舟形を呈していた可能性がうかがわれる。



第28図 墓壙1出土遺物

なお、SX1-5層は第25図C-C'断面にしか確認ができなかった。木棺の腐植によって上部から落ち込んできたと推測されるSX1-3層の外部にあることから、木棺の埋設時に充填された裏込めと考えられよう。

2. 遺物の出土状況 (第26～28図、巻頭図版6・7-1、図版13-2・14・15)

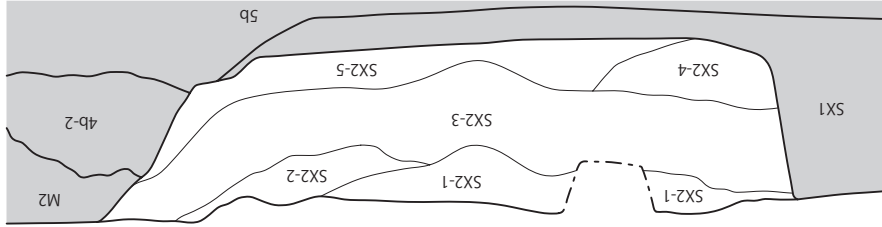
墓壙1からは、土器(第28図1～7)と鉄器(同8～13)が出土した。いずれもSX1-3層中に含まれていたものである。

土器 墓壙南西側から須恵器(第28図1～5)と土師器(同6・7)が出土した(第26図、巻頭図版6・7-1、図版14)。1・2は坏蓋、3は坏身、4は高坏、5は短頸壺、6は大型の甕の胴部片、7は小型の甕である。墓壙の中心軸よりも北東側の壁面よりに1～3と4～6がそれぞれ小群を形成していた。前者を第1群、後者を第2群とする(第27図)。なお、7は、4～6の周辺から小片の状態で出土した。第2群に伴うものだろう。3や5がSX1-4層上面にほぼ接して出土していることから(第27図A-A'・B-B'・C-C')、これらの土器は木棺内に副葬されていたものと考えられる。

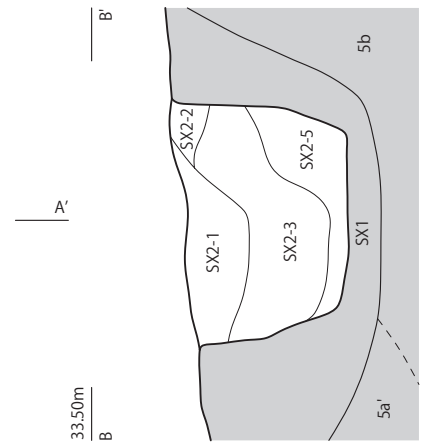
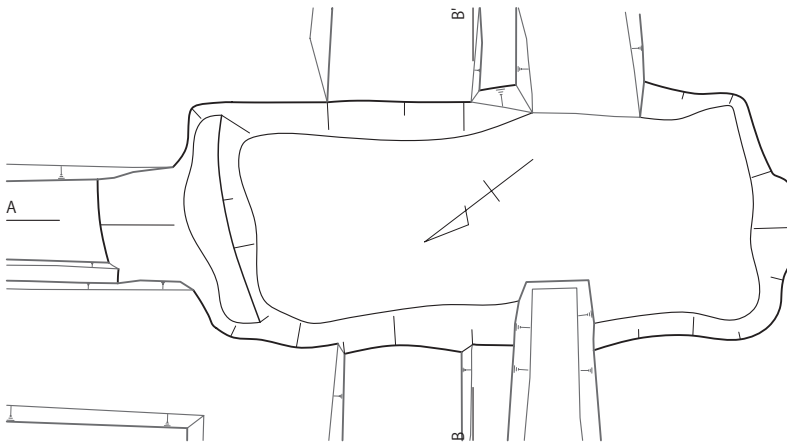
第1群のうち、3の坏身は伏せられた状態で出土した。その南東側に1、東側に2の坏蓋がある。

2と3の口径が近似しており、セット関係にあると考えられる。ただし、出土時には1と3が重なり合っていた。

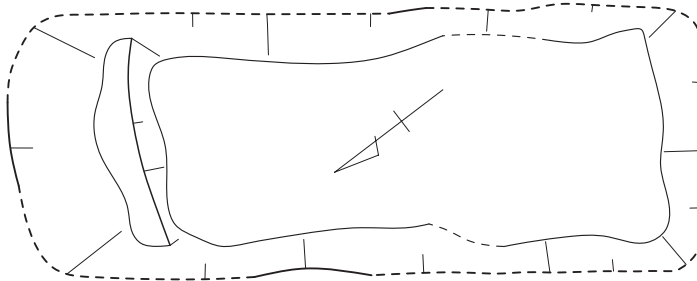
また、第2群のうち、5の短頸壺の肩部には、7が重なった状態で出土した。7は甕の胴部片で、他に接合する土器片が出土していない。甕の胴部片を短頸壺の蓋として転用したものだろう(第27図、



- X=5643A
- SX2-1 7.5YR5/4にぶい褐色粘土～シルト
(2.5YR6/8橙色等の地山粒や1cm程の礫を少量含む。粒度が粗く、しまりが無い。)
 - SX2-2 10YR5/4にぶい黄褐色粘土～シルト
(2.5YR6/8橙色等の地山粒を少量含む。)

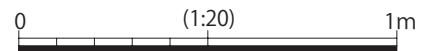


- X=5643A
- SX2-3 7.5YR5/4にぶい褐色粘土～シルト
(2.5YR6/8橙色等の地山粒や1cm程の礫を少量含む。しまりが無い。)
 - SX2-4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土～シルト(しまりが無い。)
 - SX2-5 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土～シルト
(2.5YR6/8橙色等の地山粒を少量含む。SX2-1～4よりもしまっている。)

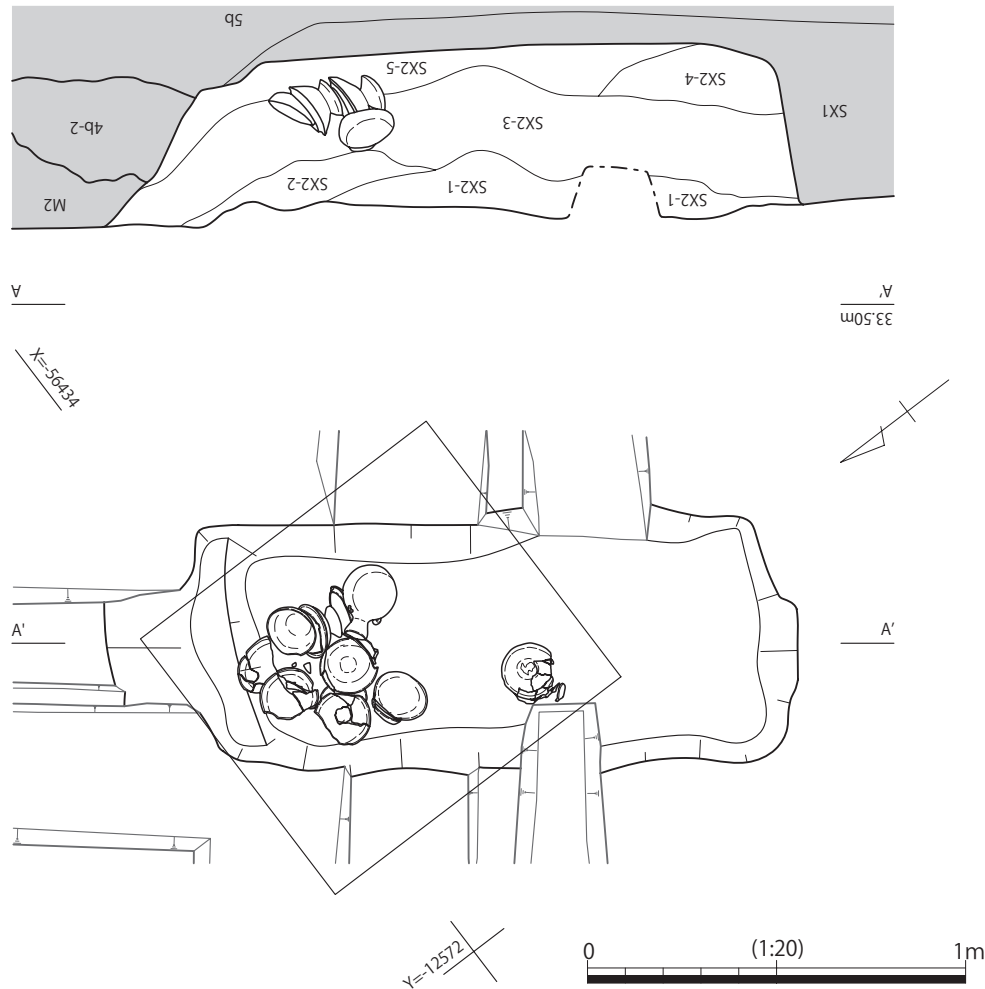


復元平面図

X=12572



第29図 墓墳2平・断面図



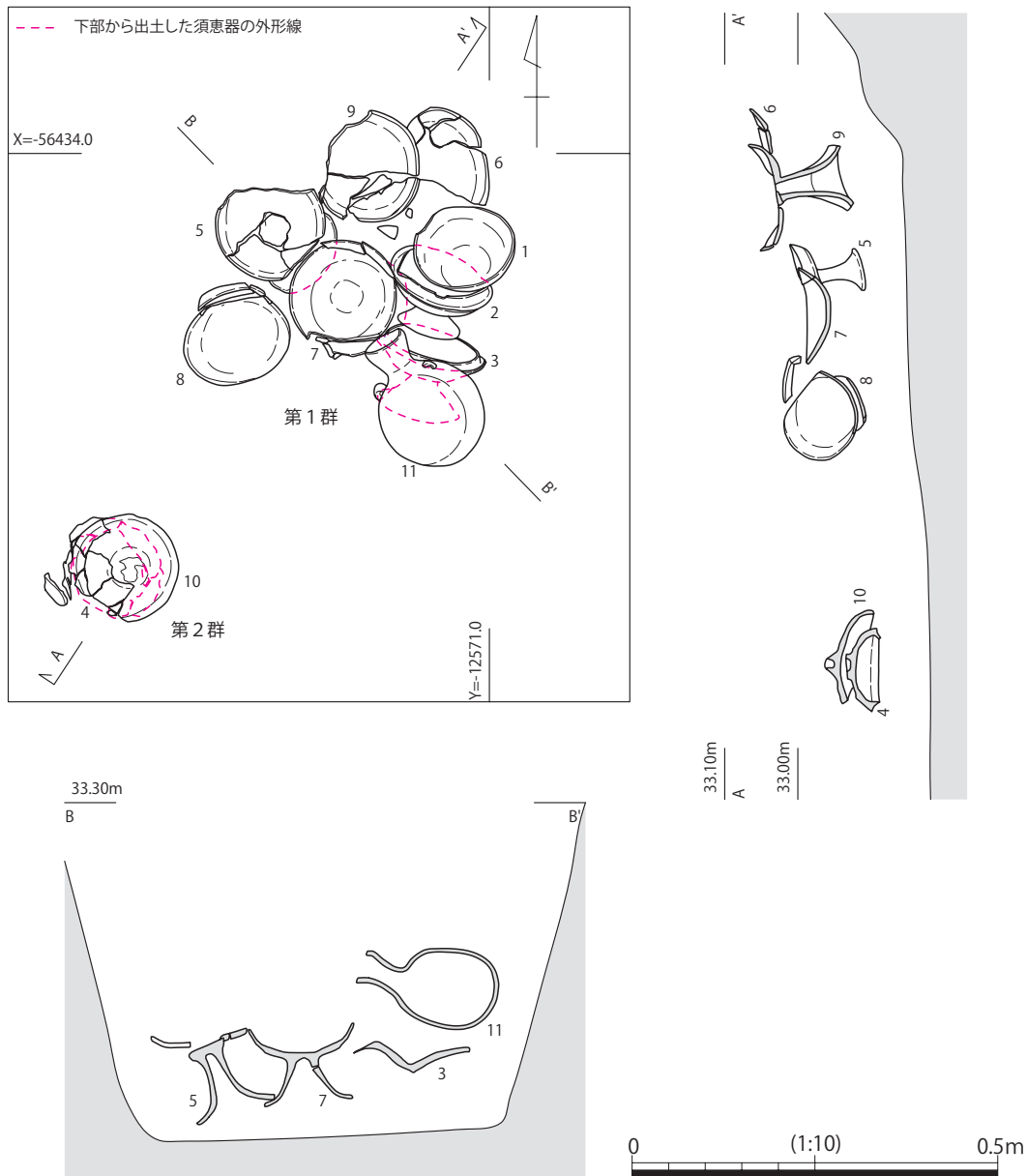
第30図 墓壇2 遺物出土状況 1

巻頭図版 7-1、図版 13-2)。4の高坏は短頸壺の横に直立した状態に置かれていたとみられる。

鉄器 墓壇の中央部と土器群の周辺から鉄器が出土した（第26図）。中央部から出土した鉄器には北西の壁側に集中する一群と南東の壁側に集中する一群がある。10・12・13が北西壁側の一群、11が南東壁側の一群（図版15-2）、9が第2群の土器の上部から出土した。墓壇の中心付近からは鉄器が出土していないことから、遺体の両脇に鉄器が副葬されていたものと考えられる。出土した鉄器は遺存状態が悪く、器種が判明したのは6点である（8～13）。また、SX-1-3層の上半部から出土したものが多くあった。埋没過程で浮き上がり、原位置を留めていないものと思われる。

3. 出土遺物（第28図、図版22-1・23・24・27）

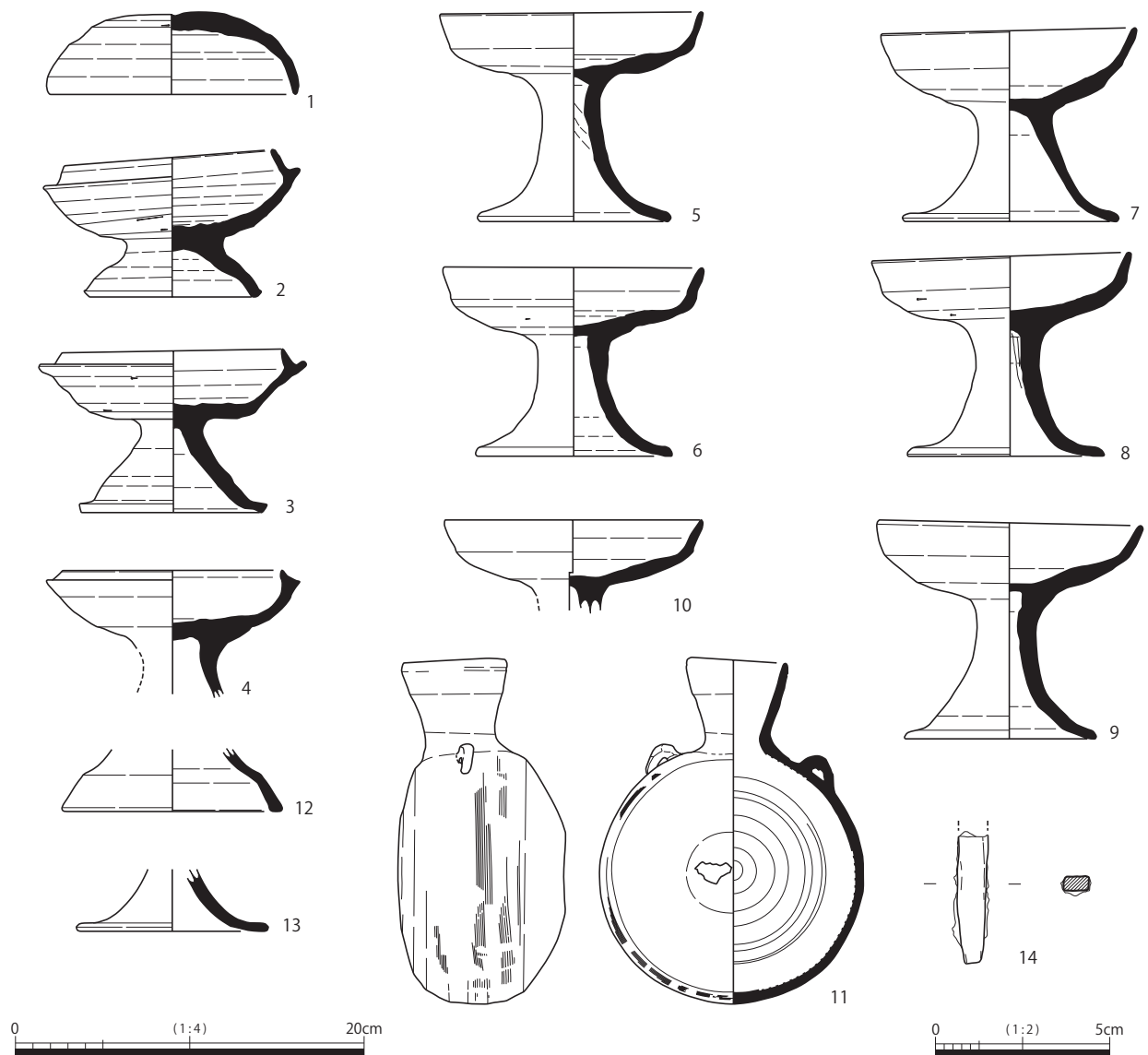
土器（第28図1～7） 1～5が須恵器、6・7が土師器である。1は完形の杯蓋である。天井部が深く沈みこむ。2も坏蓋である。軟質で、かなり風化している。もとは完形と思われるが、接合しない破片が多く、完形に復元することはできなかった。1・2とも、天井部にはヘラ切りの後、ヨコ方向のケズリが施されている。3は坏身である。焼成時に鉄分が還元されておらず赤く発色している。底部はヘラ切り後、ナデ調整、細いヘラ記号が施されている。4は長脚の高坏である。口縁部は直線的で、底部との境に明瞭な段がある。脚部は裾が大きく広がり、中ほどに2条の沈線がめぐる。坏部の底面にはナデが施されているが、一部に薄くカキメの痕が残っている。5は短頸壺である。胴部



第31図 墓壙2遺物出土状況2

上半にカキメ、胴部下半はタタキで形を整えた後に横ナデが施されている。また、底部にはカキメを粗く施した後、ナデが施されている。胴部下半に著しく風化した面が認められる。6は大型の甕の胴部下半の破片である。外面にハケメが施され、内面にはケズリの痕が明瞭に残る。7は小型の甕で、胴部内面にケズリの痕跡が明瞭に残る。

鉄器（第28図8～13）8と9は鉄鏃である。ともに鏃身部のみで平面形は三角形を呈し、扁平なつくりとなっている。8は逆刺をもつ可能性があるが、錆のため詳細は不明である。9は先端と鏃身下部が欠損する。馬具の可能性も考えられたが、他に馬具が出土しなかったことから鉄鏃と判断した。10～13は刀子で、10は刀身部の破片、11～13は刀身から茎の破片である。11は片関で、刃部側が角関となる。刀身はやや内反りになるとみられる。12は片関で、刃部側が撫で関となる。刀身部はやや内反りになるとみられる。13は両関で、ともに角関である。



第 32 図 墓壙 2 出土遺物

第 3 項 墓壙 2 と出土遺物

1. 墓壙の形状と埋土（第 22 ～ 24 ・ 29 ・ 30 図、巻頭図版 3-2 ・ 5-1、図版 11 ・ 12-1）

形状 墓壙 1 の埋土を掘り込む。墓壙 1 と長軸方向を同じくしている（第 22 ～ 24 図）。平面形は長方形を呈す。規模は長軸 1.83 m、短軸 0.7 m、深さ 0.45 m である（第 29 図）。北東側壁面の下方は段掘りとなっている。壁面はやや外に開きながら直線的に立ち上がる。下端も明瞭で、底面は僅かにたわむが、概ね平坦である。掘方は整然とした形状をしており（巻頭図版 5-1）、木棺を伴っていたのであれば、長さ 1.3 m、幅 0.5 m 程度の箱式木棺が埋設されていたと推測される。

埋土 第 29 図 A-A' ・ B-B' 断面に観察できた埋土は SX2-1 ～ SX2-5 層である。SX2-1 ・ SX2-2 層は上部から墓壙内に落ち込んできた土である。このうち SX2-1 層は色調、土質ともに墓壙上盛土の M1 層に近似している。土もしまりがないことから、木棺の腐食に伴う陥没により上部から落ち込んできた堆積と考えた。

その下部に厚く堆積している SX2-3 層も上部から落ち込んできた土であろう。木棺の痕跡を確認することはできなかったが、SX2-3 層の流入によって、多数の須恵器が倒れ込んだ状態で出土しており（第 30 図）、木棺を伴っていた可能性が高いと思われた。直葬であれば、墓壙内に副葬された須恵器は直後に土で覆われてしまうので、その配置が大きく乱れることはなかろう。また、特にこの部分が木の根等の侵入によって攪乱されている状況も見受けられなかった。直葬ならば、SX2-3 層が埋め戻された土ということになるが、この中には埋め戻された土に認められる偽礫は含まれていない。したがって、墓壙内には木棺が設置され、棺内の空間に SX2-3 層が流入するさい、副葬された須恵器が押し倒されたり、つぶされたりしているものと考えられる。

なお、SX2-3 層に覆われた須恵器の中に SX2-5 層上面にほぼ接する状態のものがあつた（第 30 図、巻頭図版 3-2、図版 12-1）。このため木棺が埋設されていたとすれば、SX2-5 層上に設置されていたと推測される。

2. 遺物の出土状況（第 30～32 図、巻頭図版 4、図版 12・13-1）

墓壙 2 から、土器（第 32 図 1～13）と鉄器（同 14）が出土した。これらは、いずれも SX2-3 層に含まれていたものである。

土器 墓壙の北東側から複数の須恵器（1～11）が出土した。1 は坏蓋、2～4 が有蓋の高杯、5～10 が無蓋の高杯、11 は提瓶である。北東側の壁ぎわにまとまる一群（1～3・5～9）と中央にあり北西壁よりにまとまる一群（4・10）がある（第 30・31 図、巻頭図版 4、図版 12-2・13-1）。前者を第 1 群、後者を第 2 群とする（第 31 図）。

第 1 群のうち、1 の蓋は内面を上に向けて出土した。2 の有蓋高杯と重なり合うように出土しており、セット関係にあると考えられる。また、2 の脚部が 3 の有蓋高杯の坏部内面に接していた。11 の提瓶の横に置かれた 3 の上に、1 の蓋を伴う 2 が重ね置きされていたのではなかろうか。そして、その北西側に 5 個体の無蓋高杯（5～9）が並べ置かれていたものと推測される（第 31 図）。一方、第 2 群から出土した 4 の有蓋高杯と 10 の無蓋高杯は、伏せられた状態で重なっていた（第 31 図）。いずれも脚部が折損している。重ね置きするために欠かれたものと考えられる。

鉄器 SX-2-3 層中から第 32 図 14 が出土した。原位置は留めておらず、副葬されたものか、混入したものかは判然としない。

3. 出土遺物（第 32 図・図版 21・25～27）

土器 出土したのは全て須恵器である。1～11 は副葬されていたもの、12・13 はそれらとは別に SX2-3 層から出土したものである。焼成が不十分で軟質なものが多い。1 は完形の坏蓋である。天井部にはヘラ切りの後、ヨコ方向のケズリが施されている。焼成は良好である。2・3 は有蓋高杯である。焼成の良好な個体で、全体にナデ調整が施されている。坏部の底面にはケズリの痕跡が観察できる。4 も有蓋高杯である。脚部を欠く。焼成が不十分で軟質の個体である。ナデ調整が施されているとみられるが、風化して調整が見えない。一方、5～10 は無蓋高杯である。10 は脚部を欠く。5～9 には大きく開く脚部が伴う。いずれも焼成が不十分で軟質である。ナデ調整が施されているが、風化して調整が見えにくい。11 は提瓶である。焼成は良好である。胴部の前面は丁寧にナデ調整が施されている。中央部は器壁が薄く、穴が開いている。側面はナデ調整で仕上げられるが、カキメも

観察できる。背面はほぼ平らになっているが、ヘラ切りの痕等が残り、前面のように丁寧な調整はされていない。12・13は高坏の脚部である。いずれも焼成不十分で軟質である。2の有蓋高坏に屈曲を伴う脚部、5～9のような無蓋高坏に裾が広がる脚部が伴うことから、12が4、13が10に伴う可能性もあるが、接合関係は確認できなかった。

鉄器 14は先端が欠損し、下端はやや細くなる。鉄鏃の茎の可能性はある。

第1表 土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	遺 構	種 類	法量 (cm)			特 徴	焼 成	色 調
				口 径	胴 径	脚台径			
21	8	墓壇上盛土	須恵器 甕	口 径：13.5 残存高：14.6	胴 径：27.8		胴部上半が残存。口縁部、胴部の内外面ナデ。胴部外面にタタキ痕、内面に当具痕が僅かに観察できる。	堅緻	灰～灰オリブ色
21	9	墓壇上盛土	須恵器 甕	口 径：21.8			口縁部が残存。内外面ナデ。外面に1条の浅い沈線がめぐる。	堅緻	オリブ黒～灰オリブ色
21	10	墓壇上盛土	須恵器 無蓋高杯	口 径：11.3 器 高：11.0	脚台径：9.9		ほぼ完形に復元。内外面ナデ。胴部に2条の沈線、底部にはヘラケズリが施されている。焼成時に胎土の鉄分が還元されていない。	良好	橙～明黄褐色
28	1	墓壇1	須恵器 坏蓋	口 径：10.5 器 高：2.8			完形。内外面ナデ、天井部にはヘラケズリが施されている。天井部が沈む。	堅緻	灰色
28	2	墓壇1	須恵器 坏蓋	口 径：14.1 器 高：3.7			1/2程度が接合。内外面ナデ、天井部にはヘラケズリが施されている。	軟質	灰オリブ色
28	3	墓壇1	須恵器 坏身	口 径：12.6 器 高：3.7			完形。内外面ナデ。底面はヘラケズリ後ナデ。焼成時に胎土の鉄分が還元されていない。	良好	赤褐色
28	4	墓壇1	須恵器 無蓋高杯	口 径：12.9 器 高：14.1	脚台径：10.7		完形。内外面ナデ。底面に一部カキメの痕が観察できる。胴部に段、脚部の中ほどに2条の沈線が施されている。	堅緻	灰～灰オリブ色
28	5	墓壇1	須恵器 短頸壺	口 径：12.9 器 高：14.1	脚台径：10.7		完形。内外面ナデ。底面に一部カキメの痕が観察できる。胴部に段、脚部の中ほどに2条の沈線が施されている。	堅緻	灰色
28	6	墓壇1	土師器 甕	胴 径：28.0			胴部片。外面ハケメ。内面ケズリ。外面に黒斑がある。	良好	黄灰色
28	7	墓壇1	土師器 甕	口 径：9.8 残存高：7.9	胴 径：11.2		外面および口縁部内面ナデ（風化しており不明瞭）。胴部内面ケズリ。	堅緻	灰白色
32	1	墓壇2	須恵器 坏蓋	口 径：14.1 器 高：4.6			完形。内外面ナデ、天井部にヘラケズリが施されている。	良好	灰色
32	2	墓壇2	須恵器 有蓋高杯	口 径：12.0 器 高：8.4	脚台径：9.5		完形。内外面ナデ。底面にヘラケズリの痕が観察できる。	堅緻	灰色
32	3	墓壇2	須恵器 有蓋高杯	口 径：12.6 器 高：9.3	脚台径：10.3		完形。内外面ナデ。底面にヘラケズリの痕が観察できる。	堅緻	灰色
32	4	墓壇2	須恵器 有蓋高杯	口 径：12.6 残存高：7.1			脚部を欠く。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	浅黄色
32	5	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：14.9 器 高：12.0	脚台径：10.8		完形。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	浅黄色
32	6	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：14.8 器 高：11.9	脚台径：11.1		完形。内外面ナデ。底面にヘラケズリの痕が観察できる。	軟質	浅黄色
32	7	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：15.0 器 高：12.6	脚台径：10.9		完形。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	浅黄色
32	8	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：14.7 器 高：11.7	脚台径：11.2		完形。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	浅黄色
32	9	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：14.9 器 高：12.0	脚台径：10.8		完形。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	灰オリブ色
32	10	墓壇2	須恵器 無蓋高杯	口 径：14.7 残存高：5.2			脚部を欠く。内外面にはナデが施されているとみられるが、風化が著しい。	軟質	浅黄色
32	11	墓壇2	須恵器 提瓶	口 径：14.1 器 高：4.6			完形。胴部の前面は丁寧なナデ。中央部は器壁が薄く、穴が開く。側面はナデ調整、カキメも観察できる。背面はほぼ平らで、ヘラ切りの痕等が残る。把手は環状。	堅緻	にぶい赤褐色～灰色
32	12	墓壇2	須恵器 高杯	脚台径：12.4 残存高：3.6			脚部。内外面ナデ。	軟質	浅黄色
32	13	墓壇2	須恵器 高杯	脚台径：10.8 残存高：3.6			脚部。内外面ナデ。	軟質	浅黄色

第2表 鉄器観察表

挿図 番号	遺物 番号	遺 構	種 類	法量 (cm)			特 徴
				最大長	最大幅	最大厚	
28	8	墓壇1	鉄鏃	3.70	3.00	0.30	鏃身部。平面形は三角形を呈し、扁平なつくり。逆刺をもつ可能性がある。
28	9	墓壇1	鉄鏃	3.20	3.10	0.30	鏃身部。平面形は三角形を呈し、扁平なつくり。先端と鏃身下部が欠損。
28	10	墓壇1	刀子	4.50	1.80	0.40	刀身部の破片。
28	11	墓壇1	刀子	10.50	2.00	0.50	刀身から茎の破片。刃部側が角閃となり、刀身はやや内反り。
28	12	墓壇1	刀子	8.50	1.60	0.60	刀身から茎の破片。片間で、刃部側が撫で閑。
28	13	墓壇1	刀子	6.30	1.60	0.40	刀身から茎の破片。両間で、ともに角閃。
32	14	墓壇2	不明	3.80	1.05	0.55	先端部を欠損。下端が細くなる。鉄鏃の茎の可能性はある。

第V章 自然科学分析

第1節 宮谷 26 号墳出土須恵器の胎土分析

白石 純（岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科）

1. はじめに

宮谷 26 号墳から出土した 6 世紀末から 7 世紀初頭の須恵器 8 点（第 1 表）に、肉眼観察で胎土や焼成が異なるものがある。そこで自然科学的な胎土分析を実施し、胎土に差異があるかどうか検討した。分析法はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA5120A（IAI・ナテック社製）を用いた。

2. 分析方法と試料

蛍光 X 線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zr の 13 成分である。測定装置は前述した SEA5120A（IAI・ナテック社製）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約 15 トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

3. 蛍光 X 線分析結果について

この分析では測定した 13 成分のうち（第 3 表）、分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca（カルシウム）、K（カリウム）、Si（珪素）、Al（アルミニウム）の 4 成分であった。この 4 成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。第 33 図 K-Ca 散布図は宮谷 26 号墳から出土した 8 点の試料をプロットしたものである。

この散布図では 2 つの胎土にわかれることがわかる。それは Ca 量が約 0.8% より少ないところに分布している試料番号 1、6、8（6 と 8 は墓壙 1 出土）と Ca 量が約 0.8% 以上に分布している試料番号 2、3、4、5、7（2・3・4・5 は墓壙 2 出土）である。また第 34 図 Si-Al 散布図でも 2 つの胎土にわかれ、第 33 図とほぼ同じ分類である。これは出土する遺構が異なることで胎土が異なっていることが推定される。

第 35 図 K-Ca、第 36 図 Si-Al の各散布図では、湖山池南岸に所在する高住平田遺跡（第 6 図 78）出土須恵器との胎土比較を行った。比較した高住平田遺跡の須恵器は飛鳥時代の試料である。その結果、両遺跡出土の須恵器は、ほとんど胎土が一致しなかった。ただ第 35・36 図で胎土が一致するのは 1（甕）と 6（高坏）であった。

第 37 図 K-Ca、第 38 図 Si-Al の各散布図では、島根県大井窯跡群と鳥取県倉吉市鳥越山窯跡群出土須恵器と比較した。窯跡試料の時期は、6 世紀末から 7 世紀後半までのものである。この散布図では生産地領域（大井・鳥越山）を示した散布図に、宮谷 26 号墳出土須恵器をプロットしたものである。

第 37 図 K-Ca 散布図では鳥越山領域に墓壙 2 出土の須恵器が分布しているが、第 38 図 Si-Al 散布図では、どの領域にも分布していない。

4. まとめ

宮谷 26 号墳の墓壙から出土した須恵器には、この分析結果から複数の胎土があることが推定された。

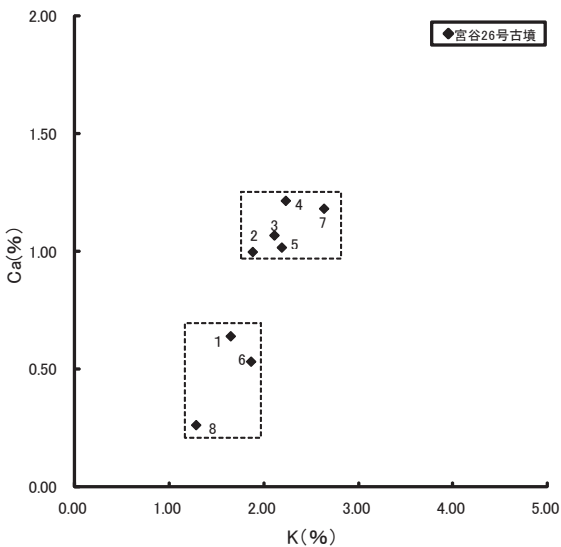
つまり、墓壙 1 と 2 では、胎土が異なり、複数の生産地から供給されたことが推定された。そして、供給された生産地は、今回比較した高住平田遺跡や大井および鳥越山の窯跡群ではないことが推定された。また、墓壙 1 内出土の試料 8 の杯蓋の分析値は、Fe(鉄)の含有量が 21.05%と他の試料に比べて 2 倍以上含まれていた。これは、須恵器試料自体に外から鉄分が浸透したことも推測されるが、現段階では、なぜ鉄分が多いのか不明である。

この胎土分析の機会を与えていただいた濱田竜彦氏をはじめ財団法人鳥取県教育文化財団調査室の職員の方々にはいろいろとお世話になった。記して感謝いたします。

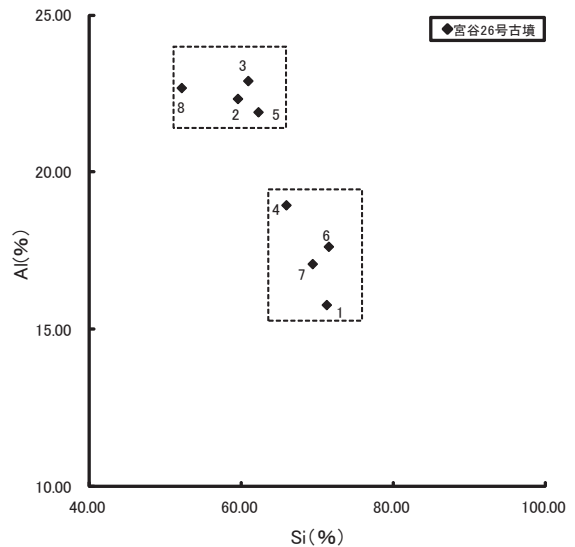
第 3 表 宮谷 26 号墳出土須恵器の胎土分析一覧

試料番号	出土遺構	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1(第21図1)	墓壙上盛土	71.14	1.44	15.79	7.29	0.04	1.32	0.64	0.55	1.64	0.05	31	143	323
2(第32図9)	墓壙2	59.46	1.12	22.35	11.90	0.08	2.04	1.00	0.00	1.88	0.04	10	217	352
3(第32図6)	墓壙2	60.82	1.34	22.91	8.93	0.02	1.98	1.07	0.64	2.11	0.05	15	211	382
4(第32図3)	墓壙2	65.83	0.98	18.96	7.04	0.09	1.82	1.22	1.72	2.23	0.03	15	206	309
5(第32図10)	墓壙2	62.16	1.29	21.92	9.40	0.04	1.38	1.02	0.44	2.18	0.03	24	212	391
6(第28図4)	墓壙1	71.41	1.57	17.64	6.39	0.01	0.43	0.53	0.00	1.86	0.03	32	151	370
7(第28図1)	墓壙1	69.29	1.00	17.09	5.92	0.02	1.01	1.18	1.71	2.63	0.04	31	192	322
8(第28図2)	墓壙1	52.06	1.63	22.69	21.05	0.10	0.76	0.26	0.00	1.28	0.03	21	77	387

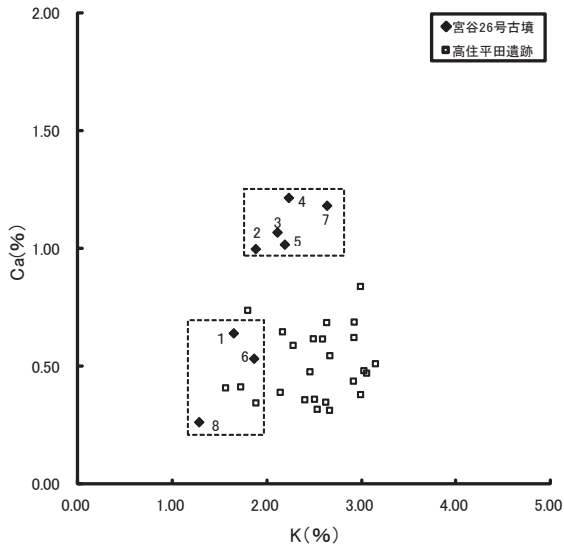
(Si ~ P : %, Rb ~ Zr : ppm)



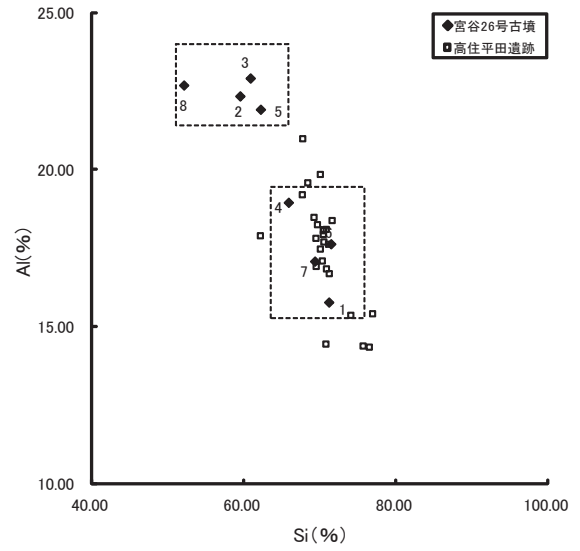
第 33 図 宮谷 26 号墳出土須恵器の比較 1



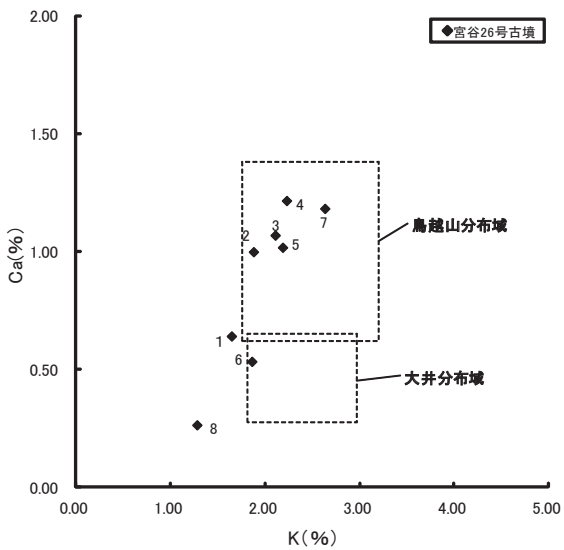
第 34 図 宮谷 26 号墳出土須恵器の比較 2



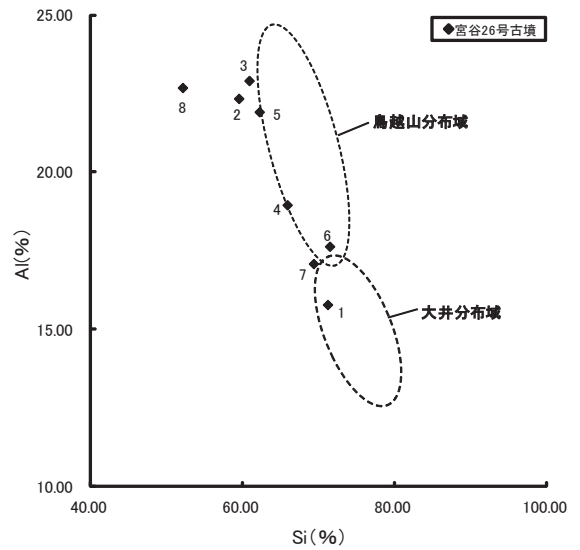
第 35 図 宮谷 26 号墳と高住平田遺跡出土須恵器の比較 1



第 36 図 宮谷 26 号墳と高住平田遺跡出土須恵器の比較 2



第 37 図 宮谷 26 号墳出土須恵器の産地同定 1



第 38 図 宮谷 26 号墳出土須恵器の産地同定 2

第2節 宮谷26号墳におけるテフラ（火山灰）分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

宮谷26号墳の発掘調査では、古墳盛土の下でテフラ層とみられる黄褐色土層（4b-2層）が認められた。ここでは、テフラ層の岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスと普通角閃石の屈折率）を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井2003）などを参照した。

2. 試料

分析試料は、古墳盛土下の黄褐色土層（第15図B-B'の4b-2層）から採取された1点である。

3. 分析方法

テフラの岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスと普通角閃石の屈折率）について、以下の方法で分析を行った。

（1）前処理

湿式用の篩（2～4φ）を用いて水洗しながら各粒径ごとに篩分けを行い、2～3φ（0.250～0.125mm）と3～4φ（0.125～0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行って分析対象とした。

（2）重軽鉱物組成

テトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。重鉱物のフラクションで得られた鉱物粒子は、磁性分離して磁性鉱物を秤量した。重鉱物粒子はレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で重鉱物の鑑定を行った。

（3）火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さ、気泡の形状などを指標にして定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A 型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B 型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C 型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってできた火山ガラス

D 型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の

平行した稜を持つ火山ガラス

E 型：D型よりも管が細長く繊維を束ねた形状を示す火山ガラス

F 型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

(4) 火山ガラスと普通角閃石の屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラス (n_1) と普通角閃石 (n_2) について、温度変化型屈折率測定装置 (古澤地質社製, MAIOT2000) を用いて屈折率測定を行った。火山ガラスについては $3 \sim 4 \phi$ ($0.125 \sim 0.063\text{mm}$) の粒子を対象に、普通角閃石については 3ϕ (0.125mm) よりも粗い粒子を粉砕したものを対象に測定した。

4. 分析結果

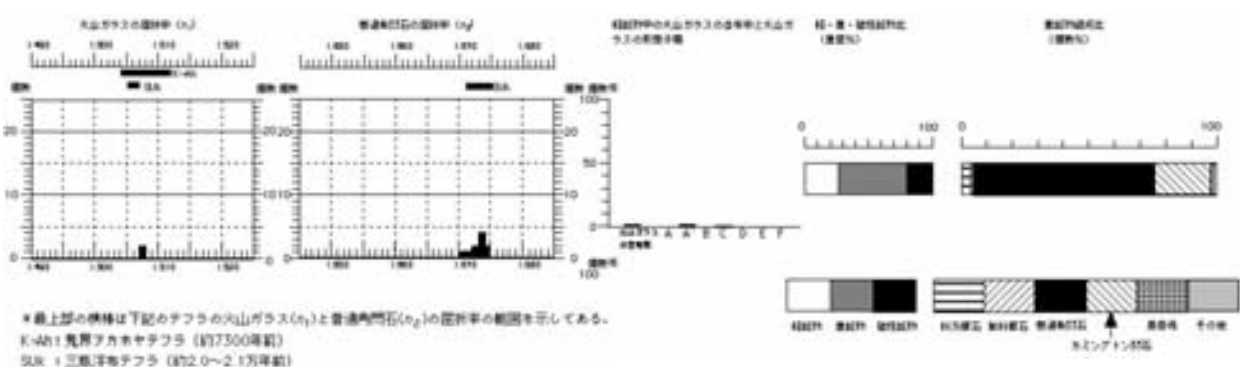
テフラの岩石学的諸特性 (重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスと普通角閃石の屈折率) を第4表および第39図に示す。

黄褐色土層 (4b-2層) から採取された試料では、重鉱物の含有率は 53.7% であり、このうち 71.2% が緑色を呈する普通角閃石 (第40図①)、22.2% がカミングトン閃石 (第40図②)、3.5% が斜方輝石、1.0% が黒雲母 (第40図③)、0.6% が単斜輝石である。火山ガラスの含有率はわずか 1.3% で、A' 型のバブルウォールタイプ (第40図④) および比較的大きい気泡が密集する C 型の火山ガラスがわずかに含まれている。また、火山ガラスの屈折率 (n_1) は 1.5073、普通角閃石の屈折率 (n_2) は 1.6708-1.6747 の範囲である。

5. 考察

古墳盛土下の黄褐色土層 (4b-2層) から採取された試料についてテフラ分析を行った。その結果、重鉱物組成では普通角閃石が大半を占め、カミングトン閃石や黒雲母が特徴的に認められた。このような鉱物組成や普通角閃石の屈折率は、三瓶火山起源の三瓶浮布テフラ (SUK、約 2.0 ~ 2.1 万年前、林・三浦 1987) の特性に類似している。また、本試料からはバブルウォールタイプの火山ガラスがわずかに検出された。火山ガラスの特徴や屈折率の値などから、この火山ガラスは鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah、約 7,300 年前) に由来する可能性が考えられる。

以上のことから、黄褐色土層 (4b-2層) から採取された試料には、三瓶浮布テフラなどの三瓶火山



第39図 宮谷26号墳4b-2層の岩石学的諸特性

起源のテフラ粒子が含まれていると考えられ、鬼界アカホヤ火山灰に由来するテフラ粒子がわずかに含まれている可能性も認められた。

文献

遠藤邦彦・鈴木正章 1980 年「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』No. 13、p.19-30

林正久・三浦 清 1987 年「三瓶火山のテフラ層序とその分布」『島根大学山陰地域研究（自然環境）3』p.43-66

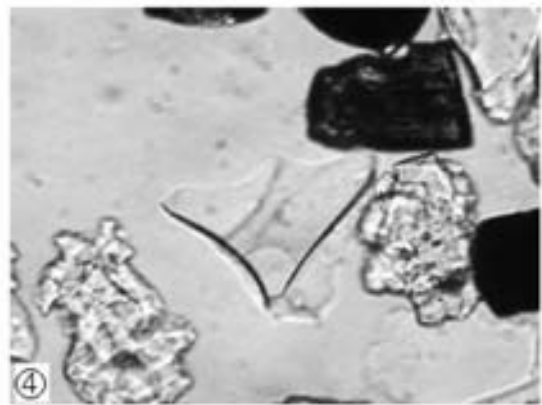
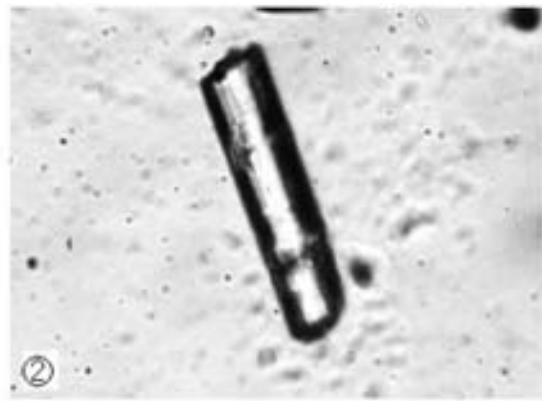
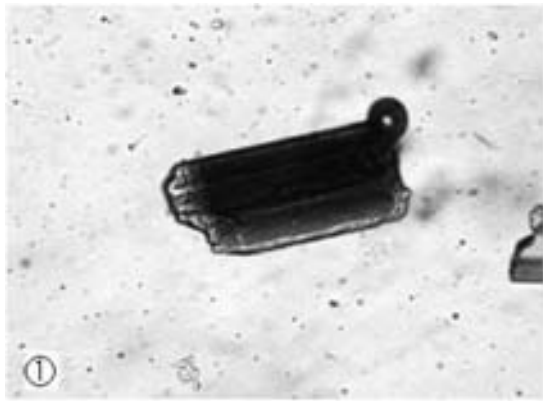
町田 洋・新井房夫 1978 年「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17、p.143-163

町田 洋・新井房夫 2003 年「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—」『東京大学出版会』、p.58-63

吉川周作 1976 年「大阪層群火山灰層について」『地質学雑誌』82、p.497-515

第4表 宮谷 26 号墳 4b-2 層の鉱物分析結果

サンプル名	4b-2層		サンプル名	4b-2層	
試料重量(g)	0.277		重液分離後の回収率(重量%)	98.92	
軽鉱物(g)	0.070		軽鉱物の含有率(重量%)	25.55	
重鉱物(g)	0.147		重鉱物の含有率(重量%)	53.65	
磁性鉱物(g)	0.057		磁性鉱物の含有率(重量%)	20.80	
回収重量合計(g)	0.274		合計	100.00	
重鉱物組成 (個)	斜方輝石	11	重鉱物組成 (個数%)	斜方輝石	3.48
	単斜輝石	2		単斜輝石	0.63
	普通角閃石	225		普通角閃石	71.20
	カミングトン閃石	70		カミングトン閃石	22.15
	黒雲母	3		黒雲母	0.95
	不明及其他	5		不明及其他	1.58
	合計	316		合計	100.00
火山ガラス(個)	5		火山ガラス の形態分類 (個数%)	A型	0.00
非火山ガラス(個)	367			A'型	1.08
火山ガラス形 態分類(個)	A型	0		B型	0.00
	A'型	4		C型	0.27
	B型	0		D型	0.00
	C型	1		E型	0.00
	D型	0		F型	0.00
	E型	0	火山ガラス含有率(個数%)	1.34	
F型	0	火山ガラスの屈折率(n1)	1.5073		
			普通角閃石の屈折率(n2)	1.6708-1.6747	



①普通角閃石（緑色）、②カミングトン閃石、③黒雲母、④火山ガラス（A'型）

第 40 図 テフラの顕微鏡写真

第Ⅵ章 総括

立地と墳形 宮谷 26 号墳は、野坂川流域の平野を一望する丘陵斜面に築かれた径 10～13.5 m の円墳である。斜面に土を寄せるように築造されており、墳丘の後背部に区画の溝を伴わない。そのため墳丘の平面形は半円形を呈している。この古墳は北西に面した丘陵斜面に立地するため、西側からしか視認できない。したがって、半円形であっても、丘陵の下方から見上げたときに必要とされる墳丘の高まりは十分に確保されている。なお、墳丘の築造過程については、第Ⅳ章第 3 節第 3 項にまとめたので、参照いただきたい。

埋葬施設 墳丘の中央部に重複するように設けられた墓壙 1 と墓壙 2 を検出した。墓壙 2 が墓壙 1 の北東端を掘り込む。いずれも長軸方向を同じくしており、墓壙 2 の設置に際し、墓壙 1 の軸線が強く意識されていることがうかがわれる。

墓壙 1 宮谷 26 号墳の築造契機となった埋葬に伴って設けられた墓壙である。長軸が約 3.5 m を測る長大な墓壙で、北東—南西を主軸とし、等高線に概ね平行している。木棺の痕跡は確認できなかったが、掘方の形状から、長さ 3 m 以上、幅 1 m ほどの割竹形ないし舟形を呈す刳抜式木棺が直葬されていたと推定される。墓壙内に人骨は全く遺存しておらず、頭位は不明である。また、墓壙内には須恵器（坏身・蓋、高坏、短頸壺）、土師器（甕）、鉄器（鉄鏃、刀子）が副葬されていた。墓壙の南西側に副葬されていた須恵器には、TK209 型式（田辺 1981）、Ⅱ型式第 5 段階（中村 1981）に類似した特徴をもつものが存在している。したがって、古墳の築造および墓壙 1 への埋葬は、6 世紀末から 7 世紀初頭に行われたものであろう。

墓壙 2 宮谷 26 号墳への追葬に伴う墓壙である。墓壙 1 と同じく、北東—南西を主軸とし、等高線に平行している。埋土の観察からは、木棺の腐食により墓壙 1 内が完全に埋没した後に墓壙 2 が掘削されたと考えられる。木棺の痕跡は確認できなかったが、掘方の形状から箱式木棺が直葬されていたとみられる。墓壙内に人骨は全く遺存しておらず、頭位は不明である。推定される箱式木棺の規模は長さ 1.3 m、幅 0.5 m、墓壙の北東側には高坏を主体とする大量の須恵器が副葬されており、棺内の埋葬空間は最大でも長さ 1 m、幅 0.25 m 程しか確保できない。小児が埋葬されていた可能性も考えられる。なお、副葬されていた須恵器には、墓壙 1 と同じく、TK209 型式（田辺 1981）、Ⅱ型式第 5 段階（中村 1981）に類似した特徴をもつものが存在している。したがって、墓壙 2 への埋葬も TK209 型式、Ⅱ型式第 5 段階の須恵器が製作・使用された時間幅の中で行われたものと推定される。

以上、この度の発掘調査を通じて、宮谷 26 号墳が古墳時代後期の終わり頃に築造された円墳であることが判明した。鳥取市嶋や宮谷地内に所在する古墳については、これまで築造時期や埋葬施設の詳細が分かるものがなかった。その意味で、宮谷 26 号墳の発掘調査成果は、今後、野坂川東岸に分布する古墳群を評価するための第一歩となるものである。また、第Ⅱ章第 3 節で検討を加えた古墳群のうち、宮谷 26 号墳を含むⅡ B -2 群には、地表面の観察により横穴式石室を伴うと推測される古墳は確認ができない。6 世紀末の鳥取平野には既に横穴式石室を導入した古墳が散見される。宮谷 26 号墳における木棺直葬は、鳥取平野の後期古墳における階層性などを知るうえで示唆に富む知見である。

最後になりますが、ご支援いただきました多くの方に深謝申し上げます。

圖 版
PLATE



1 調査地および宮谷古墳群：野坂川の上流側からの遠景（南西から）



2 調査地および古海・宮谷・本高古墳群：調査前の遠景（西から）

図版 2



1 調査地および古海古墳群：調査後の遠景（南西から）



2 調査地および宮谷古墳群：調査前の遠景（北西から）



1 調査地：野坂川西岸からみた調査前の遠景（北西から）



2 調査地：野坂川西岸からみた調査後の遠景（北西から）



1 墳丘：宮谷 27 号墳からみた調査前の墳丘側面（南西から）



2 墳丘：宮谷 27 号墳からみた調査後の墳丘側面（南西から）



1 墳丘：測量中の墳丘側面（北東から）



2 墳丘：調査後の墳丘側面（北東から）



1 墳丘：調査後の墳丘（北西から）



2 墳丘からの眺望：嶋集落および野坂川の上流部を望む



1 試掘トレンチ：埋土除去状況（南東から）



2 試掘トレンチ：埋葬施設に設定されたサブトレンチ（南東から）



1 試掘トレンチ：原位置に保存されていた土器片の再検出状況（南西から）



2 墓壙上盛土：土器出土状況（南東から）



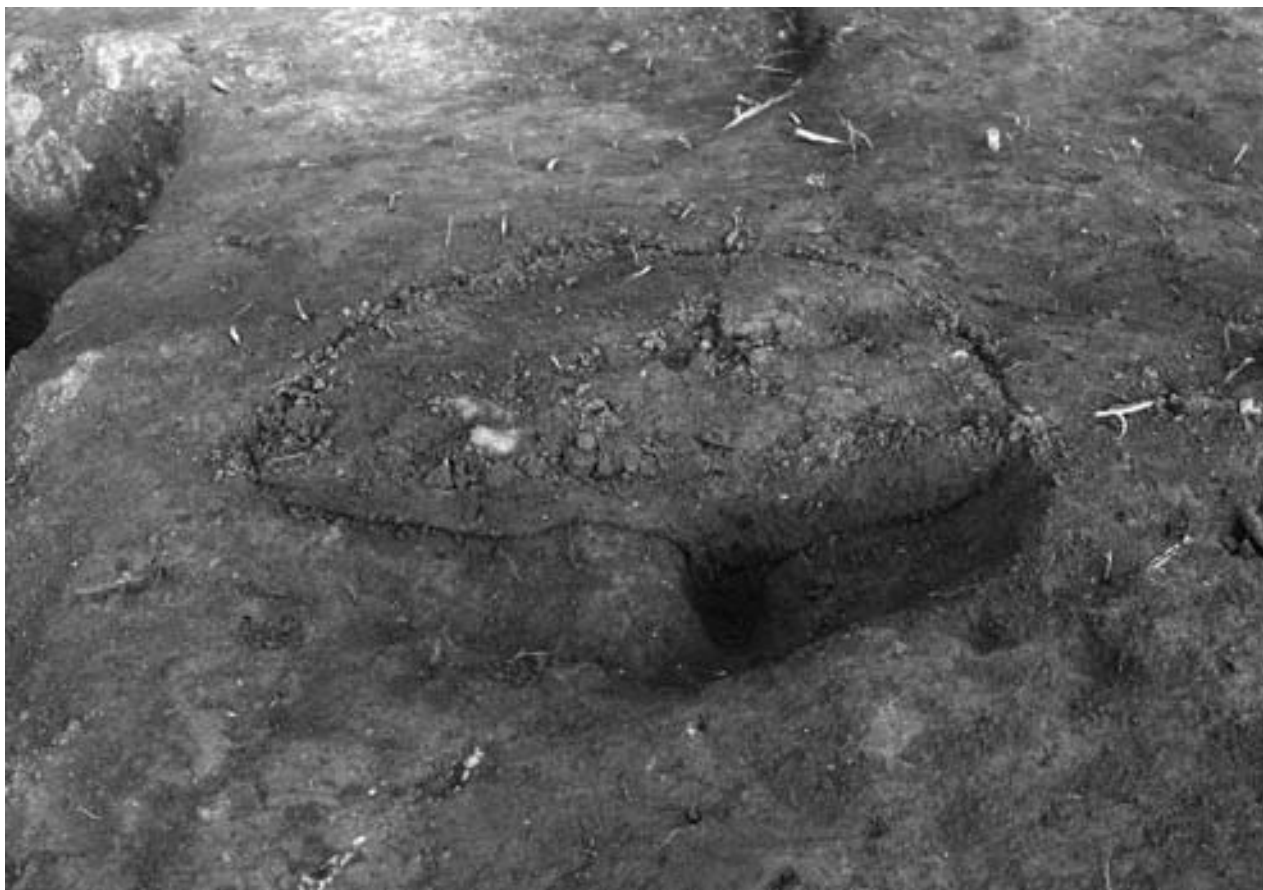
1 墓壙上盛土：土器出土状況（南西から）



2 墓壙上盛土：土坑上面における土器（第 21 図 1 等）出土状況（南東から）



1 墓壙上盛土：土器（第21図3）出土状況（南西から）



2 墓壙上盛土：土坑検出状況および土層断面（北西から）



1 墓壙 2 : 第 30 図 A-A' 断面および土器出土状況 (南から)



2 墓壙 1・2 : 第 23 図 A-A' 断面、墓壙 2 を中心に (北西から)



1 墓壙2：第30図A-A'断面、土器出土部分を中心に（南東から）



2 墓壙2：土器出土状況全景（南東から）



1 墓壙 2 : 土器出土状況 (南西から)



2 墓壙 2 : 第 26 図 A-A' 断面、土器出土部分を中心に (北西から)



1 墓壙 1 : 土器出土状況 (北西から)



2 墓壙 1 : 土器出土状況 (南西から)



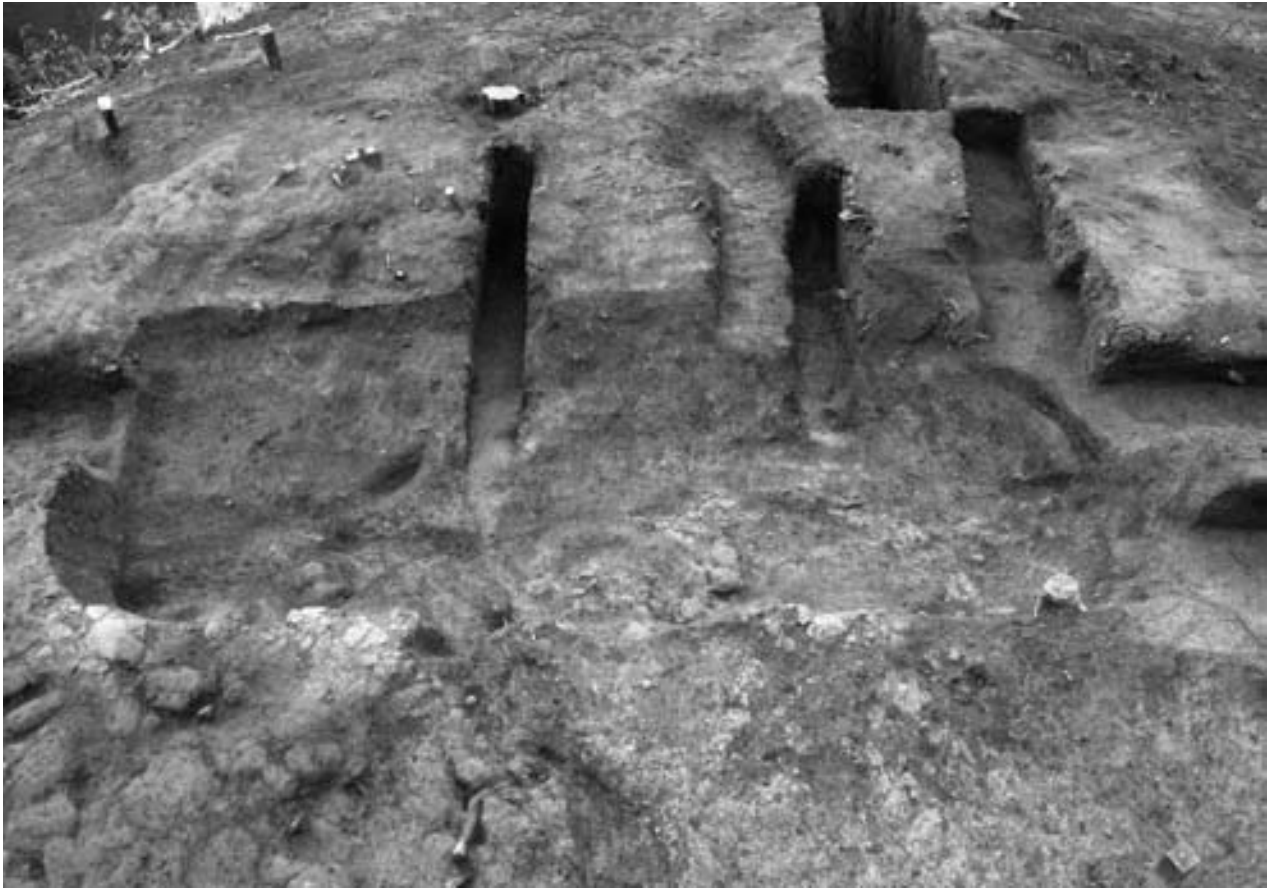
3 墓壙 1 : 土器出土状況 (南東から)



1 墓壙1：土器出土状況（南西から）



2 墓墳2：鉄器（第28図12）出土状況（北西から）



1 墓壙 1 : 完掘状況 (南東から)



2 墓壙 1 完掘時の墳丘頂部平坦面 (南東から)



1 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面（南西から）



2 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面（南東から）



1 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面、M2-4・6・7 層を中心に（南西から）



2 墳丘盛土：第 15 図 A-A' 断面、墳丘裾部、M2-5・6 層を中心に（西から）



1 墳丘盛土および埋葬施設 1・2：第 15 図 B-B' 断面、墓壙 2 を中心に（北西から）



2 墳丘盛土：第 15 図 B-B' 断面、墳丘北東側（西から）



1 墳丘盛土：第 15 図 B-B' 断面、墳丘南西側（西から）



2 墳丘盛土：第 15 図 C-C' 断面（北東から）



墓壙 2 出土土器



1 墓壙 1 出土土器



2 墓壙上盛土 出土土器



第21图 1



第21图 2



第21图 3



第28图 1



第28图 3



第28图 2



第28图 3

墓壙上盛土、墓壙 1 出土土器





墓壙 2 出土土器 1



墓壙 2 出土土器 2



第28图9



第28图10



第28图13



第28图11



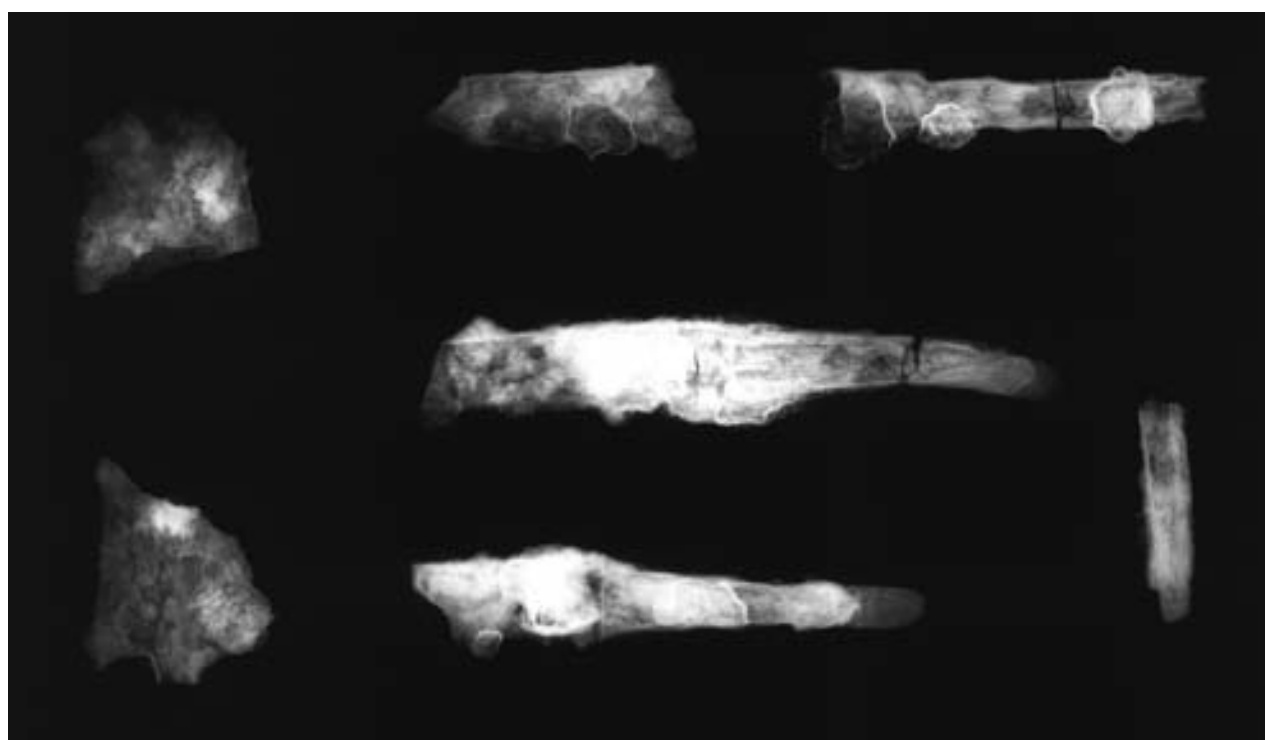
第28图8



第28图12



第21图14



墓壙1・2出土鉄器

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやだに26ごうふん							
書名	宮谷26号墳							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	濱田 竜彦、山梨 千晶、白石 純、株式会社古環境研究所							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 TEL(0857)51-7552							
発行年月日	西暦2012年(平成24年)3月30日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやだに 宮谷26号墳	とっとりけん 鳥取県 とっとりししま 鳥取市嶋 あざし 字下モ かわむこう 川向 394-1	31201	1-0459	35° 29' 28"	134° 11' 41"	20100720 { 20101005	700㎡	国道9号 (鳥取西道路)道路 改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
宮谷26号墳	古墳	古墳時代後期		古墳 1基		土師器 須恵器 鉄製品		
要約	<p>宮谷26号墳は野坂川流域の平野を一望する丘陵斜面に築かれた径10～13.5mの円墳である。墳丘は斜面に土を寄せるように築造され、後背の斜面と墳丘を画す溝を伴わない。そのため墳丘の平面形は半円形を呈す。墳丘の中央部で重複する2基の墓壇(墓壇1・2)を検出した。墓壇1は宮谷26号墳の築造契機となった埋葬施設で、北東-南西を主軸とする。刳拔式木棺の直葬と考えられる。須恵器(坏身・蓋、高坏、短頸壺)、土師器(甕)、鉄器(鉄鏃、刀子)等が副葬されていた。須恵器はTK209型式(田辺1981)に類似した特徴をもつ。墓壇2は追葬に伴う埋葬施設である。墓壇1と同じく、北東-南西を主軸とする。箱式木棺の直葬とみられる。高坏を主体とする大量の須恵器が副葬されていた。須恵器はTK209型式(田辺1981)に類似した特徴をもつ。よって、6世紀末～7世紀初頭に築造された古墳と考えられる。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県鳥取市

宮谷 26 号 墳

発行 平成24（2012）年3月30日
編集 財団法人 鳥取県教育文化財団
発行 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市1丁目271番地
電話（0857）26-7525
印刷 勝美印刷株式会社

